

# 小折古墳群の研究

## —江南市天王山遺跡の家形埴輪—

早野浩二

小折古墳群中の江南市天王山遺跡（「富士塚の西」）においては、尾張型円筒埴輪と形象埴輪が採集されている。その形象埴輪を鱗状装飾（鱗飾り）を表現する家形埴輪として、類例との比較から推定復元案、製作工程案を示し、時期を東山11号窯式期から東山10号窯式期と推定した。村絵図、地籍図や空中写真からは、消滅した前方後円墳の存在が想定され、天王山遺跡（古墳）から、江南市曾本二子山古墳、大口町いわき塚古墳に続く有力古墳の系列を把握した。

### 1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターは令和元年度に白木遺跡（丹羽郡大口町豊田一丁目）、令和2・3年度に南山町遺跡（江南市南山町西・中・東）の発掘調査を実施した。南山町遺跡に隣接する天王山遺跡（南山町中）においては過去に埴輪が採集され、現在、江南市教育委員会が保管している（江南市1983、赤塚2001）。南山町遺跡・白木遺跡の発掘調査に関連して天王山遺跡の遺物を調査したところ、特に形象埴輪について重要な知見があったので、以下にその内容を報告する。

### 2. 天王山遺跡

天王山遺跡は五条川右岸の自然堤防上に立地する。周辺には富士塚古墳、曾本二子山古墳（以上、江南市）、いわき塚古墳、神福神社古墳（以上、大口町）等の古墳が分布し、小折古墳群とも総称されている。遺跡は小折字天王山（「富士塚の西」）において、昭和32年の道路改修時に山崎真臣氏が埴輪等の遺物を採取したことに伴い、認定、登録された。他に須恵器、瓦塔（一宮市博物館保管）も出土したとされるが、瓦塔は注記からすると、他の遺跡から出土した可能性も考慮する必要がある。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪がある（図1・写真1）。いずれも土師質で、硬質に焼成される。

円筒埴輪（1～11）は規格、段数が判明す

る個体はないが、いずれも2突帯3段構成と思われる通有の尾張型円筒埴輪である。突帯は低い断面「M」字形で、外面に回転ヨコハケ後、底部付近に回転ケズリを施す。10は外面に紐ずれ痕と思われる圧痕が認められる（1～5は『市史』本文編に掲載された実測図、6～11がそれに追加して新たに作成した実測図である）。

### 3. 家形埴輪

#### 種類・部位

家形埴輪（12）は、すでに実測図（拓本・断面）と写真も掲載され、「盾形埴輪」ともされている。今回、改めて鱗状装飾（鱗飾り）を表現する家形埴輪の上屋根（大棟）部分として図示した。大棟に多数の鱗状装飾を表現する家形埴輪は、尾張型円筒埴輪を伴う味美二子山古墳（全長約100mの前方後円墳）、小幡茶臼山古墳（全長約81mの前方後円墳）、外山3号墳（径約25mの造出し付円墳）に確認されている。味美古墳群に埴輪を供給したことが判明している下原古窯の鱗状装飾も同様の家形埴輪の一部と考えられる（図2）。

特に上屋根の狭長な三角形構造は味美二子山古墳（1）、大棟を逆V字形にして頂部に粘土を充填する成形は下原古窯の家形埴輪（5）によく類似する。鱗飾り、鱗状装飾がある家形埴輪は比較対象を含めて多くが入母屋造であることから、天王山遺跡の家形埴輪も入母屋造であった可能性が高い。

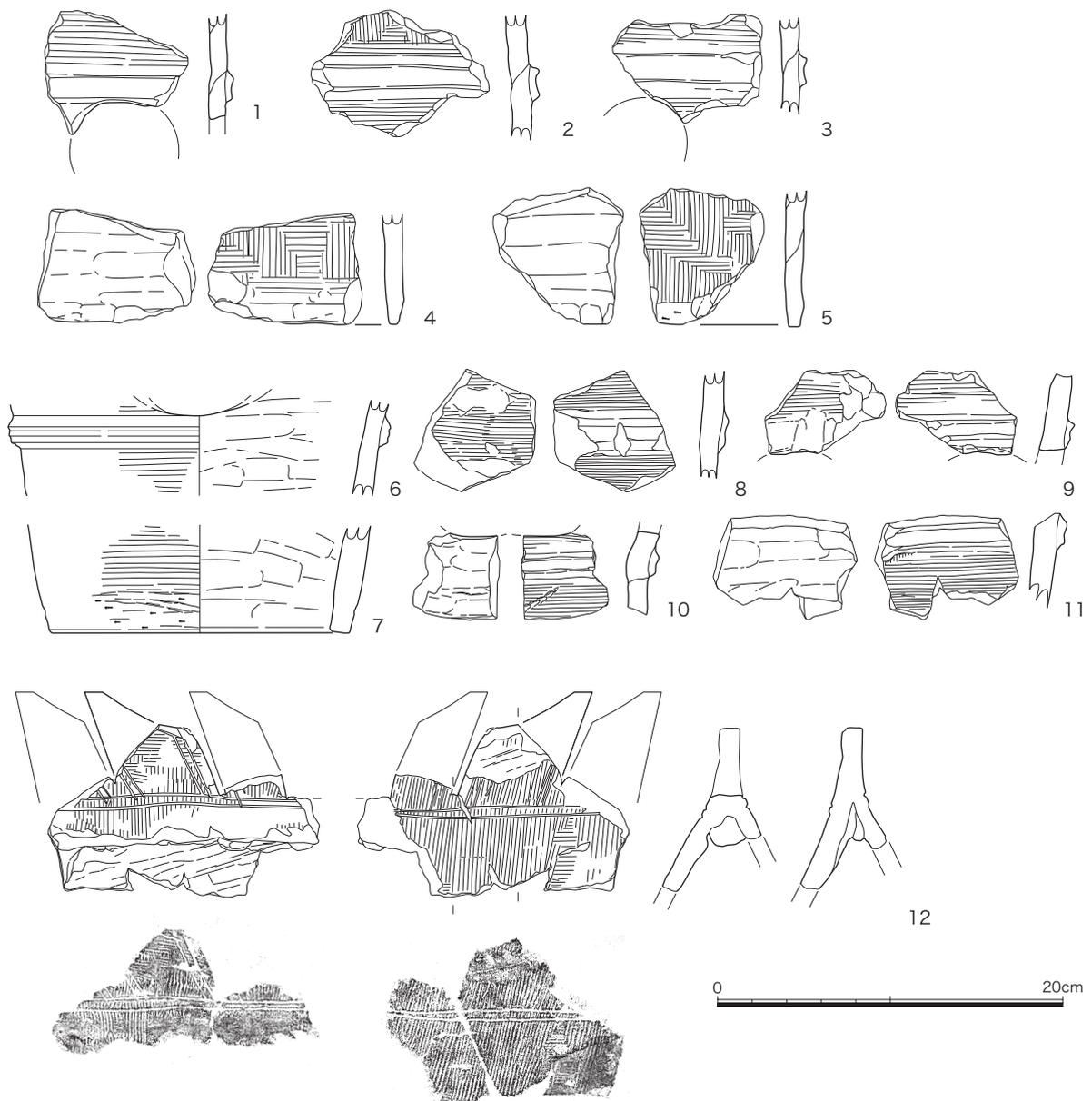


図1 天王山遺跡出土埴輪

### 鱗状装飾・棟覆

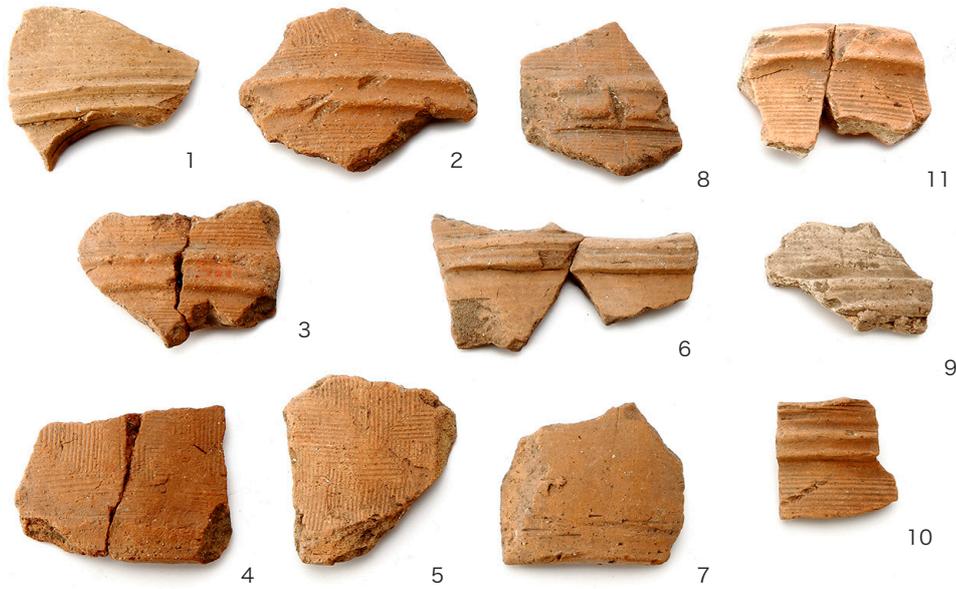
大棟上の鱗状装飾は同一方向に傾斜する3枚分が確認され、切削により設けられた鱗状装飾相互の間隔はかなり狭小であるが、折損部分の一端には水平方向に切削した端面が確認される。この部分が大棟の中央付近に相当し、左右対称に連続した鱗状装飾を表現したことが想定される。この配置表現は中央付近の対向する鱗状装飾間の間隔がやや広く設けられる点を含めて、味美二子山古墳1類家形埴輪(1)に類似する。(かなり誇張された)特異な短冊状の表現とは異なるものの、鱗状装飾の形状は(左右

対称と想定される)同2類家形埴輪の表現(2~4)、小幡長塚古墳の表現(8)に類似する。

鱗状装飾は二本一对の刻線で縁取りするが、その下端に接して同様の刻線を水平方向に施すことで押縁の水平材をも表現する。棟覆に網代表現はなく、鱗状装飾部分を含めて全面にヨコハケ後、タテハケを施す。

### 推定復元

左右対称とした場合の妻側の一端には平坦面が認められる。この面は妻転び成形に伴う成形、乾燥単位で剥離した面と考えられる。試みに鱗状装飾の配置表現がよく類似する味美二子



1～11. 円筒埴輪

12. 家形埴輪 12A. A面 12B. B面 12C. 妻転び成形の乾燥単位と頂部内面の補強 12D. 鱗状装飾（鱗飾り）の切削

写真1 いわき塚古墳の遺物

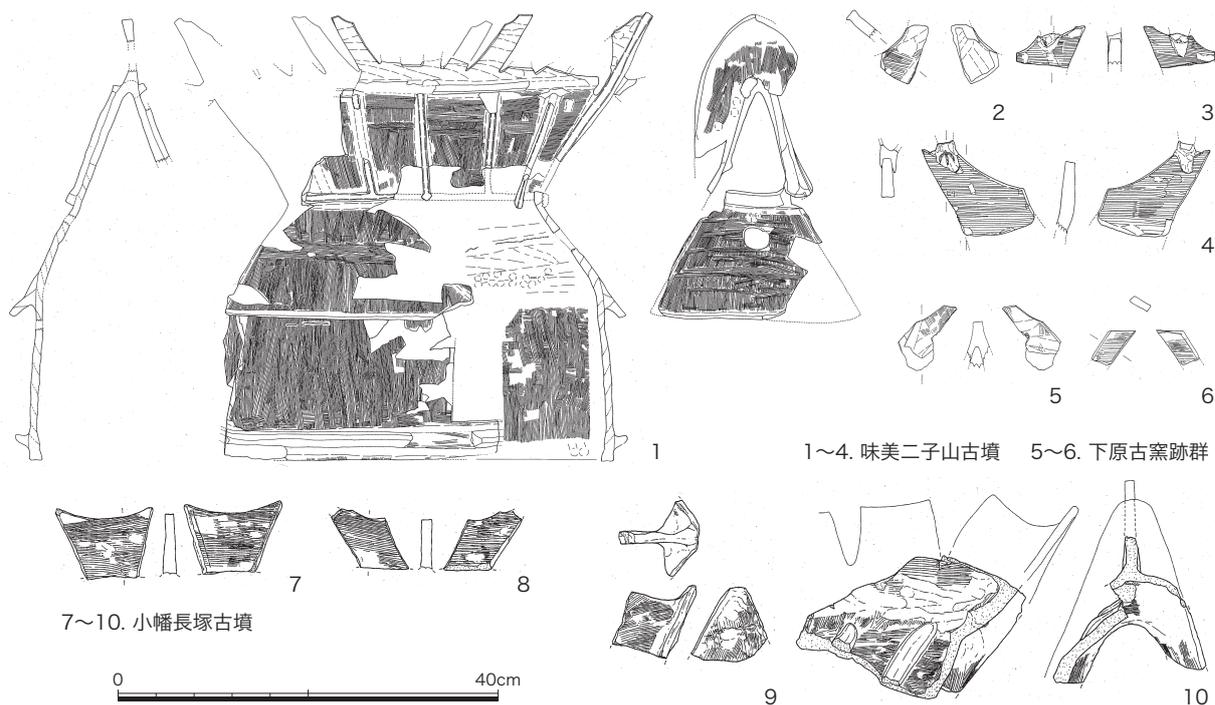


図2 鱗状装飾（鱗飾り）を表現する家形埴輪の諸例

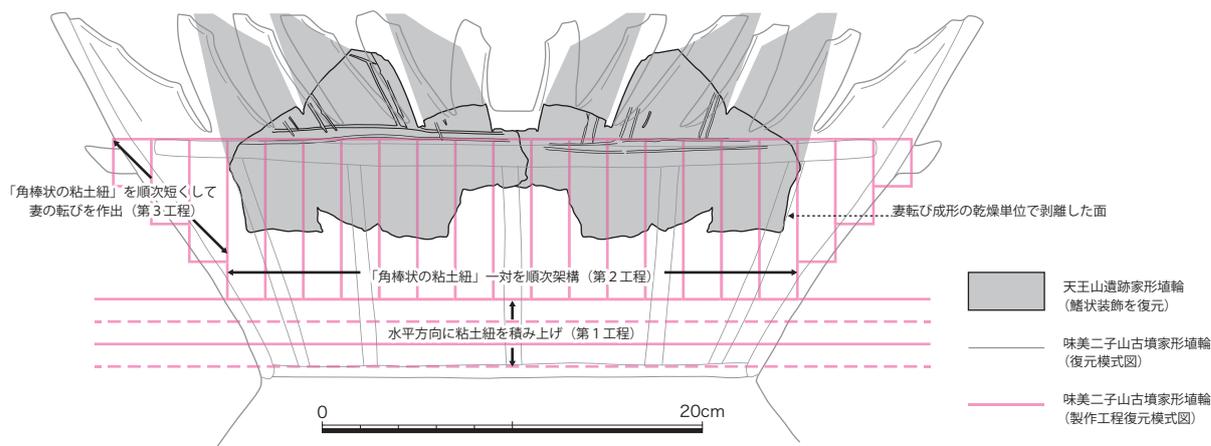


図3 天王山遺跡と味美二子山古墳の家形埴輪の比較（味美二子山古墳の家形埴輪の製作工程）

山古墳1類家形埴輪の想定復元と天王山遺跡の家形埴輪を同一縮尺で重ねると、味美二子山古墳の押縁の表現が刻線ではなく突帯である点は異なるが、水平材の位置、大棟と妻転びとの成形単位の位置もよく一致することが分かる（図3）。翻って、天王山遺跡の家形埴輪は味美二子山古墳の家形埴輪と類似した構造、表現、大きさが想定される。

#### 製作工程

類似を指摘した味美二子山古墳の1類家形埴輪については、詳細な観察により製作工程が示

されている。破風板、鱗状装飾等の部位を付加するまでの上屋根の製作工程については、妻側を閉塞しない平側のみでの成形で、水平方向に粘土紐を積み上げ、上屋根の下半までが完成（第1工程）、「角棒状の粘土紐」一対を順次架構し、水平方向に引き延しながら接合（を強固にする）、これを繰り返して妻転びを除く大棟までが完成（第2工程）、「角棒状の粘土紐」を順次短くして妻の転びを作出（第3工程）、となる（図3）。

天王山遺跡の家形埴輪は「角棒状の粘土紐」

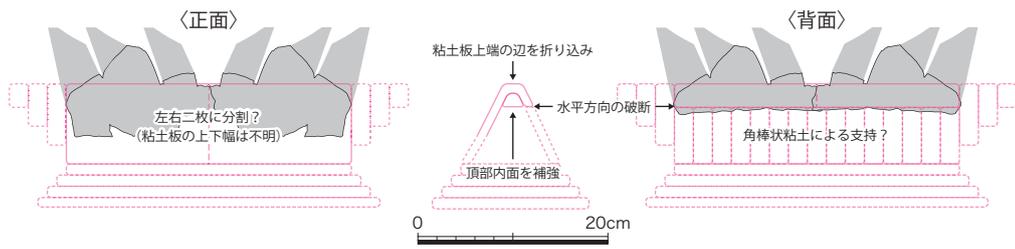


図4 天王山遺跡家形埴輪製作復元(案)

の顕著な接合痕(密着させるだけに近い接合)が認められないことから、少なくとも一方の(妻転びを除く)大棟は一枚分、または左右一对の板状の粘土を使用しているようである。もう一方はほぼ水平方向に破断していることからすると、一方の屋根を支持するようにして、もう一方に「角棒状の粘土紐」を用いて成形した可能性がある(図4)。

**時期**

味美二子山古墳の家形埴輪が鱗状装飾をより誇張し、鱗飾の特徴でもある刻線の表現を省略することからすると、それに先行する可能性もあるが、個体差と考える余地もある。味美二子

山古墳の築造時期を東山10号窯式期とすれば、味美二子山古墳の家形埴輪が出土との類似、あるいはそれにやや先行する可能性から、天王山遺跡の埴輪は東山11号窯式期から東山10号窯式期として大過ない。この理解は尾張型円筒埴輪の諸要素とも矛盾しない。

山崎真臣氏が「木賀、小折富士塚周辺」(現在の長塚遺跡、天王山遺跡に該当)で採集した資料中には、東山11号窯式期から東山10号窯式期の須恵器高杯がある(図5)。天王山遺跡の埴輪に伴う可能性もある。

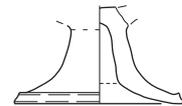


図5 「木賀、小折富士塚周辺」採集須恵器高杯

**性格**

鱗飾りがある家形埴輪の大きさは堅魚木がある建物をも凌ぐ事例から、鱗飾りは堅魚木よりも格式の高い棟飾りであったともされる(清水1988、三輪・宮本1995)。尾張型埴輪に伴う鱗状装飾がある家形埴輪の事例は、外山3号墳が造出し付円墳である以外、味美二子山古墳、小幡長塚古墳で、いずれも大型の前方後円墳である。天王山遺跡についても相応の古墳の存在が想定される。

**4. 天王山遺跡の古墳**

年不詳の丹羽郡小折村絵図(徳川林政史研究所)には、岩倉街道(柳街道、現県道小口岩倉線)を挟んで「富士塚」の南西に「村上山」が描かれ、般若寺北に「天王社」がある(図6)。「天



図6 年不詳丹羽郡小折村絵図(徳川林政史研究所)



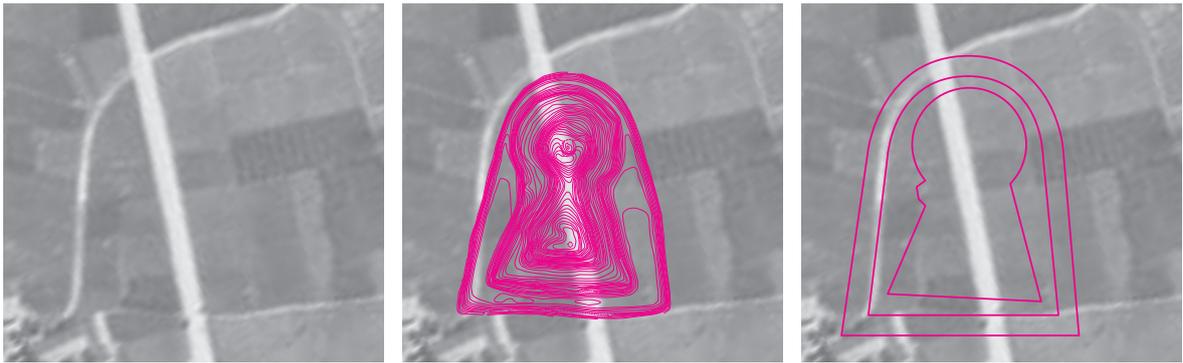
明治17年地籍図(岩倉街道県道制定前)

0 100m



昭和21年空中写真(岩倉街道県道制定後・県道小口岩倉線制定前)  
 図7 明治17年地籍図、昭和21年空中写真と天王山遺跡周辺

0 100m



天王山遺跡（昭和 21 年空中写真）

天王山遺跡 二子山古墳 ×1/2

天王山遺跡 小幡長塚古墳 ×2/3

図 8 天王山遺跡に想定される古墳（盾形の痕跡）と味美二子山古墳、小幡長塚古墳との比較（1:2,000）

王社」は生駒氏五代が勧請したと伝わり、字名である「天王山」の由来となった（絵図には他に「宝頂山」や幾つかの「山」、「念佛塚」、「経塚」が記載されている富士塚古墳周辺に点在するこれらの「山」、「塚」も小折古墳群を構成する古墳であった可能性がある）。「富士塚の西」の天王山遺跡で採集された埴輪は、ひときわ大きい絵図上の「村上山」に伴っていたことが想定される。

明治 17 年の地籍図には「字富士塚」の「塚」の南西に盾形の区画が認められ、昭和 21 年に米軍が撮影した空中写真には直線的な岩倉街道に貫かれた盾形の周濠と思われる痕跡を判読することも可能である（図 7）。国道岩倉街道は明治 18 年に県道に定められたことに伴って明治 19 年に改修された際（その翌年に竣工）、「村上山」の墳丘上を横切るように付け替えられ、その改修時に墳丘が大きく損壊した可能性がある。さらに昭和 34 年、現在の県道 17 号小口岩倉線に制定される前の大規模な改修時（昭和 32 年）に古墳は完全に滅失し、その際に埴輪が採集されたのであろう。

地籍図や米軍による空中写真に認められる盾形の周濠の痕跡は長さ約 80m で、平面形と規模は味美二子山古墳の約二分の一、小幡長塚古墳の約三分の二に相当することからすると、「富士塚の西」で採集され埴輪が伴っていた古墳は 50m 程度の前方後円墳であったとも推測される（図 8）。絵図上の「村上山」が「富士塚」よりも大きく描かれていることからも了とされる。

## 5. おわりに

天王山遺跡の埴輪に鱗状装飾を表現する家形埴輪の存在を確認し、その評価を踏まえて対応の古墳の存在を想定した。周辺には富士塚古墳（前方後円墳？）、金銅装馬具を副葬する曾本二子山古墳（全長約 60m の前方後円墳）、刃関に花文を象嵌した大刀と三角穂式鉄鉾（図 9）を副葬するいわき塚古墳（径約 21m の円墳）、神福神社古墳（前方後円墳？）等の有力な古墳が分布し、小折古墳群を構成する。

天王山遺跡に東山 11 号窯式期から東山 10 号窯式期（TK47 型式期から MT15 型式期）の 50m 程度の前方後円墳の存在を想定することにより、東山 61 号窯式期（TK10 型式期）の曾本二子山古墳、蝮ヶ池窯期（TK43 型式期）のいわき塚古墳に続く（築造時期、墳形が不明な富士塚古墳、神福神社古墳を含めた）有力古墳の系列が把握されることになる。曾本二子山古墳の段階に埴輪の使用が停止され、いわき塚古墳の段階に有力な古墳が大型円墳に転換する過程も改めて確認される。天王山遺跡の埴輪は小折古墳群、古墳時代後期の尾張に対する評価に大きく資するであろう。

天王山遺跡の埴輪の資料調査に際しては、江南市歴史民俗資料館佐々有三館長に格別な配慮を賜った。その他、赤塚次郎、浅田博造、池口太智、服部哲也の各氏からもご教示を頂いた。末尾ながら記して謝意を表する。

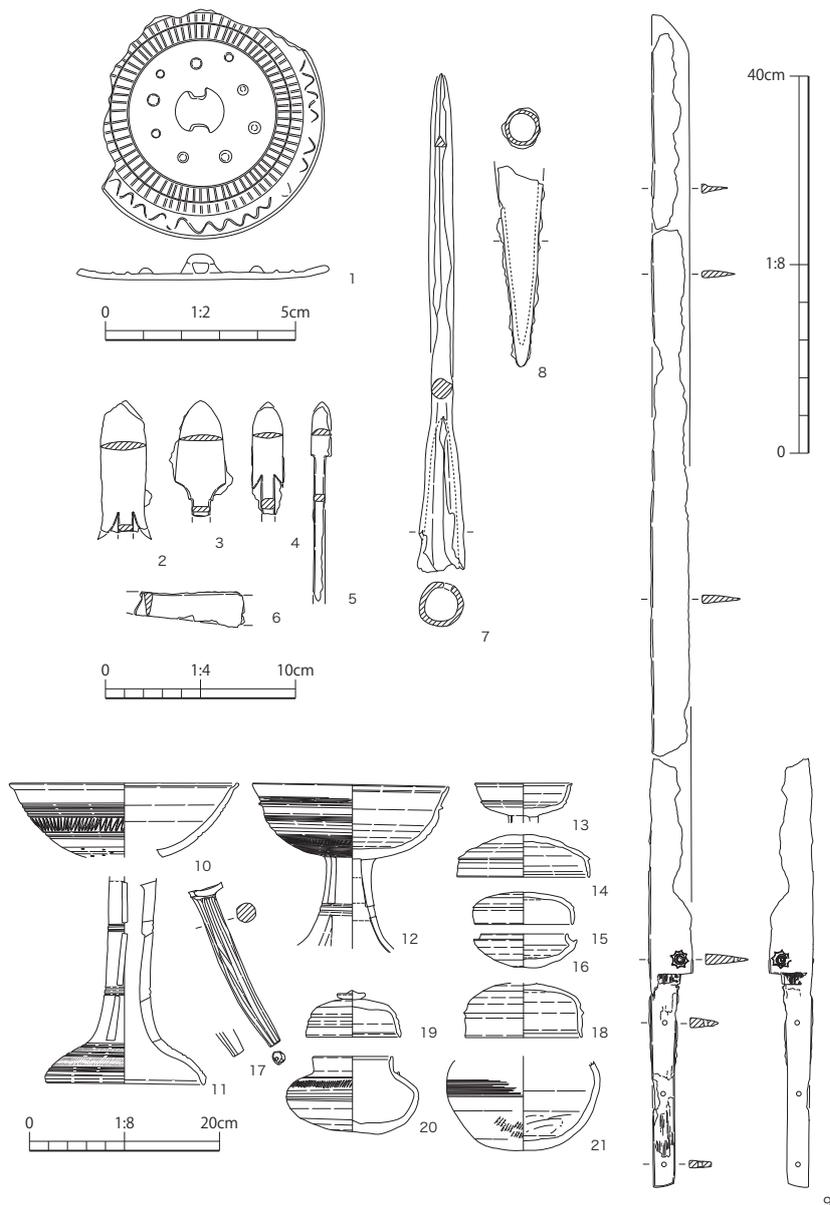


図9 いわき塚古墳の遺物（大口町歴史民俗資料館所蔵）

### 参考文献

- 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳  
 赤塚次郎 2001「原始」『江南市史』本文編 江南市  
 春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集  
 春日井市教育委員会 2006『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第12集  
 江南市 1983『江南市史』資料四 文化編  
 江南市 1994『江南市史』近世村絵図編  
 清水眞一 1988「もう一つの屋根飾り—家形埴輪から復元される大王宮殿—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学考古学シリーズ刊行会  
 名古屋市教育委員会 2011『埋蔵文化財調査報告書63 小幡長塚古墳（第3次・第4次）』名古屋市文化財調査報告80  
 三輪嘉六・宮本長二郎 1995『家形はにわ』日本の美術 第348号 至文堂

# 北設楽郡設楽町 添沢遺跡 出土の鉄鏃について

河嶋優輝

北設楽郡設楽町 添沢遺跡では、鉄滓、韃羽口といった鍛冶関連遺物が自然流路内から出土したほか、同一の流路内から時期不明の鉄鏃1点も出土しているが、その詳細は未報告であった。

本稿は、観察やX線写真の検討を通してその形態について推定を行うこと、他の事例との比較検討を通してその位置づけに関して考察を加えることを目的としたものであり、結果として、添沢鉄族は中世初頭のものとして位置づけることが妥当であると結論づけた。

## 1. はじめに

令和2年度に本発掘調査が実施された北設楽郡設楽町 添沢遺跡では、複数の鍛冶関連遺物が出土したほか、同一の自然流路内で鉄鏃 M-86 も出土している（愛知県埋蔵文化財センター 2023a）。本稿は、その形態について改めて詳細に報告するとともに、その位置づけに関して若干の考察を加えるものである。

## 2. 出土状況および観察による情報

M-86（図1）（以下添沢鉄鏃と呼称）は、添沢遺跡 20A 区で検出された自然流路 400NR の遺物包含層から出土した。当該層には縄文土器から中世陶器の山茶碗まで広い時期の遺物が含まれ、二次的堆積であることは間違いないものの、出土遺物の時期は13世紀中葉を下限としており、包含層の形成時期は13世紀前半が中心であると想定される（愛知県埋文センター 2023a）。

まず、観察から得られる情報を整理したい。添沢鉄鏃は全体が暗褐色の錆に覆われており、更に黄褐色の錆膨れが大部分を覆う。一方の端部は明らかに破断面を呈し、残る一方については端部まで残存すると思われるものの、全体のおよそ1/5にあたる位置で折れ、2片に分かれている。また、破断面などの観察からは一部が中空化している様子が観察できる。

残存する側の端部は細く、欠損部に向かって徐々に太くなるが、全体のおよそ2/3にあたる

位置に大きな錆膨れが付着する。錆の少ない部分での観察から、断面形状は細い側の端部付近では正方形であり、大きな錆膨れを境にやや長方形に近い形状となる。

残存長は16.1cmを測る。幅・厚さは、残存する側の端部付近でそれぞれ0.2cm、中央付近で0.4cmとなり、破断部付近では幅0.5cm、厚さ0.4cmとなる。重量は23.1gである。

以上が観察から得られる主な情報であり、端部から錆膨れまでが茎部、錆膨れが関部、そこから破断部までが頸部または鏃身部と推定され

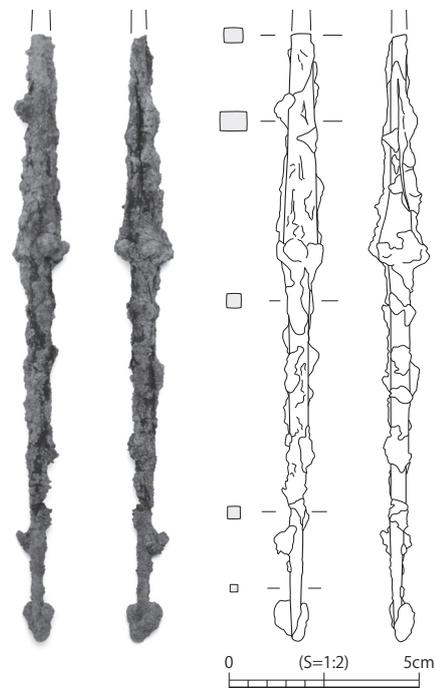


図1 添沢鉄鏃 (S=1/2) (鈴木ほか 2023 に加筆)  
(断面形状については本稿の執筆に際し新たに計測)

たが、正確な形態や時期は不明であった。

### 3. X線写真を用いた検討

形態についてより多くの情報を得るため、添沢鉄鏃のX線写真を撮影した(図2)。使用機材はSOFRON BST-1505、撮影条件は110kV・2mA・照射時間5秒であり、スキヤンののち色調補正を行った。

まず推定茎部については、比較的形状をよく



図2 添沢鉄鏃 X線写真(右は色調補正済み)

保っていることが確認され、やや丸みを帯びた端部から直線的なラインで徐々に太さを増す様子が見て取れる。次に推定関部については、錆膨れの中で左右に広がる様子が確認できた。そして、推定関部より先では徐々に幅を減じ、破断部に至っている。

関部の形状については、3通りの解釈が可能である。図3①~③では①で茎部から斜めに開き、②で屈曲し4mmほど太さを保ったのち、③から幅が減じる様子からが観察され、台状関(図4a)が想定される。一方、④~⑤では開きが長軸に対して垂直に近く、⑤から先もほぼ直線的なラインが観察される。こちらでは角関(図4b)が想定される。⑥の外側への膨らみと⑦から上に伸びるラインからは環状関(図4c)が想定されるが、反対側ではこのような形状が確認できず、また、⑦のラインを先端方向へ辿っていくと途中で途切れることから、本来の形状を

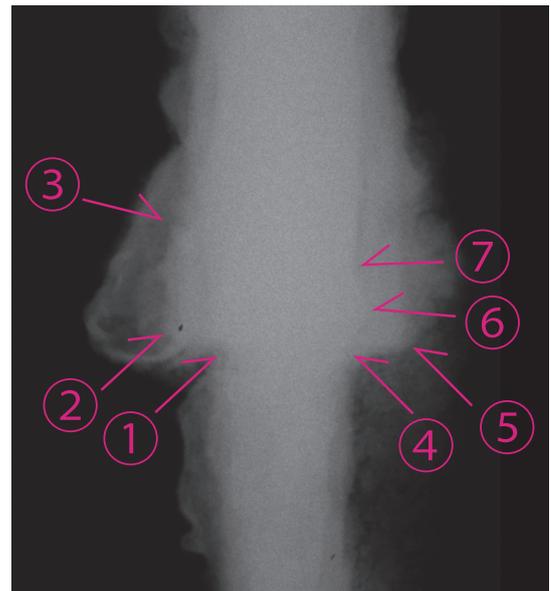


図3 添沢鉄鏃 推定関部拡大図

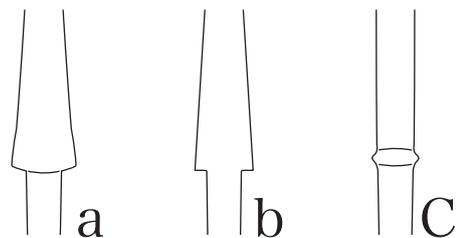


図4 M-86 関部推定復元図

反映したものととは考えづらい。

以上の観察結果より、以下のことが言える。

・細い側は茎部であり、約 10cm の長大なものである。頸部は最短でも 6cm ほどが確認され、鏃身部方向に向けてやや幅が狭まる。

・大きな鏃膨れは関部であり、形状は角関か台状関が環状関が想定される。

#### 4. 添沢鉄鏃の帰属時期について

以上の形態推定を踏まえ、添沢鉄鏃の帰属時期について検討を行う。

添沢鉄鏃の出土した 400NR では、古墳時代前期に比定される土師器壺が 1 個体のみであるが出土している（愛知県埋蔵文化財センター 2023a）。まず古墳時代の鉄鏃である可能性について考えると、古墳時代前期に属する鉄鏃の茎部は一般的に短く、添沢鉄鏃（図 5a、右は推定復元形）はむしろ、中期に出現する長頸鏃に近い。愛知県内の事例では、名古屋市瑞穂区津賀田古墳出土の鉄鏃（b）は長さ 7cm 以上の茎部長を持ち、茎部の太さ、関部形状、頸部の太さなども M-86 に類似するが、長頸鏃と同時期の遺物は出土していないことから考えても、添沢鉄鏃を古墳時代の鉄鏃と考える積極的な根拠はない。

次に、出土層が形成された中世の鉄鏃である可能性を考える。古代から中世にかけての鉄鏃の分類・編年に関しては、多量の出土を見た吉田川西遺跡の調査報告書（長野県埋蔵文化財センター 1989）などでも扱われているが、近年

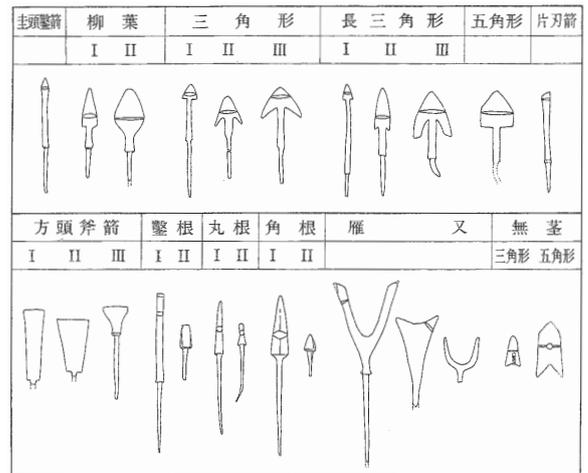


図 6 津野による鉄鏃の分類（津野 1990 より）

では津野仁が 8 世紀から 16 世紀にかけての編年を提示している（津野 1990, 2001）。

さて、津野による分類（図 6）に添沢鉄鏃を照らし合わせると、まず無茎式ではなく、関部より先端側の平面形状から方頭斧箭式、雁股式が、断面形状から丸根式、角根式が除外される。その他の形式のうちでも、10cm 余りの茎部を持つ例は少ないが、近い長さを持ついくつかの出土事例を図 5 に示し、関部を基準に並べた。

添沢鉄鏃（a）に対し、圭頭鏃式では法住寺殿 W10 北西部（c）、柳葉式では浪岡城跡 Q41 区 II 層（d）、三角形式では多賀城跡（e）、向原遺跡第 39 号・59 号住居（f・g）、鑿根式では法住寺殿跡 W10 南西部（h）、太田谷地館跡（i）、浪岡城跡 ST243（j）の出土例を挙げ、また参考として方頭斧箭式の吉田川西遺跡出土例（k）を

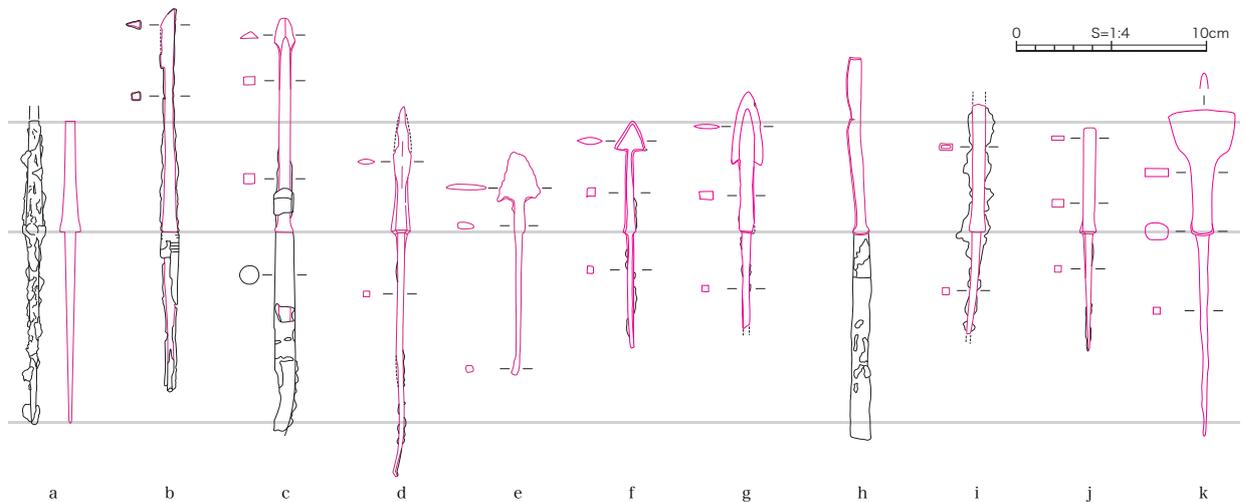


図 5 鉄鏃比較図（全て S=1/4）（出典より著者がトレース、一部表現を統一）

挙げた。

圭頭鑿箭式の図 5c については、矢柄が遺存するため茎部が図上からは不明であるが、茎部について「径 4mm 程度の断面円形もしくは方形で、先細りであり、長さも 10cm 余りの長いものが多い」（古代学協会 1984）と報告されている。したがって、関部から先の形状だけでなく、茎部の特徴も添沢鉄鏃と一致する。

柳葉式鉄鏃は、12cm を超える長茎を持つ浪岡城出土例（図 5d）を取り上げた。この形式の鏃は主に 14 世紀から中世末にかけて長茎化すると津野は説明しており、添沢鉄鏃の長茎をその中に位置づけられないかと考えたが、頸部長が添沢鉄鏃ほど長いものは見られなかった。

三角形・長三角形は形状が多様であり、図 5e・f・g は中でも比較的長い茎部を持つが、長頸を兼ね備える事例は見られない。

鑿根式では図 5h・i・j の 3 例を挙げた。h は法住寺殿出土例で、茎の特徴は先述の通りであり、頸部と不可分の鏃身部についても、平面的には添沢鉄鏃と類似するように見える。しかし断面形状を見ると、i・j は関部に近い基部では長方形に近いものの、先端に向かうにつれて扁平化しており、添沢鉄鏃とは異なっている。方頭斧箭式にも長茎のものは見られる（図 5k）が、先端に向かって広がる形状は添沢鉄鏃とは大きく異なる。

さて、純粋に形状のみから考えれば、添沢鉄鏃は古墳時代中～後期の長頸鏃のうち茎のごく長いものか、中世の圭頭鑿箭式鏃の一種とみることが出来るように思われる。

#### 引用・参考文献

愛知県史編さん委員会 2005 『愛知県史 資料編 3 古墳』

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2023 a 『胡桃窪遺跡・大名倉丸山遺跡・添沢遺跡』 2023 b 『年報 令和四年度』

財団法人 古代学協会 1984 『法住寺殿跡』

津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』第 54 号 pp.59-75

2001 「中世鉄鏃の形成過程と北方系の鉄鏃」『土曜考古』第 25 号 pp.185-205

中澤克昭 2006 「居館と武士の職能—出土鉄鏃と狩猟をめぐって—」『鎌倉時代の考古学』高志書院 pp.95-106

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1989 『吉田川西遺跡 本文編』

#### 図 5 出典

b：名古屋市教育委員会 2003 『埋蔵文化財調査報告書 48 尾張元興寺跡（第 10 次）伊勢山中学校遺跡（第 10 次）津賀田古墳戸田遺跡 NN319 号竪群』 p.87

c・h：財団法人 古代学協会 1984 『法住寺殿跡』 p.121、p.123

d・j：浪岡町教育委員会 1985 『昭和 60 年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡 IX』 p.116

e：宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1977 『多賀城跡—昭和 52 年度発掘調査概報—』 p.30

f・g：神奈川県教育委員会 1982 『向原遺跡』第 3 分冊 p.197、第 4 分冊 p.8

i：秋田県教育委員会 1988 『西山地区農免農道整備事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書 III—太田谷地館跡—』 p.66

k：日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1989 『吉田川西遺跡 図版編』図版 183

加えて周辺事情を検討すると、先述のとおり古墳時代中後期の遺物は添沢鉄鏃に共伴せず、周辺でも古墳時代の集落は知られていない。

一方、圭頭鑿箭式の例に挙げた法住寺殿跡の土坑 W10 出土事例については、その年代について 12 世紀中葉から 13 世紀初頭という評価が与えられている（古代学協会 1984）。添沢鉄鏃の出土層は一次的堆積ではないが、共伴する山茶碗には 12 世紀後葉から 13 世紀中葉のものと評価されており（愛知県埋文センター 2023a）、近隣の大崎遺跡、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡でも古代～中世に属する遺構が検出されている（愛知県埋蔵文化財センター 2023b）。

以上のことを考慮すると、添沢鉄鏃の帰属時期は古墳時代というよりも中世初頭とした方が妥当であり、残存しない鏃身部の形状は圭頭鑿箭式のものである可能性が考えられる。

## 5. おわりに

以上、本稿の目的とした詳細な報告と時期の推定について、少なくとも前者は果たせたものとする。後者については事例集成が不十分な点もあり、また圭頭鑿箭式は狩猟用の野矢ではなく征矢とされている（中澤 2006）ため、なぜこの鉄鏃がここにあるのか、といった問題などが残されてはいるものの、それらは今後の検討課題の 1 つとし、本稿の結びとしたい。

#### 謝辞

執筆にあたっては当センターの職員の方々から種々の貴重なご意見を賜った。末筆ながら記して感謝を申し上げる。

# 愛知県における戦後埋蔵文化財 行政草創期の様相について

● 川添和暁・加藤安信\*

愛知県の県指定史跡を一瞥すると、号数についてやや混乱した状況が見える。これは県主体で始動した埋蔵文化財行政当初時の状況を反映したものと考えられるが、別視点から見ると文化財保護法制定後、愛知県としての文化財保護行政を積極的に推進したことを示す証拠として見ることができよう。

## 1. はじめに 大根平遺跡 鞍船遺跡から

現在、埋蔵文化財保護に関して、各自治体の役割はとて高く、文化庁の指導の下、各自治体主導となっているといえる。

そのような文化財保護の方策として、遺跡（≒埋蔵文化財包蔵地）であれば指定史跡の認定、遺物であれば指定文化財の認定があり、現行ではそれが国・県・市町村単位の各レベルで実施されている\*\*。

愛知県内でも北設楽地域は、もともと考古資料に対する意識が高いところであった。同じ北設楽郡内であれば、明治期の段階から東栄町域を中心に資料収集活動を行った、佐々木友八郎の業績などがその嚆矢として知られている（川添ほか2014）。その到達点に位置するのは、『北設楽郡史』の編纂・刊行に関わる事業であったといえよう（岡田ほか1967）。

さて、今回、本稿で見ていくのは、愛知県の指定史跡についてである。これは県による文化財保護行政の成果が端的に分かる事象であるともいえるからで、北設楽郡内にも3遺跡が存在する。そのうち、設楽町内には大根平遺跡および鞍船遺跡が存在する。両遺跡ともいずれも合併前の旧津具村内にあり、両遺跡に関する調査の経緯に関して、筆者は復元を試みた経緯がある（川添2021：以下、前稿と称す）。現在、これらの発掘当時の記録資料は、ほとんど確認できない状況にある。そこで前稿では、若干の調査図面に加えて、設楽町奥三河郷土館に残され

ている調査日誌と、さらに県に残されている諸手続のための行政書類を最大限に活用して、当時の状況を推測したのである。

前稿の末尾では、筆者は以下のように締めくくった。

「・・・大根平遺跡・鞍船遺跡の調査は、郡史編纂委員会による本格的な発掘調査の契機となったといえる。また、この調査は、自治体が主体である上で、かつ久永春男が調査主任を務める調査としても、初めてのものとなった。その後、久永らは愛知県内の各遺跡調査を広く行っていく訳であるが、その初期の頃の業績となったのである。

加えて、県の史跡指定も早く、一部を保存・復元するという在り方も、遺跡の整備・活用への視点を、早くから実践された事例として注目されよう。」

この上で、地元では大根平遺跡が愛知県指定史跡第1号に、鞍船遺跡が同第2号に指定されていることを紹介した。ところがこの県指定史跡の号数については、後述する理由のため、一筋縄では理解できない事情があることが判明した。行政的措置に何か理由があったのではないかと追究する必要があると考えた次第である。

## 2. 愛知県指定史跡の状況について

令和5年1月現在、愛知県のホームページでは、国史跡および県指定史跡一覧を見ることができる（<https://www.pref.aichi.jp/kyoiku/>

\*元 愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財事業運営協議会委員

\*\*国では、国宝と重要文化財との認定があるが、青森県や長野県などでは、県指定文化財にあたるものを県宝と呼称している。

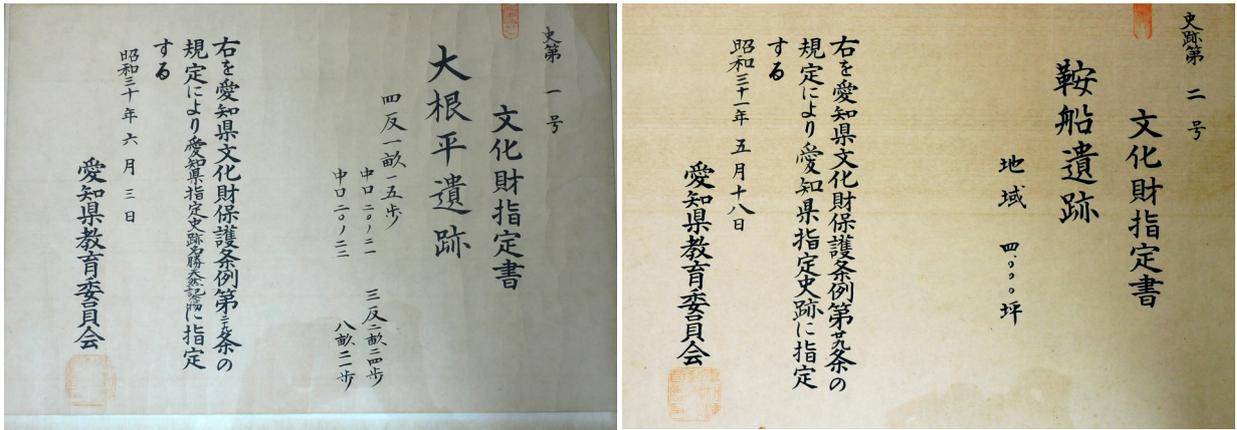


図1 設楽町 大根平遺跡（左）および鞍船遺跡（右）県指定史跡にともなう文化財指定書

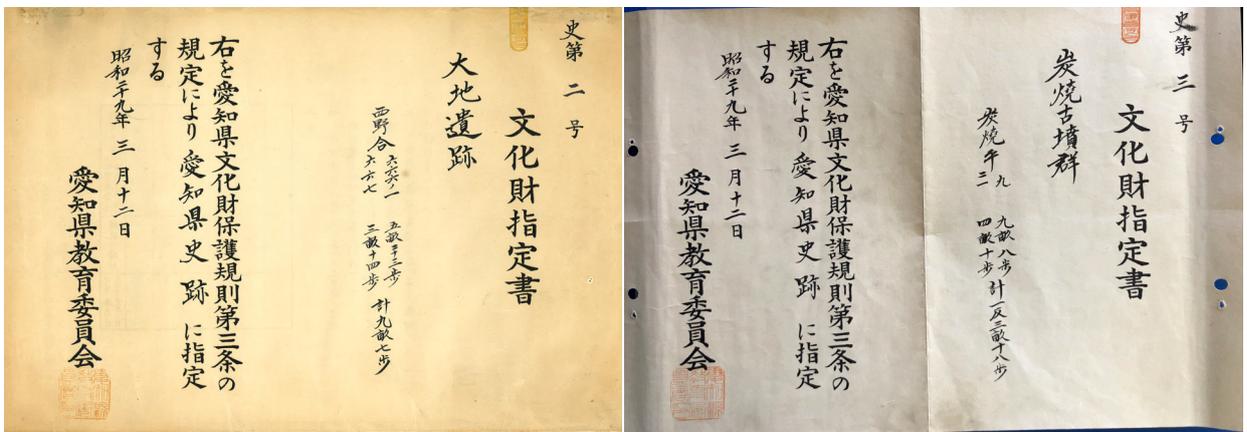


図2 大地遺跡（左上）、炭焼古墳群（右上）、馬見塚遺跡（左下）県指定史跡にともなう文化財指定書

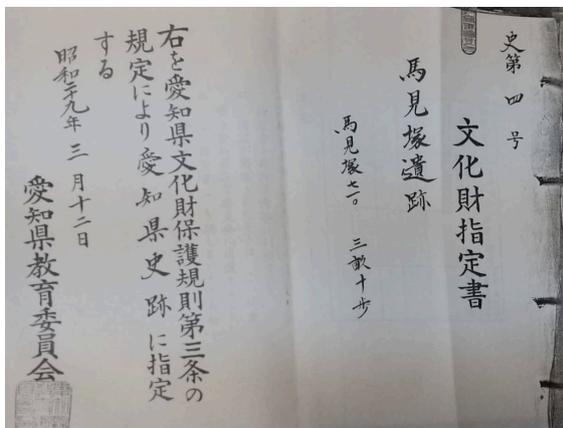


表1 愛知県指定史跡 初期段階の指定書および台帳記載内容一覧

遺跡名	証書名	員数単位	証書記載種別	台帳記載種別	根拠とする条文と表記	号数	指定日
小野道風誕生伝説地	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護規則第三条	史 第一号	1954年3月12日
大地遺跡	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護規則第三条	史 第二号	1954年3月12日
炭焼古墳群	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護規則第三条	史 第三号	1954年3月12日
馬見塚遺跡	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護規則第三条	史 第四号	1954年3月12日
大根平遺跡	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県指定史跡名勝天然記念物	愛知県史跡	愛知県文化財保護条例第二十九条	史 第一号	1955年6月3日
高根遺跡	【確認できず】	坪	【確認できず】	愛知県史跡	【確認できず】	史 第二号	1956年3月7日
鞍船遺跡	文化財指定書	坪	愛知県指定史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護条例第廿九条	史跡 第二号	1956年5月18日
史跡 大御堂寺	【未確認】	坪	【未確認】	愛知県史跡	【未確認】	史跡 第三号	1956年5月18日
宇利城跡	文化財指定書	歩・畝・反	愛知県指定史跡	愛知県史跡	愛知県文化財保護条例第廿九条	史 第九号	1957年9月6日

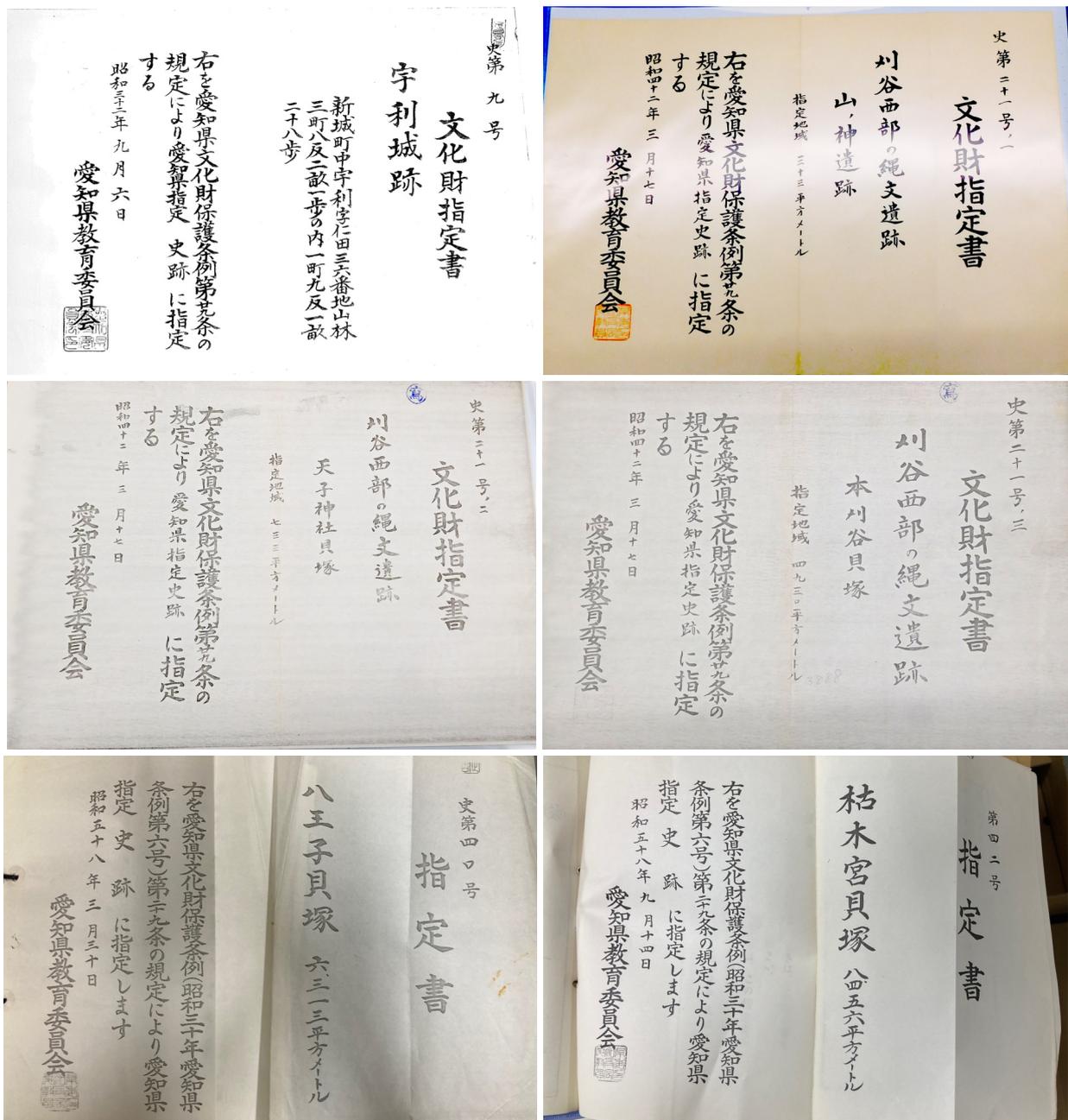


図3 宇利城跡（上段左）、川谷西部の縄文遺跡（上段右及び中段）、八王子貝塚（左下）、枯木宮貝塚（右下）県指定史跡にともなう文化財指定書

bunka/bunkazainavi/syubetsu/siseki.html)。ここで見ても明らかなように、大根平遺跡および鞍船遺跡の指定前に、小野道風誕生伝説地など4遺跡が大根平遺跡よりも先行して指定されていることが分かる。このため、単純に考えると大根平遺跡が県指定第1号に、鞍船遺跡が県指定第2号にはならないのではないかと考えられるのである。ところが、現在、設楽町には両遺跡の指定に関する指定書が保管されており、

そこにはそれぞれ「史 第一号」と「史 第二号」の記載があり、これらが紛れもない事実であることは明白である。

このことから、まずは初期の指定史跡を対象に、指定書の内容を確認し、かつ現在県文化財室が保管している台帳とも照らし合わせる作業を行った。現在確認できた分の照合結果は、表1にまとめた。また、指定書の写真や写しは図1・2に、図3は比較の参考資料として掲載した。

表2 愛知県 県指定史跡一覧表

台帳通番	号数	名称	員数	所有者など	時代	指定年月日	所在地	備考
1	1	小野道風誕生伝説地 (旧「小野道風公誕生地」)	3,021.4 m <sup>2</sup>		平安	昭和29年3月12日	春日井市	昭和46年名称変更
2	2	大地遺跡	914.1 m <sup>2</sup>		弥生前～中期	昭和29年3月12日	岩倉市	
3	3	炭焼古墳群	1,348.8 m <sup>2</sup>		古墳末期	昭和29年3月12日	豊川市	
4	4	馬見塚遺跡	9.9 m <sup>2</sup>		縄文晩～弥生前	昭和29年3月12日	一宮市	
5	1	大根平遺跡	4,115.7 m <sup>2</sup>		縄文中期	昭和30年6月6日	設楽町	
6	2	高根遺跡	99 m <sup>2</sup>		平安	昭和31年3月7日	小牧市	
7	2	鞍船遺跡	4,000 m <sup>2</sup>		縄文前期	昭和31年5月18日	設楽町	
8	3	史跡大御堂寺	14,043 m <sup>2</sup>	大御堂寺	鎌倉	昭和31年5月18日	美浜町	
9	9	宇利城跡	19,034.7 m <sup>2</sup>	中宇利区	南北朝	昭和32年9月6日	新城市	
10	10	大高山古窯	297 m <sup>2</sup>	半田市	鎌倉	昭和33年6月21日	半田市	
11	11	本證寺境内地	22,362.39 m <sup>2</sup>			昭和34年10月8日 昭和49年2月15日	安城市	後に一部国史跡指定。
12	12	飯盛城址	77,736.74 m <sup>2</sup>		鎌倉～室町	昭和36年3月30日	豊田市	
13	13	籠池古窯	300 m <sup>2</sup>		鎌倉	昭和36年3月30日	常滑市	
14	14	岩場古墳	1,115 m <sup>2</sup>		古墳	昭和36年3月30日	西尾市	
15	14	来迎寺一里塚	2 基	知立市	江戸	昭和36年7月8日 平成8年3月18日	知立市	
16	15	浅井古墳群	5 基	一宮市他	古墳後期	昭和38年1月19日	一宮市	
17	17	長泉塚古墳	1 基	長泉塚保存会	古墳	昭和39年2月23日	扶桑町	
18	18	前芝の灯明台	19.8 m <sup>2</sup>		江戸～明治	昭和40年5月12日	豊橋市	
19	19	設楽城跡	13,200 m <sup>2</sup>		鎌倉初期	昭和40年5月12日	東栄町	
20	20	岩津第1号古墳	1 基	岡崎市	古墳後期	昭和42年2月10日	岡崎市	
21	21	刈谷西部の縄文遺跡(山ノ神遺跡・天子神社貝塚・本刈谷貝塚)・(ハツ崎貝塚)	8,623.5 m <sup>2</sup>	刈谷市他	縄文早～晩期	昭和42年2月10日 昭和59年3月30日	刈谷市	1～4の枝番が割り当てられている
22	22	皿山古窯群	1,200 m <sup>2</sup>	和地自治会	鎌倉	昭和42年2月10日	田原市	
23	23	起渡船場跡	3,652.09 m <sup>2</sup>	大明神社	江戸	昭和42年8月28日	一宮市	
24	24	祐福寺一里塚	2 基		江戸	昭和43年3月12日	東郷町	
25	25	検見塚	224.4 m <sup>2</sup>	清須市	弥生	昭和43年11月4日	清須市	
26	26	豊田大塚古墳	1 基		古墳後期	昭和44年6月22日	豊田市	
27	27	妙興寺境内地	56,439.92 m <sup>2</sup>	妙興寺	南北朝	昭和44年10月29日	一宮市	
28	28	権現山古墳(第一号/第二号)	2 基		古墳	昭和48年4月4日	豊橋市	
29	29	伊川津貝塚	430.09 m <sup>2</sup>	伊川津神明社	縄文後・晩期	昭和49年10月9日	田原市	
30	30	黒笹七号窯	1 基	尾三衛生組合	平安	昭和50年6月16日	東郷町	
31	31	神明宮前第1古墳	1 基	神明宮	古墳	昭和50年12月26日	岡崎市	
32	32	太夫塚古墳	1 基	個人	古墳	昭和50年12月26日	岡崎市	
33	33	城宝寺古墳	1 基	田原市	古墳	昭和50年12月26日	田原市	
34	34	妙感寺古墳	1 基	妙感寺	古墳	昭和50年12月26日	犬山市	
35	35	池田第1古墳	1 基		古墳後期	昭和52年5月16日	豊田市	
36	36	旗頭山尾根古墳群	24 基	新城市八名井区	古墳後期	昭和53年5月29日	新城市	
37	37	断上山古墳(第9号古墳/第10号古墳)	2 基	新城市他	古墳	昭和53年10月16日	新城市	
38	38	今朝平遺跡	666 m <sup>2</sup>		縄文後期	昭和55年3月28日	豊田市	
39	39	馬越長火塚古墳	1,900 m <sup>2</sup>	豊橋市		昭和56年11月20日	豊橋市	後に国史跡指定。
40	40	八王子貝塚	6,313 m <sup>2</sup>	金石神社他	縄文後期	昭和58年3月30日	西尾市	
41	41	白山神社古墳・御旅所古墳	2 基		古墳中期	昭和58年3月30日	春日井市	
42	42	枯木宮貝塚	8,456 m <sup>2</sup>	西尾市	縄文晩期	昭和58年9月14日	西尾市	
43	43	板山長根古墳	3 基		平安～鎌倉	昭和59年3月30日	阿久比町	
44	44	宇都宮神社古墳	2,516 m <sup>2</sup>		古墳	昭和62年9月9日	小牧市	
45	45	吉良八幡山古墳	1 基	八幡社	古墳	平成11年9月10日	西尾市	

表3 愛知県内 国指定史跡一覧表

県内 指定順	名称	員数	所有者など	時代	指定年月日	所在地	備考
1	百々陶器窯跡	1,079 m <sup>2</sup>	田原市	平安末期～鎌倉	大正 11 年 3 月 8 日	田原市	
2	三河国分寺跡	40,484 m <sup>2</sup>	豊川市他	奈良	大正 11 年 10 月 12 日	豊川市	
3	三河国分尼寺	21,902 m <sup>2</sup>	豊川市	奈良	大正 11 年 10 月 12 日	豊川市	
4	小牧山	205,706 m <sup>2</sup>	小牧市	室町～安土桃山	昭和 2 年 10 月 26 日	小牧市	
5	二子古墳	4,152.61 m <sup>2</sup>		古墳	昭和 2 年 10 月 26 日 昭和 30 年 5 月 8 日	安城市	
6	姫小川古墳	1,955.65 m <sup>2</sup>		古墳	昭和 2 年 10 月 26 日 平成 24 年 9 月 19 日	安城市	
7	大山廃寺跡	108,383 m <sup>2</sup>		奈良	昭和 4 年 12 月 17 日 昭和 55 年 7 月 11 日	小牧市	
8	北野廃寺跡	21,070.96 m <sup>2</sup>	岡崎市	飛鳥後期	昭和 4 年 12 月 17 日 昭和 63 年 12 月 21 日	岡崎市	
9	舞木廃寺塔跡	1,985 m <sup>2</sup>	豊田市	奈良	昭和 4 年 12 月 17 日	豊田市	
10	長篠城跡	35,506.24 m <sup>2</sup>	新城市	室町	昭和 4 年 12 月 17 日	新城市	
11	八幡山古墳	1 基		古墳	昭和 6 年 5 月 11 日	名古屋市中区	
12	特別史跡 名古屋城跡	389,534 m <sup>2</sup>	名古屋市中区	江戸	昭和 7 年 12 月 12 日 昭和 10 年 5 月 15 日	名古屋市中区	特別指定昭和 27 年 3 月 29 日
13	二子山古墳	1 基	春日井市	古墳後期	昭和 11 年 12 月 16 日	春日井市	
14	阿野一里塚	2 基		江戸	昭和 11 年 12 月 16 日	豊明市	
15	正法寺古墳	1 基		古墳	昭和 11 年 12 月 16 日 平成 16 年 9 月 30 日	西尾市	
16	富田一里塚	2 基	富田神明社	江戸	昭和 12 年 12 月 21 日	一宮市	
17	桶狭間古戦場伝説地 附戦人塚	5,200.8 m <sup>2</sup>		室町	昭和 12 年 12 月 21 日	豊明市	
18	大平一里塚	1 基		江戸	昭和 12 年 12 月 21 日	岡崎市	
19	大高城跡 附（丸根砦跡 / 鷲津砦跡）	40,613 m <sup>2</sup>		室町	昭和 13 年 12 月 14 日	名古屋市中区	
20	長久手古戦場跡 附（御旗山 / 首塚 / 色金山）	22,750 m <sup>2</sup>	長久手市	桃山	昭和 14 年 9 月 7 日	長久手市	
21	大曲輪貝塚	353 m <sup>2</sup>		縄文早～晩期	昭和 16 年 1 月 27 日	名古屋市中区	
22	吉胡貝塚	11,017.243 m <sup>2</sup>	田原市	縄文後・晩期	昭和 26 年 12 月 26 日	田原市	
23	入海貝塚	1,200.7 m <sup>2</sup>	入海神社	縄文	昭和 28 年 11 月 14 日	東浦町	
24	瓜郷遺跡	13,688 m <sup>2</sup>	豊橋市	弥生中・後期	昭和 28 年 11 月 14 日	豊橋市	
25	嵩山蛇穴	2,115 m <sup>2</sup>	豊橋市	縄文	昭和 32 年 7 月 1 日	豊橋市	
26	伊良湖東大寺瓦窯跡	421 m <sup>2</sup>		鎌倉	昭和 42 年 12 月 11 日	田原市	
27	大アラコ古窯跡	2,923.45 m <sup>2</sup>	田原市	平安末期	昭和 46 年 1 月 12 日	田原市	
28	小長曾陶器窯跡	524 m <sup>2</sup>		室町	昭和 46 年 7 月 13 日 平成 27 年 10 月 7 日	瀬戸市	
29	貝殻山貝塚	10,169.4 m <sup>2</sup>	愛知県	弥生	昭和 46 年 12 月 15 日	清須市	
30	白鳥塚古墳	1 基		古墳前～中期	昭和 47 年 11 月 6 日	名古屋市中区	
31	東之宮古墳	1 基	東之宮社・犬山市	古墳	昭和 50 年 7 月 19 日 平成 22 年 2 月 22 日	犬山市	
32	真宮遺跡	9,495.78 m <sup>2</sup>	岡崎市	縄文晩期	昭和 51 年 6 月 7 日	岡崎市	
33	青塚古墳	1 基	大縣神社	古墳前期	昭和 58 年 2 月 8 日	犬山市	
34	断夫山古墳	1 基	愛知県	古墳中～後期	昭和 62 年 7 月 9 日	名古屋市中区	
35	松平氏遺跡	1,759.4 m <sup>2</sup>		戦国～江戸	平成 12 年 2 月 4 日	豊田市	
36	尾張国分寺跡	25,321.12 m <sup>2</sup>	稲沢市ほか	奈良・平安	平成 24 年 1 月 24 日	稲沢市	
37	島原藩主深溝松平家墓所	50,136.53 m <sup>2</sup>	幸田町ほか	江戸	平成 26 年 3 月 18 日	幸田町	
38	志段味古墳群（白鳥塚古墳・尾張戸神社古墳・中社古墳・南社古墳・志段味大塚古墳・勝手塚古墳・東谷山白鳥古墳）	26,348.73 m <sup>2</sup>		古墳前期中葉～後期末	平成 26 年 10 月 6 日 令和 3 年 10 月 11 日	名古屋市中区	白鳥塚古墳に追加指定された
39	本證寺境内地	37,454.49 m <sup>2</sup>	本證寺ほか	室町	平成 27 年 3 月 10 日	安城市	県史跡は欠番
40	馬越長火塚古墳群	15,683.66 m <sup>2</sup>	豊橋市	6 世紀末葉～7 世紀前葉	平成 28 年 3 月 10 日	豊橋市	県史跡は欠番
41	犬山城跡	45,905.63 m <sup>2</sup>		室町～戦国	平成 30 年 2 月 13 日	犬山市	天守は昭和 9 年旧国宝、昭和 27 年 3 月 29 日国宝指定

表4 愛知県内 国指定重要文化財（考古資料）一覧表

県内での指定順	登録番号	名称	員数	所有者など	時代	指定年月日	保管地	備考
1	029	銅経筒（瓦壺入）	1口	普門寺	平安	大正12年3月28日	豊橋市	
	359	尾張東之宮古墳出土品	1括	独立行政法人国立文化財機構	古墳	昭和53年6月15日	京都市	
2	401	袈裟澤文銅鐸	1口	個人など	弥生	昭和28年 昭和59年6月6日	西宮市	愛知県名古屋瑞穂区軍水町出土
3	502	豊田大塚古墳出土須恵器	1括	豊田市	古墳	平成7年6月15日	豊田市	
4	605	朝日遺跡出土品	2,028点	愛知県	弥生	平成24年9月6日	清須市	
5	606	馬越長火塚古墳出土品	311点	豊橋市	古墳	平成24年9月6日	豊橋市	
6	637	人面文壺形土器 愛知県亀塚遺跡出土 附 緑刻土器片	1箇、20点	安城市	弥生	平成28年8月17日	安城市	

表5 愛知県指定文化財（考古資料）一覧

県内での指定順	管理番号	名称	員数	所有者など	時代	指定年月日	保管地	備考
1		飯盛山経塚出土品	1面、1個	豊田市	平安	昭和31年3月7日	豊田市	
2		中島出土骨壺	7個	中島文化財委員会	鎌倉	昭和34年10月8日	一宮市	
3		岩場古墳出土品	1括	西尾市	古墳	昭和34年	西尾市	
4		車神社古墳出土品	1括	車神社	古墳	昭和34年10月10日	豊橋市	
5		千両の銅鐸	1個	犬頭神社	弥生	昭和38年	豊川市	
6		妙興寺の鬼瓦	1枚	妙興寺	奈良	昭和42年3月17日	一宮市	
7		西浦の条痕土器	1個	名古屋市	弥生	昭和42年3月	名古屋瑞穂区	
8		岩津第一号古墳出土品	1括(約100点)	岡崎市	古墳・6世紀後半	昭和42年3月17日	岡崎市	
9		鉄地金銅張馬具	1具	熱田神宮	古墳	昭和43年	名古屋熱田区	熱田神宮奉納品
10		弥生時代壺棺	1個	個人	弥生	昭和45年	名古屋瑞穂区	師勝町伝馬塚出土
11		弥生式壺形土器	1個	名古屋市	弥生	昭和45年	名古屋瑞穂区	岩倉市大地遺跡出土
12		藤井宮御酒瓶子	1口	個人蔵	鎌倉	昭和45年	大府市	大府市横根町中村より出土
13		洞（伝）の銅鐸	1個	法蔵寺	弥生	昭和49年	岡崎市	
14		本刈谷貝塚出土品	182点	刈谷市	縄文	昭和49年4月10日	刈谷市	
15		広石の銅鐸	1口	個人	弥生	昭和49年7月3日	豊川市	
16		田峯の銅鐸	1口	砥鹿神社	弥生	昭和50年6月16日	豊川市	
17		奥津社の三角縁神獣鏡	3面	奥津社	古墳	昭和52年	愛西市	
18		内行花文鏡（宇津木古墳出土）	1面	個人	古墳	昭和52年5月16日	豊田市	
19		海獣葡萄鏡（森月1号墳出土）	1面	豊川市	奈良	昭和54年	豊川市	
20		手呂の銅鐸	1口	豊田市	弥生	昭和55年2月12日	豊田市	
21	21	横刈板鋌留短甲	1領	名古屋市	古墳	昭和59年	名古屋瑞穂区	岡崎市内出土
22	22	三角縁神獣鏡及び六神鏡	各1個	名古屋市	古墳	昭和59年	名古屋瑞穂区	東海市兜山古墳出土
23	23	猿投灰釉短頸壺及びび瓶	各1個	愛知県	平安	昭和59年2月27日	瀬戸市	名古屋守山区小幡緑地公園出土
24	24	鉄地銀象嵌円頭大刀	1口	蒲郡市	古墳	昭和59年3月30日	蒲郡市	権現山古墳出土
25	25	三角縁獣文帯三神三獣鏡	1面	宇都宮神社	古墳	昭和62年9月9日	小牧市	
26	26	鳥鈕蓋付台付壺	1口	豊川市	古墳	平成5年	豊川市	炭焼平14号墳
27	27	八王子貝塚出土品	586点	西尾市	縄文	平成22年3月	西尾市	
28	28	桜皮巻き小形壺形土器	1口	安城市	弥生	平成29年8月17日	安城市	亀塚遺跡出土

なお、表3～5は表2との比較で掲載した。

高根遺跡の指定書は、現在小牧市でも所在不明との回答を得ており、記載内容を検討することができない。現在検討可能な資料で見ると、(a) 指定書に記載された指定の種別、(b) 員数で使用されている単位、(c) 根拠となる条文、で差異を見いだすことができる。

(a) に関しては、「愛知県史跡」および「史跡」が多いなか、なぜか大根平遺跡のみは「史跡名勝天然記念物」と表記されている。高根遺跡の指定書表記が確認できない状況であるが、この記載は、県指定史跡の中でも、大根平遺跡の位置を少々特異な状況に置いている。もしかしたら、指定書のなかでも最初に作成された可能性も考えられるものである。もしくは大根平遺跡の指定時、前の指定とは別の案件としてリセットされてしまった可能性もある。

(b) は台帳で全体を概観すると、以下の4通りを確認できる。

歩・畝・反  
坪  
平方メートル  
基

基は、古墳および窯跡で使用されている単位であるが、上述した県のホームページを見れば明らかなように、現在は平方メートル単位を基準としている。そうしたなかで、歩・畝・反を用いているのは、大根平遺跡よりも以前に指定された史跡であり、宇利城跡は例外的であろう。その後は、坪表記が主体となったと思われるが、その期間は長くなかった。本證寺境内地からは平方メートル表記が認められおり、飯盛城址では坪表記となっている以外は、その後の単位表記は平方メートルで統一されている。このことから、大根平遺跡以前の指定は、やはりより古い指定であることには間違いない。

(c) は、大根平遺跡以降と、それより前の指定遺跡とで大きく異なっている。大根平遺跡以降では表記の違いはあれ、愛知県文化財保護条例第29条である。一方、大地遺跡、炭焼古墳群、馬見塚遺跡では、いずれも愛知県文化財保護規則第3条をよりどころとしている。つまりは、両者では根拠となる条文が異なることが、この書面から窺うことができるのである。やはりこ

のことによって、当時、大根平遺跡指定時に号数が一旦リセットされた可能性も考えられよう。

大根平遺跡の指定後、高根遺跡と鞍船遺跡には、おなじ2号の番号が付されている。鞍船遺跡と史跡大御堂寺は、いずれも昭和31年5月18日と同日指定となっており、鞍船遺跡が第2号となったのは偶然かもしれない。一方、高根遺跡の指定号と重複して付されてしまった経緯は、今となっては不明であるといわざるを得ない。

以上のことを踏まえて、主に台帳から号数を辿ってみた結果を表2に示す。現在となつては行政的な手続き上の誤りとなつてしまうかもしれないが、愛知県主体の文化財保護行政が本格化した状況にあつて、単純な誤りでは片付けられない理由が、背景には存在している可能性がある。この事情について、次に見ていくこととしよう。(川添和暁)

### 3. 文化財保護条例発足時の文化財保護

昭和25(1950)年5月30日に国の「文化財保護法」が成立すると、それに漏れた各都道府県の文化財の保護指定が審議されるようになった。

愛知県では国指定に漏れた文化財を拾うべく昭和26年5月24日に「愛知県文化財保護審議会規則」が公布、施行された。委員は20名以内で任期3年、審議会には次の6つの専門部会が置かれた。一は絵画・彫刻・工芸部会、二は文書部会、三は埋蔵文化部会、四は史跡・名勝・天然記念物部会、五は民俗・芸能部会、六は建造物部会である。

この頃から委員を務めたのは、佐々木隆美(美術工芸)、澄田正一(考古学)、松沢勲(地質学)、松井武敏(地理学)、小栗鉄次郎(史跡、名勝、天然記念物)らの各氏である。戦前から文化財保護を担当していた小栗を除く4名は、いずれもその当時の各分野を担う精鋭であり、その後、長きにわたって文化財の保護調査につとめた。

こうした動きを受けて、遺跡の発掘調査等も進められた。昭和26年度には吉胡貝塚発掘(26年12月26日国指定)、続いて野田古墳を発掘調査。27年度から28年度にかけて炭焼平古墳

表6 愛知県文化財保護条例制定以前の県指定文化財一覧

種別	名称	員数、面積	所在地	所有者又は管理者	指定年月日
彫刻	木造聖徳太子立像	1 軀	名古屋市長久寺区大瀬子町	聖徳寺	昭和 29 年 2 月 5 日
"	鑄造誕生仏立像	1 軀	小牧市三ツ瀨	正眼寺	昭和 29 年 3 月 12 日
"	木造阿弥陀如来坐像	1 軀	江南市布袋町	大仏堂	昭和 29 年 3 月 12 日
"	鑄造誕生仏立像	1 軀	豊山町豊場木戸	常安寺	昭和 29 年 3 月 12 日
"	木造不動明王立像	1 軀	知多郡阿久比町椋岡	平泉寺	昭和 29 年 2 月 5 日
"	木造毘沙門天立像	1 軀	"	"	昭和 29 年 2 月 5 日
"	木造薬師如来立像	1 軀	蒲都市金平町	補陀寺	昭和 29 年 2 月 5 日
"	木造馬頭観音立像	1 軀	"	"	昭和 29 年 2 月 5 日
絵画	紙本着色浮世絵肉筆観桜図屏風	1 双	一宮市丹陽町	個人	昭和 29 年 2 月 19 日
"	絹本着色花鳥図	2 幅	海部郡大治町馬島	明眼院	昭和 29 年 3 月 12 日
"	絹本着色花鳥図	1 幅	"	"	昭和 29 年 3 月 12 日
"	絹本墨画風神雷神図	2 幅対	"	"	昭和 29 年 3 月 12 日
"	紙本墨画円画山水図	1 双	"	"	昭和 29 年 3 月 12 日
"	絹本着色普賢菩薩像	1 幅	知多郡武豊町	正覚寺	昭和 29 年 2 月 5 日
"	絹本着色弁財天像	1 幅	知多郡東浦町緒川	乾坤院	昭和 29 年 2 月 19 日
"	絹本着色諸尊集会図	1 幅	"	"	昭和 29 年 2 月 19 日
書跡	紙本墨書正法眼蔵写本	15 帖	"	"	昭和 29 年 2 月 5 日
建造物	白山社本殿	1 棟	北名古屋市長久寺	高田寺	昭和 29 年 2 月 19 日
"	大御堂寺客殿	1 棟	知多郡美浜町野間	大御堂寺	昭和 29 年 2 月 19 日
"	大恩寺山門	1 棟	豊川市御津町広石	大恩寺	昭和 29 年 2 月 5 日
無形民俗	滝山寺鬼祭り		岡崎市滝町	滝山寺	昭和 29 年 3 月 12 日
"	豊橋神明社鬼祭り		豊橋市八町通	阿久美神明社	昭和 29 年 3 月 12 日
"	兎足神社田祭り		豊川市小坂井町	兎足神社	昭和 29 年 3 月 12 日
史跡	馬見塚遺跡	9.9 ㎡	一宮市馬見塚	一宮市	昭和 29 年 3 月 12 日
"	小野道風公誕生地	3021.4 ㎡	春日井市松河戸町	春日井市	昭和 29 年 3 月 12 日
"	大地遺跡	924.1 ㎡	岩倉市大地町	岩倉市	昭和 29 年 3 月 12 日
"	炭焼古墳群	1,348.8 ㎡	豊川市東上町	豊川市	昭和 29 年 3 月 12 日
天然記念物	斎山稲荷のくろがねもち	50 坪	名古屋市長久寺区大高町	斎山稲荷社	昭和 29 年 2 月 5 日
"	下萱津のフジ	694 ㎡	あま市下萱津	個人	昭和 29 年 3 月 12 日
"	須村サクライソウ自生地	3 反 6 畝 5 歩	豊田市旭八幡町	八幡神社	昭和 29 年 3 月 12 日
"	須山のイヌツゲ	12.9 ㎡	新城市作手清岳	個人	昭和 29 年 2 月 5 日
"	長江の大杉及び藤	5 坪	北設楽郡設楽町	個人	昭和 29 年 3 月 12 日
"	三島神社の大藤	82 坪	北設楽郡豊根村	三島神社	昭和 29 年 2 月 5 日

\* 愛知県公報 昭和 29 年 3 月 1 1 日号、3 月 13 日号、3 月 18 日号より作成

\*\* 指定後に市町村合併が行われた場合は、所在地欄に新地名を記入

を発掘（29 年 3 月 12 日県指定）調査し、続いて 27 年度から 30 年度にかけて名古屋城の石垣修理工事。28 年度には大地遺跡発掘、馬見塚遺跡調査、小野道風誕生伝説地保存（いずれも 29 年 3 月 12 日県指定）を行い、29 年度には入海貝塚の調査（28 年 11 月 30 日国指定）、瓜郷遺跡の調査（28 年 11 月 14 日国指定）、大高城跡の調査（13 年 12 月 14 日国指定）を行っている。

昭和 28 年 7 月 4 日には「愛知県文化財保護規則」が定められ、「文化財保護法」の規定による指定又は助成を受けていない有形文化財、無形文化財、史跡名勝天然記念物が県指定の対象となった。県は、この時点で文化財指定の申請、助成の申請を受け付け始めたのである。

こうして、昭和 28 年度には、29 年 3 月 12 日に大仏堂（江南市布袋町）の「木造阿弥陀如来坐像」、春日井市松河戸町の天野信景考証の「小野道風公誕生地」、滝山寺（岡崎市滝町）の「滝

山寺鬼祭り」、明眼院（大治町馬島）の明時代末の「絹本着色花鳥図」などが県指定となった。この年は、2 月 5 日、2 月 19 日、3 月 12 日の 3 回に分けて、計 33 件の指定申請が通っている。（表 6）。なお、この中には、後に国指定に切り替わったり、枯死により県指定を解除されたりしたものもある。

そして「愛知県文化財保護条例」が公布・施行された昭和 30 年度には、5 月 6 日に真清田神社（一宮市真清田）の室町時代の「獅子頭」ほか 23 件、6 月 3 日に華蔵寺（西尾市吉良町）の「伝池大雅作品群」ほか 36 件、7 月 1 日に龍源寺（豊川市萩町）の「黒門」ほか 10 件、11 月 18 日には曼荼羅寺（江南市前飛保町）の「曼荼羅寺伽藍（地藏堂）」ほか 6 件、翌 31 年 3 月 7 日に豊田市足助町の「飯盛山経塚出土品 秋草遊兎双雀鏡 1 面、刀子」ほか 6 件の指定物件があり、計 86 件が県指定となっている。昭和 28

表7 愛知県文化財保護条例制定以前の県指定文化財一覧

<制定前の昭和28年度>

種別・指定日別	昭和29.2.5	昭和29.2.19	昭和29.3.12	計
彫刻	5		3	8
絵画	1	3	4	8
工芸				0
書跡	1			1
考古資料				0
建造物	1	2		3
無形				0
無形民俗			3	3
史跡			4	4
名勝				0
天然記念物	3		3	6
計	11	5	17	33件

<制定前の昭和29年度>

0件

<制定後の昭和30年度>

種別・指定日別	昭和30.5.6	昭和30.6.3	昭和30.7.1	昭和30.11.18	昭和31.3.7	計
彫刻	3	4	2	4	2	15
絵画	3	20		1	2	26
工芸	8	2	1			11
書跡		4				4
考古資料					1	1
建造物	1	2	4	2	1	10
無形	2					2
無形民俗		1				1
史跡		1			1	2
名勝	1					1
天然記念物	6	3	4			13
計	24	37	11	7	7	86件

年度と比べ2倍以上の急激な伸びである(表7)。

しかし、この前の昭和29年度は、指定された物件が1件もみられない。この1年間は、愛知県文化財保護の新たな条例制定のための準備期間であり、指定を猶予した期間であったと思われる。その結果、昭和30年度の5月、6月の時期に県指定文化財が集中したことがうかがわれる。

昭和30年4月1日に「愛知県文化財保護条例」「愛知県文化財専門委員設置に関する条例」「愛知県文化財保護条例施行規則」が公布・施行された。それまでの「愛知県文化財保護審議会規則」と「愛知県文化財保護規則」は廃止され、より詳しい内容のものに切り替わった。そして、今に続く文化財保護の道が始まったのである。(加藤安信)

#### 4. まとめ

このように、文化財保護法の制定に基づいて、各県での文化財行政が本格化するなか、愛知県

では法的根拠として文化財保護条例の制定として結実する訳であるが、現在では忘れられてしまったその準備過程が存在していたことは、記憶に留めておく必要がある。現在、容易に確認できる文化財保護法の制定と愛知県文化財保護条例との制定には5年ほどの空白がある。これだけを見ると、間の5年間は行政的な動きはなかったかのように見えがちである。しかし実際にはそうではなく、絶え間ない対応の結果として、愛知県の文化財保護条例が成立したことを確認したいところである。

最後に、県指定の問題として、一つ取り上げておきたいことがある。これは、戦前にあったともいわれている県指定問題である。筆者は現在、西尾市の八王子貝塚(池上1963、牧ほか1973)および設楽町丸根古墳(沢田ほか1951年)の2遺跡でその事案を確認している。八王子貝塚は昭和7(1932)年3月に、丸根古墳では昭和19(1944)年にそれぞれ県指定史跡になったという。『西尾市史』では、八王子貝塚について、その後に国指定史跡への申請を行った

経緯も記されており、より詳細な記述となっている。また、当時、「史跡 八王寺(ママ)貝塚 愛知県」と記された木製の表札も建てられたようであり、その記念となった絵はがきが同紙に掲載されている(牧ほか1973:732頁)。これは県主導の顕彰行為であると推察される。

ところが、本稿の共同執筆者である加藤安信の見解は、戦前には根拠となる条例などは存在しなかったので、県による史跡の指定という制度はそもそもなかったのではないかと、ということである。確かに法的根拠がなければ、指定などの行政的措置は講じられることはない。そのことを裏付けるように、戦前の史跡指定で明確になっているものは、すべて国指定史跡である(表3)。近隣の県史跡指定の状況を見ても、文化財保護法の制定後、各県での文化財保護条例およびそれに相当する法的根拠が制定されてからであり、戦後から始まった措置であるといえる。

では、この愛知県下における戦前の県指定史跡という記載の根拠については、何かの誤認によるものなのであろうか。残念ながら現状では不明なママといえる。八王子貝塚も丸根古墳もともに、『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十』(小栗ほか1932)に掲載された遺跡で、このことが何か関係しているかもしれない。但し、複数人が異なる遺跡について記している現状を見るにつけ、単なる誤認では片付けられない

確固たる理由があったのではないかと推察される。いずれにしても、今後、特に八王子貝塚の指定に関わる当時の様子をより追究する必要があり、これについては今後の課題としたい。(川添和暁)

謝辞 本稿を草するに際して、特に愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室の尾崎綾亮氏・山内良祐氏および愛知県埋蔵文化財調査センター洲崎和宏氏からは、過分なご教示およびご配慮を賜った。また、加藤執筆分の資料収集に関しては柴垣勇夫氏のご尽力を賜った。隣接する長野県の状況について、馬場伸一郎氏からもご教示を賜った。

さらに、愛知県内の以下の文化財担当者からも、多くのご配慮を賜った。謝意を表する次第である。

一宮市教育委員会(瀧はる香)・岩倉市教育委員会(山内宏之)・小牧市教育委員会(土屋達也)・春日井市教育委員会(浅田博造)・常滑市教育委員会(小栗康寛・田中圭亮)・刈谷市教育委員会(鵜飼堅証)・西尾市教育会(浅岡 優)・安城市教育委員会(西島庸介)・豊川市教育委員会(前田清彦)・新城市設楽原歴史資料館(峯田尚美)・設楽町教育委員会および奥三河郷土館(金田直樹・渡邊俊也)

## 参考文献

- 池上 年 1963 「西尾貝塚」『日本考古学事典』(藤田亮策監修) 425頁 東京堂出版  
 岡田松三郎・沢田久夫・鈴木富美夫・村松信三郎・夏目一平 1967 『北設楽郡史 原始～中世』 北設楽郡史編纂委員会  
 小栗鐵次郎ほか 1932 『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十』 愛知県  
 金田直樹 2021 「奥三河の考古学調査」『悠久の記憶 ～設楽ダム関連発掘調査成果展～』令和四年度 愛知県埋蔵文化財センター 秋の埋蔵文化財展 展示解説資料 愛知県埋蔵文化財センター  
 川添和暁 2021 「設楽町津具の大根平遺跡・鞍船遺跡について」『研究紀要』22. 1～16頁 愛知県埋蔵文化財センター  
 川添和暁・金田新也・堀木真美子・堀木広・長田友也・平井義敏 2014 「東栄町佐々木氏所蔵資料について—小栗鐵次郎調査資料の実際—」『三河考古』24. 19～50頁 三河考古学談話会  
 沢田久夫ほか 1951 『三州名倉』 名倉村  
 牧 富也・杉浦敦太郎・神谷和正ほか 1973 『西尾市史— 自然環境 原始古代』 愛知県西尾市

# 岡崎市西牧野遺跡における ナイフ形石器について

● 社本有弥

岡崎市に所在する西牧野遺跡は県下で有数の旧石器時代の包含層を持つ遺跡である。当センターと愛知県埋蔵文化財調査センターのそれぞれが調査を行い、旧石器時代遺物の出土を多数確認している。筆者は遺物の垂直分布から上下で石器群が別れる可能性について検討を行った。今回は上層、下層それぞれの石器群からナイフ形石器を抜き出し、その特徴について検討を行う。

## 1. はじめに

西牧野遺跡は岡崎市に所在する遺跡で、平成21年度に当センターが（酒井 2013）、平成22年度に愛知県埋蔵文化財調査センターが調査を行っている（成瀬 2013）。確認された遺構・遺物の時代は旧石器時代から近世までと幅広く、長期間にわたって断続的に人が住んでいたことが確認されている。

## 2. 研究史概観

西牧野遺跡における旧石器時代の研究には、白石浩之氏の研究がある（白石 2017）。白石浩之氏は、遺物の分布をブロックとして区分し、石器組成や形態、石材といった観点から相違的な区分が可能であるか検討が行われた。石器集中地点である 09Cb 区と隣接する 09Cc 区では計5つのブロックに分けられること、時期は上層と下層で分けられることが指摘されている。そして、西牧野遺跡の編年的位置付けについて上層の石器群は岩宿Ⅱ並行期、下層の石器群を岩宿Ⅱ期より古く、始良 Tn 火山灰降灰以前の可能性があるとしている。

2022年には筆者が09Cb区の遺物の垂直分布から検討を行い、上下に分布が集中する部分があることを指摘、白石氏の論考を追認する形となった（社本 2022）。

今回はナイフ形石器に焦点を当て、加工箇所、素材剥片の状態について検討し、上層・下層の石器群におけるナイフ形石器の特徴を明らかに

するものである。

## 3. 上層のナイフ形石器について

上層のナイフ形石器（図1）は二側縁加工（1～7）、一側縁加工（8、9）、端部加工（10～14）、周縁加工（5、16）の16点がある。二側縁加工のナイフ形石器の中に切出形のものがある点は特筆される（5、6、7）。切出形のナイフ形石器はいわゆる岩宿Ⅱ期に代表される石器で、相模野編年の第Ⅲ期（諏訪間 2001）、静岡東部の休場層直下黒色帯（静岡考古学会 1995）と同時期と言える。

加工について見ていく。主に裏面から表面にかけて加工が施されているが、表面から加工を施しているものがある（2、4、6、7、11、16）。おそらく、最終的な調整のために行われたものと思われる。二側縁加工、一側縁加工ともに、右側縁に鋭利な縁辺を残して加工している。裏面基部への加工は切出形のナイフ形石器には見られるが、他のナイフ形石器には見られない。

ナイフ形石器の素材は縦長剥片と考えられるものが多く、周縁加工の1点のみが横長剥片素材となっている。素材剥片の打面の位置を見ると、7割近くが打面を下位に置いて加工を施している。石材を見ると、加工部位などに関係なく黒曜石と凝灰岩はほぼ同数使われている。

## 4. 下層のナイフ形石器について

下層のナイフ形石器（図2）は二側縁加工（1

～6)、一側縁加工(7～11)、端部加工(12)、周縁加工(13)の13点がある。切出形のナイフ形石器は見られないが、横長剥片を素材とするナイフ形石器があるため、相模野第Ⅱ期と第Ⅲ期の間、静岡東部の第Ⅰ黒色帯と同時期と考えられる。

加工は主に裏面から表面にかけて加工が施されているが、表面から加工を施しているものがある(3、8、9、11)。また二側縁加工、一側縁加工ともに、右側縁に鋭利な縁辺を残して加工が行われている。裏面基部への加工は二側縁加工の一部と端部加工に見られる。

ナイフ形石器の素材は、主に縦長剥片を素材としているが、二側縁加工と周縁加工に横長剥片を素材としているものもある。素材剥片の打面の位置を見ると、6割近くが打面を上位に置いて加工を施している。石材を見ると、加工部位などに関係なく黒曜石と凝灰岩はほぼ同数使われている。

## 5. 上下層のナイフ形石器の比較

ここからは上・下層のナイフ形石器について共通点、相違点について検討していく。

上・下層それぞれに二側縁、一側縁、端部、周縁加工のナイフ形石器がある点は共通している。明確な違いとしては、やはり切出形のナイフ形石器の有無であろう。

素材剥片に着目すると、上・下層ともに縦長

剥片を主体として利用していることがわかる。また横長剥片の打面を左に置いて加工している点についても共通している。だが、縦長剥片の利用形態に差があり、上層のナイフ形石器多くが打面の下位に置いて加工が施されているのに対し、下層のナイフ形石器は打面を上位に置いて加工を施している。石材利用についてはナイフ形石器においては上・下層で利用の違いは無いと言える。

## 6. まとめと今後の展望

今回は西牧野遺跡の上・下層のナイフ形石器文化について、その主であるナイフ形石器の形態や素材について検討を行なった。

基本的な組成や素材剥片の形、石材の割合というものは、ナイフ形石器において上・下層での差はほとんど無いことがわかる。これが西牧野遺跡特有のものなのかは、今後の検討課題としたい。

前回の検討では上層の石器群を岩宿Ⅱと同時期とし、下層の石器群を始良 Tn 火山灰降灰直後もしくはそれより古くとしていた。今回の検討を通して、上層の石器群の時期は変わらず、切出形のナイフ形石器が見られる相模野第Ⅲ期などと同時期と言えるが、下層の石器群については始良 Tn 火山灰降灰後の石器群として良いだろう。今後は石器群全体を通じた検討を進めたい。

## 引用・参考文献

- 岐阜市教育委員会 1990 『椿洞遺跡』 岐阜市文化財報告  
 酒井俊彦 2013 『西牧野遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第174集  
 静岡県考古学会 1995 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集」 静岡考古学会シンポジウムIX  
 白石浩之 2017 「愛知県岡崎市西牧野遺跡の遺物分布から見たナイフ形石器文化の様相」 『東海石器研究 第7号』  
 諏訪間順 2001 「相模野野旧石器編年の到達点」 『神奈川考古学会 平成12年度 考古学講座』

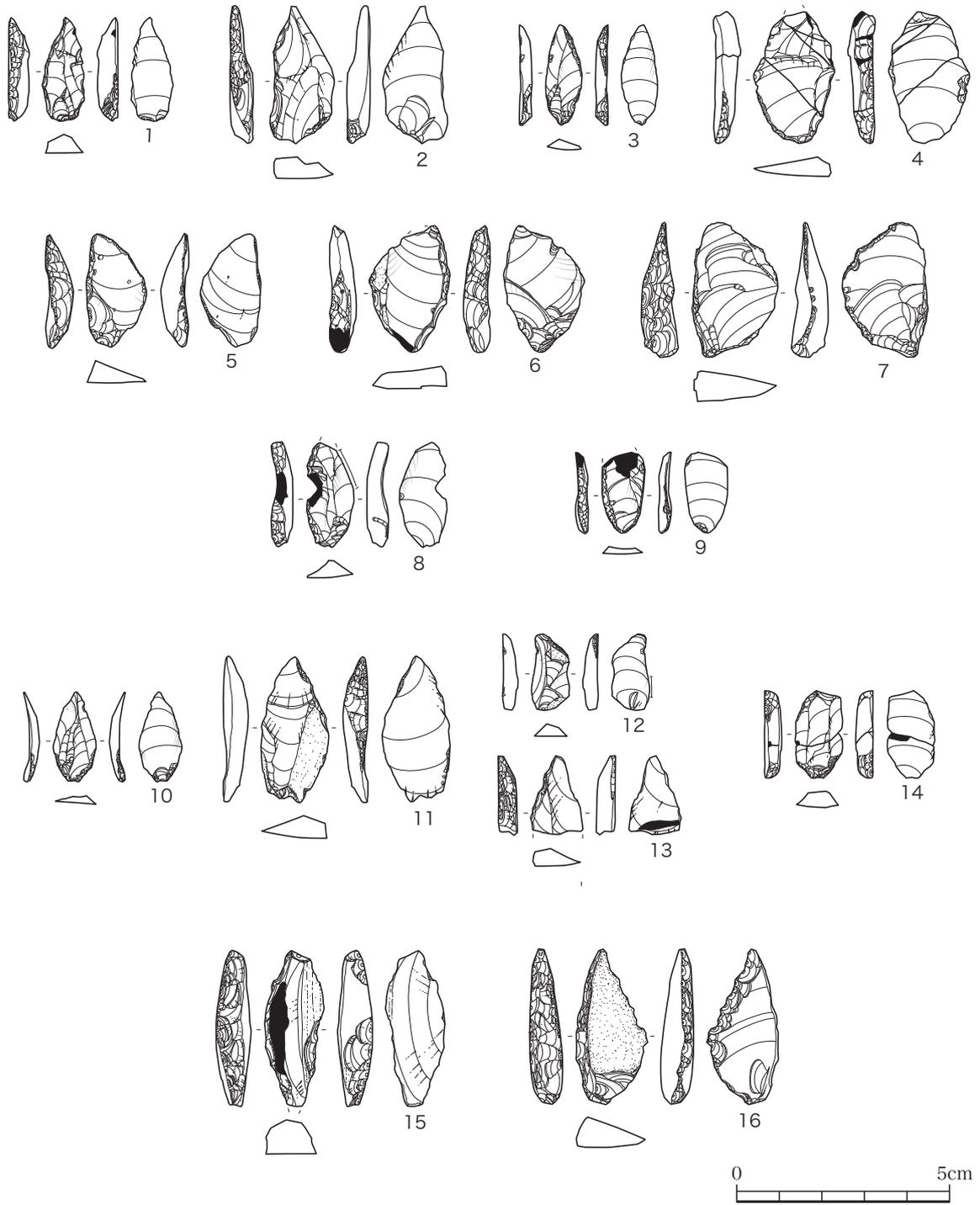


図1 上層石器群のナイフ形石器(縮尺2/3)



図2 下層石器群のナイフ形石器(縮尺 2/3)

# 岩瀬文庫所蔵「清洲図」について —清須城下町の復元に関連して—

● 鈴木正貴

西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」は岡田啓（康礼）が天保年間末頃に模写した図で、清洲宿を含めた美濃街道を中心に描かれた図に清須城に関連する故地が書き込まれたものである。これについて、近世後期に制作された清洲に関する地誌類や絵図類などと比較・検討した。この結果、清須城に関する故地の調査は『張州府志』を嚆矢とし19世紀前半に研究が進んだことが判明したが、これらの記述は廃城から200年以上経過しており、大いに参考になるもののその信憑性にはやや疑問が残るものといえる。

## 1. はじめに（「清洲図」の紹介）

本稿では、西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」を紹介し、そこに描かれた内容について清須城下町の復元研究にどの程度活かすことができるかを、他の地誌類と絵図類と比較して検証する。

「清洲図」（図1・2：なお翻刻・掲載は紙幅の都合上で一部を省略している）は尾張藩士である岡田啓（康礼）が天保年間末頃に模写した図である。岡田啓は尾張藩が編纂、深田正韶が撰集した『尾張志』61巻を中尾義稲らとともに執筆した国学者でもある。「清洲図」は紙本彩色で、道路を黄色、川や水路などを青色、寺院は赤色に塗布され、神社には赤色で鳥居が描かれている。これらの表記は描画当時に存在した施設と推定されるものであり、この点を重視すれば、画面中央を縦断する形で清洲宿を含む美濃街道を中心に描かれた「清洲図」と評価できよう（鈴木2022）。

一方、これとは別に黒丸に続いて記された注記も多数存在している。城跡付近では「信長ノ居間」、「北矢倉」、「南矢倉」、「升形」などの注記があり、「外堀筋」、「内堀筋」、「土居筋」などについては破線で位置を示しているものも存在する。後で検証するように、こうした表記は岡田がかつて存在した清須城に関わる施設などの跡地（故地）として記したものと推測されるものである。

## 2. 清須城に関連の地誌・絵図との比較

そこで、西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」にある注記の意図を考察し、図の史料的な評価を確認するために、清須城と清須城下町に関わる他の文献や絵図類と対比することで、検討を進めたい。ここで取り上げる史料は1『駒井日記』文禄三年四月三日条（以下『駒井日記』と略す）、2『春日井郡清須村古城絵図』（以下『古城絵図』と略す）、3『張州府志』「清洲志」（以下『張州府志』と略す）、4『張州府志』「清洲之図」（以下『張州府志図』と略す）、5『尾張徇行記』第5巻「清須」（以下『徇行記』と略す）、6『清洲志』巻之一（以下『清洲志』と略す）、7『清洲志』「清洲壊地図」（以下『清洲志図』と略す）、8『尾張志』「清須の部」（以下『尾張志』と略す）、10『清洲村絵図面』、11『春日井郡清洲村絵図』史料番号八六一二（以下『村絵図』と略す）、12『清洲町史』「城下町の構成」（以下『清洲町史』と略す）の11種である。これに問題の9西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」（以下『清洲図』と略す）を合わせた12種の史料について、記述の有無を一覧表にまとめた（表1～6）。

### （1）『駒井日記』文禄三年四月三日条

『駒井日記』は豊臣秀次の右筆駒井中務小輔重勝の日記で、文禄2年閏9月から文禄4年4月までの17巻があり、その一部が現存する。問題となる部分は、文禄三年四月一日条で、豊臣秀吉が駒井重勝に尾張国清須町の町人を帰村さ

せるよう命じ、同四月三日条で、豊臣秀次から三位法印常閑・清須町奉行三輪五右衛門と池田丹後入道と日比野下野守にその命令が伝えられ、尾州在々所々より罷り出た町人が3名の町奉行の担当別に書き上げられた部分であり、これにより、文禄3（1594）年に清須城下町に存在した町名が判明する。ただし、これらが清須城下にある全ての町名ではないことに注意しておきたい。一覧には愛知県2011『愛知県史資料編13 織豊3』から各町の担当（三輪五右衛門は「三輪」、池田丹後入道は「池田」、日比野下野守は「日比野」と略す）と帰村させるべき軒数を記載した。

### （2）『春日井郡清須村古城絵図』

名古屋市蓬左文庫に所蔵される本図は、尾張藩が1650年頃に制作した絵図群のうちの一つで、その時点で残存していた清須城の縄張りを図化した絵図である（遠藤他1991）。清須城下全体の縄張りが描かれ、空堀、水堀、土塁などが黄色や青色で表現されるいわゆる城絵図である。絵図に記された注記の大部分は距離や高さ、深さなど大きさを示すものであるが、場所については、清須本町、清須北市場町、清須神明町、朝日村、野田町、清須川、五条橋、本丸、天守、屋くらたい、樹木屋敷、御園神明、神明、山王社、愛宕の記述が存在する。

### （3）『張州府志』「清洲志」

『張州府志』は尾張藩が最初に編纂した尾張国の地誌で、全30巻25冊で構成される。3代藩主徳川綱誠の治世で編纂が計画されたが綱誠の急逝により作業は中断、8代藩主徳川宗勝が松平君山に編纂を命じて1752年に完成された。なお、清須本町に所在する久証寺の僧高木大度も編者に名を連ねている。巻十に「清洲志」があり、建置沿革、村名、坊巷、津梁、土産、人物、神祠、寺観、宅址の項目で構成される。これらの項目のうち、一覧には清須城下町の構造に関わるものとして村名、坊巷、津梁、神祠、寺観、宅址を取り上げる。坊巷の項目では「今尚存矣」と「今皆為田圃尚存其名」の区別がある。一覧作成に際しては、愛知県郷土資料刊行会1974『愛知県郷土資料叢書第19集 張州府志（全）』を用いた。

### （4）『張州府志』「清洲之図」

『張州府志』には付録として絵図類がまとめら

れており、その中の一つに「清洲之図」がある。本図では、冒頭に黒丸を付す注記と付さない注記の2種があり、黒丸を付す注記が清須城時代に関連するもの、付さない注記が現在ある施設に関するものという区別があるように推定される。

### （5）『尾張徇行記』第5巻「清須」

『尾張徇行記』は、樋口好古が寛政4（1792）年から文政5（1822）年にまとめた私撰地誌である。樋口は古くは勘定方並手代で、寛政時代には御国方吟味役となり、司農の任務の完遂に努力し領内を周り村々の様子を把握し、これらを記録にまとめた。第5巻に清洲御代官支配所之部があり、冒頭に清須が掲載されている。清須の項では、石高などの記載の後に「一此村ハ城府ノ址也」で始まる部分（204頁）があり、府内に属する町や田面の字に残る町名と屋敷が記述される。一覧ではこの記述を記載した。その後には『張州府志』の記述がそのまま転載されており、これは一覧からは除外した。名古屋市教育委員会1966『名古屋叢書続編第5巻 尾張徇行記（2）』を用いた。

### （6）『清洲志』巻之一

『清洲志』は、武田載周により文政9（1826）年頃に完成された清洲に関する地誌である。武田載周は清洲の文化人の先駆者武田麒六の三男であり、丹羽盤桓子から漢籍と書法を学んだ。本書はこれまでの尾張の地誌・記録・文芸作品を渉猟して清洲に関する記述を整理したもので（清洲町1969）、全5巻からなる。巻之一は城墟、宅趾、旧号、壊地で構成される。宅趾の項目では11の屋鋪跡について、旧号の項目では68の町や寺などの諸施設の跡地について記され、その後には清洲から名古屋に移転した寺社や町（○〇陌と表記）などが列挙されている。旧号で示された記述は清須における位置情報がある程度判明したものと理解される反面、後者は単純に清須から名古屋に移転した伝承があるものとみられる。国文学研究資料館『国書データベース』より引用した（書誌ID：200018482、種別：国文研蔵を閲覧）。

### （7）『清洲志』「清洲壊地図」

『清洲志』の写本の一つに「清洲壊地図」が付図としてあり、図の一部に「武田載周が文政9

(1826)年10月に識す」と記述がある。墨書により図と注記が記され、冒頭に白丸を付す注記と付さない注記の2種が確認される。白丸を付す注記が清須城時代に関連するものと思われる。

#### (8)『尾張志』「清須の部」

『尾張志』は天保15(1844)年に尾張藩が編纂した尾張国の地誌で、深田正韶が撰集した。『張州府志』をもとに再調査を行って改撰し、名古屋城下、熱田、各郡別に、境域沿革、郷村、人物、物産、神社、寺院、名所、旧跡などが記載される。付図は小田切春江が担当したという。全61巻(序巻と本巻60巻)で構成されており、巻之35に「清須の部」がある。内容は、町の名、川橋杵の部、土産、神社、寺院、宅跡并寺院の跡の順に記述されている。これらの項目のうち、一覧には土産を除く項目を取り上げる。町名については、町の名を示すもの(一覧に「町の名」と表記)と、名を残すのみのもの(一覧に「名のみ」と表記)に区別して記述されている。愛知県図書館蔵の資料を用い、愛知県図書館ホームページ貴重本デジタルライブラリーを閲覧し引用した。

#### (9)西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」

「清洲図」の来歴についてはすでに記述したとおりである。なお、写真は、西尾市岩瀬文庫2022『西尾市岩瀬文庫企画展 古城一失われた城の記録―』にその一部が掲載されている。

#### (10)『清洲村絵図面』

『清洲村絵図面』は第1期の『近世絵図地図集成』第5巻尾張[1]095に掲載された図面で、弘化4(1847)年頃に小田切春江が制作したものである。縦69cm、横125cmの図面で愛知県図書館が所蔵するという。近世絵図地図研究会編、本田豊解説1999『近世絵図地図集成 第1期第5巻尾張[1]』霞ヶ関出版を引用した。

#### (11)『春日井郡清洲村絵図』史料番号八六一二

尾張藩は領内の各村に命じて村絵図を作成、提出させている。現在、(財)徳川黎明会徳川林政史研究所には3点の『春日井郡清洲村絵図』が伝来しており、『新川町史』には史料番号八六一二が掲載されている。制作年代は不明で「百八十」の貼紙がある。村絵図に関する触書から、村絵図には1御蔵入本田新田并に給地地境や2村境其外寺院社地、3川々用悪水を調べ描

画するよう命じられている。『張州府志図』、『清洲志図』、『清洲村絵図面』などとは相違して清須城に関わる旧地の記述はほとんど存在しない。しかし、字名などとして清須城に関連する名前が確実に残っているものがあり、これを参考として一覧に掲載した。清須市2007『新川町史資料編2 別冊 絵図・地図編』を用いた。

#### (12)『清洲町史』「城下町の構成」

『清洲町史』には、「第三清洲の城下町」「二城下町の構成」の項で、城下町期に存在したと思われる町名や屋敷名および寺社名などを検討し、「図-1 清洲城下町推定図(慶長年間)」と「図-2 清洲城下町屋敷・寺院位置推定図」が掲載されている。これまで検討してきた近世地誌類には存在しない屋敷名が複数存在しており、これらはおそらく林良泰の『清洲雑誌稿』の記述を参照したものと思われるが、この点は筆者としては今のところ検証できていない。一覧表には、「図-1 清洲城下町推定図(慶長年間)」に掲載されたものには「1」、「図-2 清洲城下町屋敷・寺院位置推定図」に掲載されたものには「2」と付した。清洲町1969『清洲町史』。

### 3. 記載内容の検討

12種の地誌・絵図類の比較検討を行った結果、気づいた点を列挙する。

(1)『張州府志図』、『清洲志図』、『清洲村絵図面』、『清洲図』の4種の絵図は、縄張り図としてみた場合、堀や土居が破線で表現されている程度にとどまっており、城郭の縄張りを描いたいわゆる城絵図ではない。しかし、清須城に関連する施設や町名の位置情報を記載している点を重視すれば、『村絵図』とも大きく異なっており、城下町図の一種と見做せるものと思われる。

(2)地誌類および絵図類は、制作年が新しいほど情報量が増加する傾向があり、古い作品を参考にして制作されていると思われる。しかし、それでも『張州府志図』、『清洲志図』、『清洲村絵図面』、『清洲図』の4種の絵図で大道寺宅(大道寺・大道寺屋敷など)や牢屋敷などのいくつかの項目では、位置情報が大きく異なるものがある。これらはおそらく文字情報を図化する際

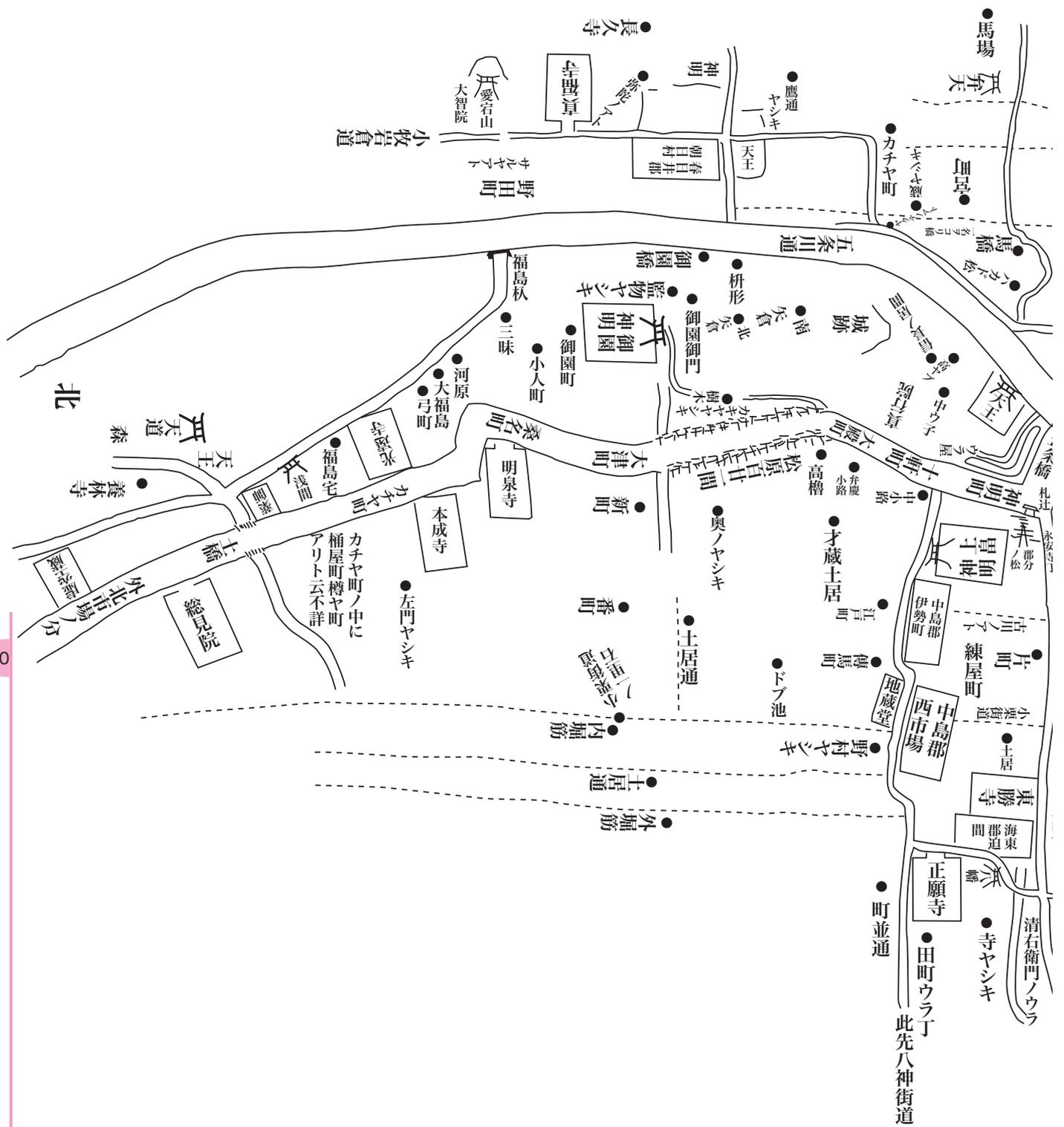


図1 西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」の翻刻(1)(一部省略)



に生じた誤差と推定され、情報の信憑性にやや欠けるものと考えられる。

(3)江戸時代の地誌類からみる町名の記述は、『駒井日記』文禄三年四月三日条の町名の記述と対比すると、約半数は位置を追跡できるものが、全体として意外と合わないと感じられる。『駒井日記』の史料の性格からみて町名が網羅的に記されていない点はやむを得ないが、『駒井日記』に記された町名のうち中市場、上島町(上下)、片新町、中須賀口、いくみ浦町、順礼池町、呉服町、本町中町、名護屋町、かなや町、勝万寺町、本町上ノ切、田町、下町桶屋町、北市場下町分、見その新町、山田町、ひさや町、大工町、入苦町については、その後の地誌編纂事業では追跡できていないものであり、その数が多いことは注意すべきである。『張州府志』は廃城後約140年、『尾張徇行記』以降は廃城後200年以上経過しており、その間に失われた情報はかなり大きいものと推定できる。

(4)西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」では、城跡付近で「信長ノ居間」、「北矢倉」、「南矢倉」、「升形」など魅力的な記述が存在するが、実際に発掘調査や比較的信頼できる『清須村古城絵図』などで確認されている縄張りとは対比すると、うまく対応していない。おそらく『信長公記』などの記述をみて制作者が考察して描いたものと思われる。

(5)一方、地名などで追跡できる町名や「カナクソ山」などの金属製品関連の職人が存在した可能性が考えられる表記は、やはり取り扱いに注意すべきではあるが、参考になる記述である。天保15(1844)年に尾張志御用として村方より提出された書上の控には、鍋屋分の古跡について「先年鍋屋町二■いもじ屋御座候処、兼くそ山ヶ所御座候」とある(新川町2007)。実際、北側の「カナクソ山」付近での発掘調査では鍛冶関連遺物などが多量に出土しており(鈴木編2013)、注目できる。

(6)地名や伝承の多様さから、さまざまな職種の職人町が存在したことと多方面から商職人が清須に移り来たことが明らかであり、この点はもっと強調されるべきものと思われる。多様な職人が存在したためか、被差別部落に関連する可能性のある記述がいくつか確認される。本

田豊によれば、牢屋敷の記述から「その牢屋敷で働いていた非人の人たちがいた」可能性を指摘している(本田2005、147頁)。また、ある地区について、そこは「その昔、清洲城に織田信長が居城していた当時、下駄、足袋、草履などの製作、城主のために肉類料理をする者五人を」「現在地に住ませた」という伝承などを紹介している(本田2005、65頁)。別の地区では「清洲の殿様のために馬具・金具を作った」口伝もあるという(本田2005、69頁)。このように、清須はその城下町内外に多様な商職人が集まった大都市であったことを改めて確認できよう。

＜日本は憲法で基本的人権が保障されており、職業や出自などによるいわれのない差別はこの人権を侵害するものである。部落差別問題は深刻な社会問題の一つであり、この払拭のためには問題に対し正しく理解して深い認識が必要である。本稿ではこの認識に基づき、歴史的な理解を正しく深めるため、関連する事項を考究した。筆者は人々の心に潜む差別意識の払拭を願ってやまない立場である。＞

#### 4. まとめ(「清洲図」の紹介)

西尾市岩瀬文庫所蔵「清洲図」は、岡田がかつて存在した清須城に関わる施設などの跡地(故地)を記録したもので、「推定城下町図」と評価できるものである。そして、他の江戸時代に制作された地誌類と絵図類と比較することによって、江戸時代後期の清須城に関する研究の進展と顕彰のあり様が明らかになると思われる。この点は今後の更なる分析が必要となろう。また、今回の検証の結果、戦国織豊期の清須城の実態を明らかにするには、これらの地誌や地図類はある程度は参考になるものの、信憑性に問題があつて全面的に信用することはできないと考えられる。

最後に、本稿を作成するにあたり、「清洲図」の存在をご教示いただいた西尾市教育委員会浅岡優氏、「清洲図」の翻刻に際して校閲いただいた上野加耶子氏、さまざまな情報提供をいただいた柴垣哲彦氏には、記して感謝申し上げる。

表1 清須城下町関連の町名一覧(1)

	駒井日記	古城絵図	張州府志	張州府志図	徇行記	清洲志	清洲壕地図	尾張志	清洲図	清洲村絵図面	清洲村絵図	清洲町史
京町	三輪40軒		尚称其名	●京町	○A	京町,京陌	○京丁	名のみ	●京町	京町	字京町	●1
長者町	三輪95軒					長者町	○長者丁	名のみ	●長者町	長者町	字長者町	●1
本町	三輪20軒	清須本町	今尚存矣	本町		本陌	本町	町の名	本町	本町		●1
中市場	三輪57軒					中市場陌						
竹屋町	三輪46軒					竹屋町	○竹ヤ丁	名のみ	●竹屋町	竹屋町		●1
上島町下	三輪36軒					上島陌, 上島町						●1
片新町	三輪15軒											
はりや町	三輪38軒					針屋町, 針屋陌	○針屋丁	名のみ 針屋町	●針屋町	針屋町		●1
中須賀口	三輪32軒					中須賀陌						
上島町上	三輪61軒					上島陌						
いくゑ浦町	三輪98軒					綱浦町						
順礼池町	三輪98軒											●1
呉服町	三輪68軒					呉服陌, 呉服町						
本町中町	三輪22軒											
寺野町	三輪40軒			寺野分	○B					寺野分		●1
名護屋町	三輪69軒											
かなや町	三輪22軒											
勝万寺町	三輪64軒					正万寺陌						
本町上ノ分	三輪135軒											
下町	三輪55軒					下町	○下丁	名のみ	●下グマチ	下町	字下町	●1
永安寺町	池田84軒		尚称其名	永安寺町	○A	永安寺陌, 永安寺町	永安寺町	名のみ	永安寺丁	永安寺町		●1
伊勢町	池田49軒		尚称其名	伊勢町分	○C	伊勢陌, 伊勢町	伊勢町		伊勢町	伊勢町	伊勢町	●1
ねりや町	池田65軒					ねり屋町, 煉屋陌, 練屋町		名のみ 練屋町	練屋町	練屋町	字ねりや町	●1
田町	池田78軒					田町						●1
大津町	池田57軒					大津陌	大津丁	町の名	大津町	大津町		●1
桑名町	池田54軒					桑名陌, 桑名町	桑名丁	町の名	桑名町	桑名町		●1
新町	池田136軒					新町	○新丁	名のみ	●新町	新町	字新町	●1
中小路町	池田22軒			●中小路筋		中小路	○中小ぢ	名のみ 中小路	●中小路	中小路	字川田中小路	●1
北市場桶屋町	池田26軒					桶屋町, 桶屋陌	ヲケヤ丁		桶屋町			●1
下町桶屋町	池田32軒											
鍛冶屋町分 <small>(北市場)</small>	池田95軒					鍛冶屋町	かぢヤ丁	町の名	カチヤ町	鍛冶屋町		●1
北市場下町分	池田27軒											
見その新町	池田53軒											
山田町	池田65軒					山田陌						
宮町	日比野85軒		尚称其名	●宮町	○A	宮町	□宮丁	名のみ	●宮町	宮町		●1
こまき町	日比野105軒					小牧陌	小牧町	名のみ 小牧町	小マキ丁一名 ハイトリ丁	小牧町		●1
北市場	日比野49軒	清須北市場町		北市場村							北市場村	●1
ひさや町	日比野101軒											
大工町	日比野38軒											
鍛冶屋町 <small>(野田)</small>	日比野38軒					鍛冶屋町	○かぢヤ丁		●カチヤ町	鍛冶屋町		●1
山田町	日比野35軒					山田陌						
みその町	日比野155軒					御園町, 御園陌	○御園丁	名のみ 御園町	●御園町	御園町	字御園	●1
長島町	日比野53軒					長島陌, 長島町						
入苔町	日比野56軒											
新町	日比野98軒					新町	○新丁	名のみ	新町	新町	字新町	●1
神明町		清須神明町					神明町	町の名	神明町	神明町		

表 2 清須城下町関連の町名一覧 (2)

	駒井日記	古城絵図	張州府志	張州府志図	徇行記	清洲志	清洲壊地図	尾張志	清洲図	清洲村絵図面	清洲村絵図	清洲町史
朝日村		朝日村		朝日村	○B	朝日陌, 朝日町	朝日村		朝日村	朝日分		●1朝日 町
野田町		野田町		野田町	○C	野田町			野田町	野田町		●1
須賀口村			村名									
市場村			村名		○C				●		市場村	
六角堂村			村名									
狹間村			村名	迫間村	○B	迫間町	狹間村		迫間	迫間分		●1
土田村			村名	土田分	○B		土田村			土田分		●1
田中町			今尚存矣	田中町	○B		田中町	町の名	田中町	田中町	田中町	
宿町			今尚存矣									
外町			今尚存矣		○C		外町	町の名	外町	外町		●1
大殿町			尚称其名	大殿町	○A	大殿町	○大トノノ アト	町の名	大殿町	大殿町		
伝馬町			尚称其名	●伝馬町	○A	伝馬町, 伝馬陌	○伝馬丁	名のみ	●伝馬町	伝馬町	字伝馬町	●1上下 伝馬町
江戸町			尚称其名	●江戸町筋	○A	江戸町	○江戸丁	名のみ	●江戸町	江戸町	字江戸町	●1
弓町			尚称其名		○A	弓町	○弓丁	名のみ	●弓町	弓町	字弓町	●1
西市場				西市場分	○B		西市場		西市場			
清洲宿				清洲宿								
鍋屋				鍋屋分	○C	鍋屋陌			鍋屋			●1
小塚				小塚分	○C	小塚陌						●1
内須賀口				内須ヶ口谷	○B							●1
番町					○A 大番小番	番町	○番丁	名のみ	●番町	番町	字上番町他	●1
薦僧町						薦僧町	コモ僧丁ノア ト					
弁慶小路						弁慶小路	○弁慶小路	名のみ	●弁慶小路	弁慶小路		
樽屋町						樽屋町	タルヤ丁		樽屋町			●1
小人町						小人町	○小人丁	名のみ	●小人町	小人町		●1
高下町						高下町	○高ゲ丁	名のみ 高毛町	●高ゲマチ	高毛町		●1
船入通り						船入陌	○船入通り		●船入通	船入通		●1船入 町
田町裏町						田町裏町	○田町ウラ町		●田町ウラ町	田町裏		●1浦町
武兵陌						武兵陌						
田陌						田陌						
福井陌						福井陌						
富田陌						富田陌						
玉屋陌						玉屋陌						
鉄砲陌						鉄砲陌, 鉄砲町						
上長者陌						上長者陌						
下長者陌						下長者陌						
小桜陌						小桜陌						
島田陌						島田陌						
西鍛冶陌						西鍛冶陌						
伊倉陌						伊倉陌						
米倉陌						米倉陌						
皆戸陌						皆戸陌						
大船陌						大船陌						
塩陌						塩陌						
堀江陌						堀江陌						
小船陌						小船陌						
戸田陌						戸田陌						
七間陌						七間陌, 七間町						
常盤陌						常盤陌						
笹屋陌						笹屋陌						
瀬戸物陌						瀬戸物陌, 瀬戸物町						
関鍛冶陌						関鍛冶陌, 関鍛冶町						
吉田陌						吉田陌						
久屋陌						久屋陌						

表3 清須城下町関連の町名一覧 (3)

	駒井日記	古城絵図	張州府志	張州府志図	徇行記	清洲志	清洲壊地図	尾張志	清洲図	清洲村絵図	清洲村絵図	清洲町史
上田陌						上田陌						
諸陌						諸陌						
和泉陌						和泉陌						
五条陌						五条陌						
小田原陌						小田原陌						
万屋陌						万屋陌						
官陌						官陌						
駿河陌						駿河陌						
袋陌						袋陌						
元重陌						元重陌						
三ツ蔵						三ツ蔵						
干物町						干物町						
名古屋町						名古屋町						
下小牧町						下小牧町						
須ヶ口町						須ヶ口町						
屋里町						屋里町						
袋之内						袋之内						
霧重町						霧重町						
料理人町						料理人町						
正願寺町						正願寺町						
寺町						寺町						
宮ノ町						宮ノ町						
材木町 (本町)						材木町			●材木町	●		●1
材木町 (練屋町)						下材木陌, 上材木陌						●1
片町						片町		名のみ	●片町			
小市場						小市場町						●1
霞町						霞陌						●1
外北市場						外北市場			外北市場	外北市場		
十軒町						十軒町	町の名		十軒町	十間町		
町並通						○町ナミ通			●町並通	町並通		
寺ヤシキ						○寺ヤシキ			●寺ヤシキ			●1
穢多村						△穢多村			△穢多村	穢多村		
法華寺町						○法華寺			●法華寺	法華寺町		●12
神明ノ辻						神明ノ辻				神明ノ辻		
遊女町の跡								名のみ	●			
天王町										天王町		
片町 (南)										片町		●1
裏町										裏町		
鷹匠町												●1
西小路												●1
寺小路												●1
東寺小路												●1

『張州府志』の項には「今尚存矣」と「今皆為田圃尚存其名」の区別を記入した。

『徇行記』の項にはA：田面ノ字二町ノ名遣リ、B：元本郷アレ共今ノ分郷文ノ地八府内二属シタル、C：モト町ノ名ノ遺レルの区別を記入した。

『清洲町史』の項には1：清洲城下町推定図（慶長年間）、2：清洲城下町屋敷・寺院位置推定図の区別を記入した。

### 引用・参考文献

愛知県 2011 『愛知県史資料編 13 織豊 3』

愛知県郷土資料刊行会 1974 『愛知県郷土資料叢書第 19 集 張州府志 (全)』

遠藤才文・川井啓介・鈴木正貴 1992 「尾張国城絵図考」『愛知県中世城館分布調査報告書 (I) 尾張地区』愛知県教育委員会

清須市 2007 『新川町史 資料編 2 別冊 絵図・地図編』

清洲町 1969 『清洲町史』

近世絵図地図研究会編、本田豊解説 1999 『近世絵図地図集成 第 1 期第 5 巻尾張 [1]』霞ヶ関出版

鈴木正貴編 2013 『清洲城下町遺跡XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集

鈴木正貴 2022 「新発見! その 2 戦国時代の清須城の痕跡を探る 『清洲図』」『西尾市岩瀬文庫企画展 古城一失われた城の記録一』

名古屋市教育局 1966 『名古屋叢書続編第 5 巻 尾張徇行記 (2)』

本田豊 2005 『戦国大名と賤民一信長・秀吉・家康と部落形成一』現代書館

表4 清須城下町関連施設等名称一覧(1)

	古城絵図	張州府志	張州府志図	徇行記	清洲志	清洲壊地図	尾張志	清洲図	清洲村絵図 面	清洲村絵図	清洲町史
古城・城跡	本丸		古城			城墟		城跡	城址	古城	
天守台	天守基										
屋くらたい	屋くらたい										
北矢倉		●北矢倉		北櫓	□北櫓			●北矢倉	北櫓	宇矢倉	●2
南矢倉				南櫓	□南櫓			●南矢倉	南櫓		●2
升形				升形	□升形			●升形	升形		
信長ノ居間								●信長ノ居間			
土橋(北市場)		土橋			土ばし			土橋			
御園御門				御園御門	□ミソノ御門			●御園御門	御園御門		
本町御門				本町御門	□本町御門跡			本町御門ノアト	本町御門		
高櫓(大殿付近)					□高櫓			●高櫓	高櫓		
矢倉(本町)								●矢倉	櫓	矢倉之内	●2櫓
馬場(田中町)				馬場	○馬バ			●馬場			
馬場(外町)				馬場				●馬場			
片端(土田)				片端		片端		●ムカシノ片端			
片端(寺野)				片端		片端		●片端	片端		
丸ノ内(南)		丸之内							丸ノ内		
丸ノ内(田中町)				丸ノ内	○丸ノ内ト云			●丸ノ内	丸ノ内		●1
才蔵土居		●才蔵		才蔵土居	○才蔵土居			●才蔵土居	才蔵土居		●2
中畝				中うね	○中ウ子	中うね		●中ウ子	中畝	字中くね	
土居(西市場)				土居						字土井	
土居(小栗街道)								●土居		字土井	
高藪(古城付近)				高藪	○高ヤブ			●高ヤブ	高藪		
高藪(迫間付近)				高藪	○高ヤブ			●高ヤブ	高藪		
高藪(寺野付近)					○高ヤブ			●高ヤブ	高藪		
土居筋(西)		土井筋		土居	○土居通り			●土居通			
内堀筋(西)				内堀外堀	○内堀すぢ			●内堀筋			
外堀筋(西)				内堀外堀	○外堀すぢ			●外堀筋			
土居筋(東)		●土井		土居	○土井すぢ			●土居筋		字土井	
内堀筋(東)		内堀筋		内堀外堀	○内堀すぢ			●内堀筋			
外堀筋(東)		外堀筋		内堀外堀	○外堀すぢ			●外堀筋			
外堀筋(南)					○外ボリスチ			●外堀筋			
清須川	清須川				於曾那川五條川清洲川		五條川	五條川通		五條川通り	
五条橋	五条橋	五条橋	五条橋	五条橋	五条橋	五条橋	五条橋	五条橋		五条橋	
御園橋				御園橋				●御園橋	御園橋		
馬橋				馬橋				●馬橋			
順礼橋				順礼橋	順礼橋			順礼橋	順禮橋		
樹木屋敷	樹木屋敷	柿屋宅	御樹木屋舗	柿屋宅	樹木	柿屋宅跡	カキヤヤシキ●樹木	御樹木ヤシキ	樹木		
福嶋宅		福嶋宅		福嶋宅	○福嶋宅	福嶋宅跡	●福嶋宅	■福嶋屋舗			
監物宅		監物宅	●監物屋舗 福島監物	監物宅	○監物屋敷	監物宅跡	●監物ヤシキ	■監物屋敷			●2
大道寺宅		大道寺宅	●大道寺	大道寺	大道寺宅	○大道寺	大道寺宅跡	●大道寺ヤシキ	■大道寺屋敷	宇大道寺	●2
左門宅		左門宅	●左門屋舗	左門	左門宅	○左門屋敷	左門宅跡	●左門ヤシキ	左門ヤシキ		●2
野村屋敷			●野村屋舗	野村	野村屋敷		野村屋敷	●野村ヤシキ	■野村屋敷		●2
蔵屋敷			●御蔵屋舗	蔵屋敷	蔵屋敷	○蔵やしき		●蔵ヤシキ	▲蔵屋敷		
牢屋敷			●牢屋舗	牢屋敷	牢屋敷			●牢屋シキ	牢屋敷		●2
中村對馬守宅				中村對馬守宅	○つしま殿	對馬殿		●ツシマ殿 中村ツシマノ宅			●2
奥野屋敷				奥野屋敷	○奥ノ屋敷			●奥ノヤシキ	■奥野屋敷		●2
浜島屋敷				濱嶋屋敷	○濱島	濱嶋屋敷		●濱島ヤシキ			●2
三八屋敷				三八屋敷	○三八屋敷	三八屋敷		●三八ヤシキ	■三八屋敷		●2
浅井屋敷					○アザ井屋シキ	浅井屋敷		●アサイヤシキ 樹木	■浅井屋敷		●2
鷹匠屋敷				鷹匠屋敷	○鷹匠屋敷			●鷹匠ヤシキ	▲鷹匠ヤシキ		●2
寺屋敷				寺屋敷	○寺屋しき				寺ヤシキ		
遠山伝十郎宅				遠山傳十郎宅				遠山傳十郎宅			●2
清凉寺屋敷				清凉寺屋敷							
浅野屋敷跡							浅野屋敷跡				

表5 清須城下町関連施設等名称一覧(2)

	古城絵図	張州府志	張州府志図	徇行記	清洲志	清洲壕地図	尾張志	清洲図	清洲村絵図 面	清洲村絵図	清洲町史
浅野屋敷跡							浅野屋敷跡				
一無ヤシキ									■一無ヤシキ		
御餌差ヤシキ									▲御餌差ヤシキ		●2
朝日様御屋敷跡									■朝日様御屋敷跡		
高屋敷									高屋敷		
伊織屋敷									■伊織屋敷	宇いおり	
ナヘヤヤシキ										ナヘヤヤシキ	
稲留一夢屋敷址											●2
兼松又兵衛屋敷址											●2
釜師忠三郎宅址											●2
文右衛門屋敷址											●2
主膳屋敷址											●2
沢井屋敷址											●2
民部屋敷址											●2
幸右屋敷址											●2
森田弥右衛門屋敷址											●2
玄界					玄界	○げんかい		●ゲンカイ	玄界	宇玄界	●1
清右衛門ノウラ								清右衛門ノウラ	清右裏		
猿屋跡								サルヤアト	猿屋跡		●2サルヤシキ
高札(清涼寺)			高札			御札ノ辻		札辻	御触札場	御高札	
高札(丸の内)			高札			御札ノ辻		札辻			
本陣			本陣								
大門			字大門								
富士見山			富士見山								
大福島		●福島			大福島	○大福島		●大福島	大福島	福島	
松原(古城付近)						松原		松原			
松原(本町付近)						松原		(絵のみ)			
御沙園					御沙園	○御舎園		●御沙園	▲御茶園		
御茶園									▲御茶園		
墓所松					墓所松			●ハカド松			
御船渡					御船渡						
金クソ					金くそ山	カナクソ山		金クソ	金山		
サガリ松アト								サガリ松アト			
金くそ山					金くそ山	金くそ山		金クソ山	金クソ山	カナクソヤマ	
部分の松					部分の松			部分ノ松	部分ノ松		
一里石					一里石				一里石		
河原					河原				河原		
福島杖						○福しまの杖	福島杖	福島杖	福島杖		
三味(福島杖付近)						□三味		●三味			
古川ノアト(練屋)						○古川通り		古川ノアト		古川新田	
ドブ池(伝馬町)						●ドブ池		●ドブ池	ドブ池		
ドブ池(東勝寺)									ドブ池		
ヤクテノアト								●ヤクテノアト			
一名ヲコリ橋								一名ヲコリ橋	ヲコリバン		
ガイロ田								●ガイロ田			
松ノ井ド								松ノ井ド			
鳥居崎									鳥居崎		
池ノ跡(朝日)									池ノ跡		
検見塚					検見塚				ケンミ塚		
馬場裏									馬場裏		
茶古山									茶古山		
大池									大池	池	
ハス池									ハス池		
砂河原						○スナ河原			砂河原		
河原						○河原		●河原			
小牧街道			小牧海道			小牧岩倉へ至る		小牧岩倉道	小牧街道	小牧海道	
八神街道						八神街道		八神街道	八神海道	八神海道	
此先八神街道出						此先八神街道		此先八神街道	此先八神街道へ出		
寺町通						○寺町通り		●寺町通	寺町通り		●1

表6 清須城下町関連寺社名一覧

	古城 絵図	張州 府志	張州 府志 図	清洲 志	清洲 壤地 図	尾張 志	清洲 図	清洲 村絵 図 面	村 絵 図	清洲 町史		古城 絵図	張州 府志	張州 府志 図	清洲 志	清洲 壤地 図	尾張 志	清洲 図	清洲 村絵 図 面	村 絵 図	清洲 町史										
御園神明	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●1	正覚寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
上皇神明社	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●1	浄休寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
山王社	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●1	久證寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
愛宕	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	明泉寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
天神(川上)			●	●	●	●	●	●	●	●	本成寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
庚申堂			●	●	●	●	●	●	●	●	光遠寺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
白山				●	●	●	●	●	●	●	大吉寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
天道社(北市場)				●	●	●	●	●	●	●	大光院跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
浅間社(北市場)				●	●	●	●	●	●	●	西蓮寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
天神(土田)				●	●	●	●	●	●	●	長久寺跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
天王(土田)				●	●	●	●	●	●	●	聖徳寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
水天社(小塚)				●	●	●	●	●	●	●	永安寺跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
稲荷(上条)				●	●	●	●	●	●	●	養林寺跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
秋葉(清涼寺)				●	●	●	●	●	●	●	三十三間堂		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
弁財天(朝日)				●	●	●	●	●	●	●	弥陀の跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
天王(朝日)				●	●	●	●	●	●	●	梅屋寺、常德寺、照蓮寺、泰増寺、 法応寺、浄念寺、宝泉寺、大光寺、 久宝寺、宝泉院、功德院、松寿院、 東蓮寺、天寧寺、安用寺、来迎寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
弁天				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
天王(田中町)				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
天王(久證寺北)				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
天王(久證寺南)				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
山神(本町)				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
天王(鍋屋)				●	●	●	●	●	●	●	興善寺、薬師寺、高岳院、法善寺、 願証寺、含笑寺、貞松院、高嶺寺、 龍雲寺、金仙寺、建昌寺、本要寺、 正福寺、安齋院、安齋院、長栄寺、 広徳寺、光明寺、千葉寺、持福院、 万福院、源受院、福泉寺、延命院、 就梅院、慈眼院、聖福寺、長全寺、 宋古寺、松徳院、曹流寺、全泉寺、 光真寺、大住寺、照遠寺、本正寺、 賢隆寺、光円寺、教順寺、清水寺、 東光寺、伝光寺、極楽寺、誓願寺、 瑞宝寺、宝蔵寺、尋盛寺、寿経寺、 阿弥陀寺、広小路神明		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
水天(鍋屋)				●	●	●	●	●	●	●	光専寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
山神(寺野)				●	●	●	●	●	●	●	真福寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									
天王(順礼橋)				●	●	●	●	●	●	●	東勝寺、正願寺、八幡(正願寺)、 宝幢院、八幡(宝幢院横)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
庚申堂(外町)				●	●	●	●	●	●	●	真教寺(信教寺)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
天王(上条)				●	●	●	●	●	●	●	蓮忍寺、自閑堂、阿弥陀堂		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
神明(朝日)				●	●	●	●	●	●	●	清涼寺ノアト		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
神明(材木町)				●	●	●	●	●	●	●	庚申塚ノアト		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
神明(外町)				●	●	●	●	●	●	●	虚空蔵堂		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
天道(養林寺付近)				●	●	●	●	●	●	●	浄念寺跡		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
天王(養林寺付近)				●	●	●	●	●	●	●	大智院		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
薬師(養林寺付近)				●	●	●	●	●	●	●	善光寺如来		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
浅間(養林寺付近)				●	●	●	●	●	●	●	真行院		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
総見院		●	●	●	●	●	●	●	●	●2	六地藏		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
長光寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	修験養光院		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
清涼寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●2	修験吉祥院、正林寺、パンシウジ、 津島所		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									
亀翁寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	正光院、玄海寺、西光院、長福院、 久遠寺、大乘院、政秀寺、浄久寺		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●2									

記述のあるものに●を記入した

# 小牧城下町上御園遺跡の 鍛冶工房の系譜

—<sup>ふいご</sup>鞆の羽口から—

● 蔭山誠一

東海地域における古墳時代から近代にかけての遺跡出土の鞆の羽口について素材と形態（羽口送風孔の孔径）から分類し、地域性の抽出と変遷を辿った。また鞆の羽口と一緒に出土する金属製品生産関連遺物の組み合わせと出土した碗型滓など鉄滓の金属学的分析から、小牧城下町上御園遺跡出土の鍛冶工房が美濃地域からの影響を受けたものであることを指摘した。

## 1. はじめに（研究史）

本稿は、戦国時代における愛知県清須市清洲城下町遺跡御園地区清須市 2012-2C 区と同小牧市上御園遺跡において出土した鉄生産関連資料の石製フイゴ羽口の使用状況と、その系譜を東海地方の遺跡から出土した鞆の羽口を素材と形態から検討するものである。

愛知県における鉄生産関連資料の分析は、『清洲城下町遺跡V』における清洲城下町遺跡出土の金属生産関連資料の分析（鈴木編 1995）が始まりで、鉄製品生産関連資料、銅や鉛製品生産関連資料の抽出と分類を行い、金属学的分析と併せた分析を行った。その結果清洲城下町遺跡の本町地区において精錬鍛冶を含めた鍛錬鍛冶による鉄製品生産や銅製品・鉛製品生産が行われたことを示された。その後筆者らは、愛知県における金属製品生産関連資料の分析により、鉄製品生産における精錬鍛冶工程と鍛錬鍛冶工程の分類や非鉄製品生産の銅細工などについて検討してきた（鈴木・蔭山 1997、鈴木・蔭山 2000、鈴木・蔭山 2004、鈴木・堀木・蔭山 2019、蔭山・杵名・堀木・鈴木 2020 など）。また近年は清洲城下町から名古屋城下町への移転を通じて見られる金属関連資料の出土傾向と江戸時代名古屋城下の職人の由緒書にみられる工人の移動について分析した（武部・蔭山 2021）。

今回は、東海地方の鞆の羽口について集成し、土製鞆の羽口と石製鞆の羽口の形態分析と金属製品生産関連資料との組み合わせ、鉄滓・坩堝・炉壁・鉄製品などの金属学的分析の検討から各タイプの鞆の羽口の機能について検討する。また各タイプの鞆の羽口の分布とその変遷を検討することにより、清須市清洲城下町遺跡御園地区清須市 2012-2C 区と同小牧市上御園遺跡において出土した石

製鞆羽口の系譜について明らかにしたい。

## 2. 鞆の羽口の地域性と機能

遺跡から出土した金属製品生産に関連する鞆の羽口は、鞆から送られてくる空気を炉内に入れるための装置である。鞆からの空気を送る送風管は金属のものが存在した可能性もあるが、これまでの発掘調査成果では木材などの有機物のものがほとんどであったと考えられ、羽口は炉体（壁）から炉内部分の送風管の先端部分に装着されるものである。遺跡からの出土資料では、未使用と考えられる完形品もあるが、大半の資料は破損した破片で出土している。

### （1）鞆の羽口の分類

本分析ではこのような出土例から、まず素材により粘土製のものと石製のもの、転用品のものに分類する。次に比較的残存状態が良い、あるいは一部分の破片から復元推定が可能な羽口の内側の送風孔（穴）の孔径と外側の横断面径（外径）を計測し、送風量を調節することが意図される送風孔の孔径により6類に細分する。今回は全体の復元が困難な羽口の長さや横断面形の形態（隅丸長方形、円形、楕円形、面取りのある多角形がある）による分類は行わず、特に遺跡から出土した廃棄された羽口の先端部（側）が残存すると分かる出土資料により細分を行う。

#### ○素材による分類

- ・石製羽口：石製の鞆の羽口で、今回分析した資料には横断面形が円形のものがある。
- ・土製羽口：粘土製の鞆の羽口で、今回分析した資料には、横断面形は円形のものほとんどで、楕円形に近いものと少し面取りのある多角形になるものが少数みられる。
- ・転用羽口：粘土製ではあるが、土師器の高杯脚部と須恵器の壺頸部を用いたものがある。

表1 東海地域における甌の羽口一覧(愛知県1)

遺跡番号	市町村	遺跡名	時代	土製羽口				石製羽口				報告書
				小	中	大	特不	小	中	大	特不	
1	愛西市	八竜遺跡	中世				1					須藤 梢他2016『八竜遺跡』『愛西市文化財調査報告書第2集』愛西市
2	愛西市	川田遺跡	5C末~8C初				1					木川正夫編2002『川田遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
3	愛西市	日置本郷B遺跡	江戸後				1					藤山誠一編2012『日置本郷B遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第177集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
4	あま市	大洲遺跡	奈良				1					宮藤 剛編1991『大洲遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
5	あま市	清林寺遺跡	古代				1					丹羽 博編1983『清林寺遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第1集』愛知県埋蔵文化財センター
6	安城市	神ノ木遺跡	9C後半				1					川崎みどり編2018『神ノ木遺跡』『安城市埋蔵文化財調査報告書第41集』安城市教育委員会
7	安城市	寒池遺跡	13C前~中				1					岡安雅彦編2000『安祥城址 寒池遺跡 郷裏遺跡』『安城市埋蔵文化財調査報告書第7集』安城市教育委員会
8	安城市	史跡本郷寺境内(第17次)	中世~近世				1					川崎みどり編1983『史跡本郷寺境内』『愛知県埋蔵文化財調査報告書第47集』安城市教育委員会
9	安城市	本郷寺境内地(第10・11・13次)	16C~19C			2	1	1	1			伊藤基之・西島 介編2014『本郷寺境内地II』『安城市埋蔵文化財調査報告書第33集』安城市教育委員会、梶野洋も伴出
10	安城市	天神遺跡	15C				1					植田美穂編2020『平成29年度市内遺跡調査報告 天神遺跡』『安城市埋蔵文化財調査報告書第45集』安城市教育委員会
11	安城市	彼岸田遺跡	11C末~12C前				1					岡安雅彦編2016『平成5年度~13年度市内遺跡調査報告』『安城市埋蔵文化財調査報告書第37集』安城市教育委員会
12	一宮市	大平遺跡	12C~14C				1					伊藤和彦1990『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会
13	一宮市	刈安岡遺跡	18C~19C				1					石黒立人編2001『刈安岡遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第93集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、他に椋型増埴2点出土
14	一宮市	門間沼遺跡	6C前代				1	1	2			石黒立人編1999『門間沼遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、他に土製羽口18点出土
15	一宮市	清郷遺跡	10C後~11C				1					「一宮市史」鈴木正典・藤山誠一・天野博の1997『愛知県における古代・中世の鉄器生産 その2』『考古学フォーラム9』考古学フォーラム
16	一宮市	伝法寺本郷遺跡	8C後				1		4			早野浩二・宮藤 剛編2006『鳥崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、109~111は羽口ではない可能性
17a	稲沢市	下津宿遺跡	中世						5			植上 昇編2013『下津宿遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、他に羽口27点出土
17b	稲沢市	下津城跡	中世				1					北條 誠示・岩野見司他1981『下津城跡発掘調査報告書(II)』『稲沢市文化財調査報告書XII』愛知県土木部・稲沢市教育委員会、他に羽口多数出土
17c	稲沢市	下津北山遺跡	14C中~15C末						1			早野浩二編2000『下津北山遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、椋型増埴1点96区西壁、他に羽口4点出土
18	稲沢市	尾張国跡	古代~中世				1		1			北條 誠示・白野幸治1982『尾張国跡発掘調査報告書(IV)』『稲沢市文化財調査報告書XV』稲沢市教育委員会
19	稲沢市	東畑寺跡	7C後~14C				1		1			北條 誠示編1990『東畑寺跡発掘調査報告書(II)』『稲沢市文化財調査報告書XXV』稲沢市教育委員会、他に羽口破片10数点出土
20	稲沢市	福田遺跡	5C前			2						北條 誠示・白野幸治1989『土田間遺跡発掘調査報告書』愛知県名古屋地区埋蔵文化財センター・土田間遺跡発掘調査委員会、真鍮分類IV類
21	稲沢市	船橋市場遺跡	8C~9C				1					田中俊樹他2014『船橋市場遺跡発掘調査報告書』稲沢市内遺跡発掘調査委員会
22	犬山市	丸の内遺跡	16C後									宮川芳照編1988『丸の内遺跡』『犬山市埋蔵文化財調査報告書第5集』愛知県犬山市教育委員会、羽口5点出土
23	岩倉市	御戸井廃寺	古代~中世			2						遠藤清孝編1983『御戸井廃寺・西出古墳』岩倉市教育委員会
24	岩倉市	御山寺遺跡	7C						1			石黒立人編2011『御山寺遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
25	岡崎市	岡崎城二の丸跡	中世				1		1			斎藤嘉彦他1982『岡崎城二の丸跡』岡崎市教育委員会
26	岡崎市	西牧野遺跡	中世									成瀬友弘編2013『西牧野遺跡(2010年度調査)』『愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集』愛知県埋蔵文化財調査センター
27	春日井市	天王山古墳	中世				1					清田博編2015『天王山古墳』春日井市教育委員会
28	北名古屋	中之郷北遺跡	5C前半・12C後~13C前				1	2				早野浩二・宮藤 剛編2006『鳥崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
29	北名古屋	弥勒寺御幸塚遺跡	平安後期~未	1								近藤 人・浦井かな子・原久仁他1998『弥勒寺御幸塚遺跡発掘調査報告書』西牧野御幸塚遺跡発掘調査委員会、土樋の可能性あり
30a	清須市	清洲城下町遺跡2012-2C区	16C末~17C前		2	1		2		1	1	辻 広志編2013『清洲城下町遺跡VI』『清須市埋蔵文化財調査報告書VI』清須市教育委員会、日鉄住金テクノロジー株式会社 大澤正巳・鈴木瑞穂鉄滓分析
30b	清須市	清洲城下町遺跡2012-1区	16C後		1							大塚正樹編2013『清洲城下町遺跡V』『清須市埋蔵文化財調査報告書V』清須市教育委員会、国際文化株式会社
30c	清須市	清洲城下町遺跡2013-2区	16C末~17C前			1						大橋 将二編2015『清洲城下町遺跡VII』『清須市埋蔵文化財調査報告書VII』清須市教育委員会・イデアコンサルタント株式会社・株式会社島田 穂、椋型増埴2点、羽口9点、錆型9点、鉄滓395点、粘土塊出土
30d	清須市	清洲城下町遺跡IV	16C末~17C前		4	2						鈴木正典編1994『清洲城下町遺跡IV』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、椋型増埴1点(873)出土
30e	清須市	清洲城下町遺跡IX	16C前以前						1			早野浩二編2005『清洲城下町遺跡IX』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
30f	清須市	清洲城下町遺跡VII	16C~17C前		1	2			4			鈴木正典編2002『清洲城下町遺跡VII』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
30g	清須市	清洲城下町遺跡XI	16C						3			鈴木正典他2013『清洲城下町遺跡XI』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、九州テクノロジー株式会社 大澤正巳・鈴木瑞穂鉄滓分析、錆遺跡は大口径のもの
30h	清須市	清洲城下町遺跡X	16C~17C前		1	1			1			藤山誠一・植上 昇編2021『清洲城下町遺跡X 朝日遺跡X』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第148集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、日鉄住金テクノロジー株式会社 鉄滓分析
30i	清須市	清洲城下町遺跡2011区	戦国か		1							苑 和也他2012『清洲城下町遺跡III』清須市教育委員会・イデアコンサルタント株式会社・株式会社島田 穂
31	小牧市	上御園遺跡	16C後			2	1	1	1	1	2	田中城久・水野聡・橋本博世2008『上御園遺跡3次発掘調査報告書』小牧市教育委員会、砂岩製羽口全部で256点、土製羽口全部で27点、椋型増埴50点、転用増埴15点、銅濁・銅滓28点、粘土塊27点、椋型増埴47点以上出土
32	新城市	石岸遺跡	古代以後							2		植上 昇編2015『石岸遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第195集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
33	新城市	加原遺跡	中世						1			永井邦仁編2015『加原遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
34	新城市	モリ下遺跡	古墳							3		植上 昇編2015『モリ下遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第196集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
35	新城市	北下遺跡	中世~戦国						1			渡辺 敬一編1997『北下遺跡発掘調査報告書』『新城市埋蔵文化財調査報告書X』新城市教育委員会
36	新城市	橋遺跡	古代				1					鈴木隆司編1996『橋遺跡発掘調査報告書』『新城市埋蔵文化財調査報告書XII』新城市教育委員会
37	新城市	勝負遺跡	室町						1			鈴木隆司編1994『勝負遺跡発掘調査報告書』『新城市埋蔵文化財調査報告書XIII』新城市教育委員会
38	瀬戸市	吉田奥遺跡	5C後						1			藤澤良祐・脇部 節・加藤大蔵・松藤和子・大藤 順子他1992『上之山-愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群・広手古窯跡群発掘調査報告書』瀬戸市教育委員会、大澤正巳鉄滓分析
39	瀬戸市	惣作 鐘場遺跡	古墳後・戦国			1	1					植上 昇編2008『惣作 鐘場遺跡II』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第150集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
40	知多郡美浜町	権六遺跡	古墳中									藤山誠一編2017『権六遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第207集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、土師器高杯脚部を転用、使用痕なし
41	知多市	法海寺遺跡	5C中			1	1	1				渡邊 誠編1993『法海寺遺跡II』『知多市文化財資料第31集』知多市教育委員会、長さ8.6cm、真鍮分類II類
42	知立市	鍛冶荒井遺跡	7C・13C前						2			近藤 義規編2017『鍛冶荒井遺跡』知立市教育委員会
43	東海市	堂ノ上貝塚	中世~近世				5					東海市教育委員会1972『堂ノ上貝塚発掘調査報告書』新日本製鐵K.K名古屋製鐵所鉄滓・羽口分析
44	豊明市	薬師ヶ根遺跡	中世以後							1		永井邦仁編2015『薬師ヶ根遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第197集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、日鉄住金テクノロジー株式会社 大澤正巳・鈴木瑞穂鉄滓分析
45	豊川市	国分寺北遺跡	-						2			平松弘幸編2011『国分寺北遺跡』豊川市教育委員会
46	豊川市	羽根遺跡	16C後以後							2		成瀬友弘編2010『羽根遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第166集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
47	豊田市	今町遺跡	江戸後				2					小嶋 廣典編2002『今町遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第105集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
48a	豊田市	郷上遺跡	中世~近世			1	2					植上 昇編2002『郷上遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、川崎テクノロジー株式会社 同原正明・伊藤俊治鉄滓分析
48b	豊田市	郷上遺跡	古代~中世							1		長田友也編2018『京町遺跡(京町遺跡古墳・郷上遺跡(豊田市1次・3次調査))』『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第74集』豊田市教育委員会
49	豊田市	孫石遺跡	10C中							1		尾崎 靖典他2000『豊田・岡崎地区研究施設用地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』『愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集』愛知県埋蔵文化財調査センター、日鉄テクノロジー株式会社 鈴木瑞穂鉄滓分析、白面遺跡で羽口1点出土
50	豊田市	水入遺跡	7C・戦国~江戸前				1					永井邦仁・川井啓介編2005『水入遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、他に羽口16点出土
51	豊田市	梅坪遺跡	江戸後				1			1		杉浦裕幸編1998『梅坪遺跡V』『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』豊田市教育委員会
52	豊田市	勸学院文庫寺跡	江戸			2	2	1				橋本博世編2017『勸学院文庫寺跡』『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第72集』豊田市教育委員会、羽口18点出土
53	豊田市	新金山遺跡	奈良							4		天野博之2001『新金山遺跡』『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集』豊田市教育委員会、須藤 義徳部転用羽口、炉壁の可能性あり

表2 東海地域における鞆の羽口一覧(愛知県・岐阜県・三重県)

遺跡番号	市町村	遺跡名	時代	土製羽口			石製羽口			報告書
				小	中	大	小	中	大	
54a	豊田市	寺部遺跡12C区	中・近世以後			1				豊坂有吉編2014『寺部遺跡Ⅳ』、『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第61集』、豊田市教育委員会、羽口7点出土、鉄滓も多数出土
54b	豊田市	寺部遺跡14A区	19C			3				高木佑介編2016『寺部遺跡Ⅴ』、『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第68集』、豊田市教育委員会
54c	豊田市	寺部遺跡15E区	19C中			2				藤田裕史編2017『寺部遺跡Ⅵ』、『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第73集』、豊田市教育委員会
54d	豊田市	寺部遺跡18K区	江戸以後	1	2					安孫子雅史編2020『寺部遺跡Ⅷ』、『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集』、豊田市教育委員会
55	豊田市	宮口元屋敷遺跡	江戸以後		1	3				長田友也編2017『鹿見城跡・宮口元屋敷遺跡・鹿見城跡・鹿見城跡・竹元町1号屋敷』、『豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第71集』、豊田市教育委員会
56	豊橋市	大西貝塚	戦国以後			1				若原 剛編2000『大西遺跡(Ⅱ)』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第54集』、豊橋市教育委員会
57	豊橋市	公文遺跡・牟呂城址	奈良・18C末～19C初	1		1				小林久彦編1997『公文遺跡(Ⅲ)・牟呂城址』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第33集』、豊橋市教育委員会、牟呂地区遺跡調査会
58	豊橋市	作神遺跡	17C後		1					小林久彦編1997『中村遺跡・作神遺跡』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第41集』、豊橋市教育委員会、牟呂地区遺跡調査会
59a	豊橋市	吉田城址第33次	16C末～19C		1	3	1			小林久彦編2012『吉田城址第33次発掘調査』、『市内埋蔵文化財発掘調査平成17～20年度』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第123集』、豊橋市教育委員会、吉田城址に隣接する資料
59b	豊橋市	吉田城址第20次	16C前			1				小林久彦編2006『吉田城址(Ⅵ)』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第85集』、豊橋市教育委員会、堀型増1点出土、銅網・銅遺物資料
59c	豊橋市	吉田城址第43-46次	江戸・近代	2	1					若原 剛編2017『吉田城址(XV)』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第145集』、豊橋市教育委員会
59d	豊橋市	吉田城址令和元年	古代			1				石原 唯編2020『吉田城址(XVⅡ)』、『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第154集』、豊橋市教育委員会、松屋地所株式会社
60	長久手市	岩作城跡	古代～16C初			2				武部興編2004『岩作城跡 能見城跡』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第89集』、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、川崎テックノリサーチ株式会社同僚正明、小川太一、伊藤俊治鉄滓分析
61a	名古屋熱田区	高蔵遺跡第12次	13C～15C							田原和典編1997『高蔵遺跡第12次～15次』、『埋蔵文化財調査報告書26』、『名古屋市文化財調査報告書34』、名古屋市教育委員会
61b	名古屋熱田区	高蔵遺跡第46次	13C初～中		2	3				深谷淳2005『高蔵遺跡(第46次)』、『埋蔵文化財調査報告書51』、『名古屋市文化財調査報告書65』、名古屋市教育委員会、JFEテクノリサーチ株式会社鉄滓分析
62	名古屋熱田区	旗屋遺跡	中世			1				中村信幸・千田明・瀧川善一編2008『旗屋遺跡』、清水総合開発株式会社・山崎土木株式会社
63	名古屋北区	志賀公園遺跡	中世			1				永井宏幸編2001『志賀公園遺跡』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集』、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、他に羽口3点出土
64	名古屋中区	古渡城遺跡	18C～19C初							伊藤秋男編1993『古渡城遺跡発掘調査報告書』、『南山大学大学院先史考古学研究所報告第1冊』、南山大学古渡城発掘調査会
65	名古屋中区	尾張元興寺跡	江戸以後			1				村木 誠2005『尾張元興寺跡第11次発掘調査報告書』、名古屋市教育委員会
66	名古屋中区	金山北遺跡	7C後～8C前		1					大野誠編2004『金山北遺跡第一次発掘調査報告書』、名古屋市住宅都市部、財団法人名古屋市整備公社
67a	名古屋中区	名古屋城三の丸遺跡Ⅱ	15C～16C中			1				梅本博志編1990『名古屋城三の丸遺跡(Ⅱ)』、『愛知県埋蔵文化財センター第16集』、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
67b	名古屋中区	名古屋城三の丸遺跡Ⅶ	戦国～江戸			1				武部興編2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集』、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
67c	名古屋中区	名古屋城三の丸遺跡Ⅳ	江戸			1				遠藤才文編1993『名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集』、財団法人愛知県埋蔵文化財センター、増嶋・堀解野上、鉄滓・銅滓
68a	名古屋中区	正木町遺跡第17次	8C中～後			1				藤井康隆2005『正木町遺跡(第17次)』、『埋蔵文化財調査報告書51』、『名古屋市文化財調査報告書65』、名古屋市教育委員会
68b	名古屋中区	正木町遺跡立会	17C後							深谷淳2007『正木町遺跡(立会調査)』、『埋蔵文化財調査報告書55』、『名古屋市文化財調査報告書70』、名古屋市教育委員会
69	名古屋中区	三蔵遺跡	江戸		1	1				田浦一光編2017『三蔵遺跡第17次発掘調査報告書』、株式会社イビコン
70	名古屋西区	幡下小学校遺跡	江戸			2				水野裕之編1996『幡下小学校遺跡-第4次発掘調査の概要-』、名古屋市教育委員会
71	名古屋緑区	城遺跡	中世			1				高木祐史編2018『城遺跡発掘調査報告書』、山崎土木株式会社
72	名古屋南区	桜台高校遺跡	15C後～16C中							藤井康隆編2001『桜台高校遺跡(第3次)』、『埋蔵文化財調査報告書39』、『名古屋市文化財調査報告書52』、名古屋市教育委員会、鉄滓数点とともに堀型増2点も出土
73	名古屋守山区	天白元屋敷遺跡	15C後～16C後			1				豊坂有吉編2016『天白元屋敷遺跡』、『名古屋市中志段味特定土地区画整理組合・株式会社二友組』
74	名古屋守山区	茶臼山古墳	古墳以後			1				野澤剛幸他1990『茶臼山古墳発掘調査報告書』、名古屋市教育委員会
75	名古屋中川区	戸田遺跡	中世			3				伊藤雅夫・熊谷洋一・高梨雅幸2005『第4次戸田遺跡発掘調査報告書』、名古屋市上下水道局
76	日進市	三ヶ所遺跡	古代			1				永井宏幸編2008『三ヶ所遺跡 西面遺跡』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第140集』、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、家業関連のものか
77	日進市	金鉄遺跡	奈良～平安			1				池本正明編2004『金鉄遺跡』、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第119集』、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、他に羽口1点出土
78	丹羽郡大口町	堀尾氏邸宅跡	18C後～19C中							片山博道他編2010『堀尾氏邸宅跡』、『愛知県教育委員会・財団法人愛知県・教育スポーツ振興財団阿知地埋蔵文化財センター・国際文化財株式会社、他に石製羽口8点出土、堀型増352点出土
79	恵那市	正家跡寺跡	古代			1				三宅美編2000『正家跡寺跡Ⅱ・寺平遺跡』、『恵那市文化財調査報告書第38集』、岐阜県恵那市教育委員会
80	各務原市	織沼古市場遺跡	15C後～16C			1				伊藤 昭編1995『織沼古市場遺跡A地区発掘調査報告書』、『各務原市文化財調査報告書第16号』、各務原市埋蔵文化財調査センター
81	岐阜市	芥見町屋敷遺跡	14C中～15C中							三輪賢三編2012『芥見町屋敷遺跡』、『岐阜県文化財保護センター調査報告書第124集』、岐阜県文化財保護センター、株式会社パレオ・ラボ鉄滓分析
82a	岐阜市	岐阜城千畳敷遺跡	16C後			2				原田裕之編2015『岐阜城跡3』、『岐阜市教育委員会・(公財)岐阜市教育文化振興事業団』
82b	岐阜市	千畳敷遺跡	15C			1				原田裕之編2000『千畳敷Ⅲ』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第5集』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団・筑館堀解野上屋に付着したもので、土製特大型羽口と思われる』
83a	岐阜市	鷺山仙道遺跡A2地区	15C後～未							高木 晃2002『鷺山仙道遺跡』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第1集』、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、(財)岐阜市教育文化振興事業団、多数の堀型増出土、銅網調査資料
83b	岐阜市	鷺山仙道遺跡G区	15C後～16C前			1		5		梅村大輔・高木 晃・柴田唯正編2012『鷺山仙道遺跡』、『(公財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集』、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団
83c	岐阜市	鷺山仙道遺跡A2・3地区	15C後～16C前					1		朝田公年・大塚朝幸編2007『鷺山・鷺山仙道遺跡』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第15集』、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、(財)岐阜市教育文化振興事業団、厚手の羽口
84	岐阜市	鷺山市場遺跡	10C後～11C前							梅村大輔・高木 晃・柴田唯正編2012『鷺山遺跡群4分冊鷺山市場遺跡』、『(公財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集』、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団
85	岐阜市	鷺山跡遺跡	15C			1				朝田公年・熊田明美編2007『鷺山跡・鷺山仙道遺跡』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第15集』、岐阜市鷺山二土地区画整理組合、(財)岐阜市教育文化振興事業団
86	岐阜市	正明寺城之前遺跡	8C後～9C前	3	1					高木 晃・柴田唯正・梅村大輔編2012『鷺山遺跡群2分冊正明寺城之前遺跡』、『(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集』、岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合、財団法人岐阜市教育文化振興事業団
87	岐阜市	城之内遺跡	近世以前			1				内堀信雄編1999『城之内遺跡』、『岐阜市文化財報告1999-2』、岐阜市教育委員会
88a	関市	重竹遺跡	室町～戦国					3		藤原英成他1984『重竹遺跡-その3-』、『関市文化財調査報告書第8号』、関市教育委員会
88b	関市	重竹遺跡	中世					1	2	長谷川幸志・伊藤利己他編2005『重竹遺跡・上西田遺跡』、『岐阜県教育文化財保護センター調査報告書第91集』、財団法人岐阜県教育文化財保護センター、羽口94点、内砂岩製41点、粘土製53点、粘土製は残存が良くない
89	関市	吉町遺跡	室町後期						1	伊藤 聡・林 伸明2021『関市内発掘調査報告書平成30年度』、『関市文化財調査報告書47号』、関市
90a	関市	弥勒寺東遺跡Ⅱ	7C	4	1	1				田中弘志編2014『弥勒寺東遺跡Ⅱ』、『関市文化財調査報告書第31号』、関市教育委員会、全体で土製羽口18点出土
90b	関市	弥勒寺東遺跡Ⅲ	7C			1				田中弘志編2015『弥勒寺東遺跡Ⅲ』、『関市文化財調査報告書第34号』、関市教育委員会
91a	高山市	野内遺跡B地区	9C前～中							小野木学編2009『野内遺跡B地区』、『岐阜県教育文化財保護センター調査報告書第111集』、財団法人岐阜県教育文化財保護センター、株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展鉄滓分析、羽口は全部で55点出土
91b	高山市	野内遺跡C地区	中世以後			2				小淵中弘編2012『野内遺跡C地区』、『岐阜県教育文化財保護センター調査報告書第122集』、岐阜県文化財保護センター、株式会社パレオ・ラボ鉄滓分析、羽口は全体で9点出土、B地区からの流れ込みか
92	土岐市	妻木城土屋敷跡	中世・戦国			1				中島茂編2002『妻木城土屋敷跡』、『土屋敷発掘調査報告書』、『岐阜県土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター』
93	不破郡垂井町	堅田遺跡	古代以後							佐竹正憲編2020『堅田遺跡・美濃国分寺東遺跡』、『岐阜県文化財保護センター調査報告書第146集』、岐阜県文化財保護センター、株式会社パレオ・ラボ鉄滓成分分析
94	美濃市	段遺跡	14C初～中			1				清山 健編2000『段遺跡C地区』、『美濃市文化財調査報告書第16号』、美濃市教育委員会
95a	本巣市	上保本郷遺跡6地点	11C前～後			8				井出大介・佐藤恵太・澤村健一郎2021『上保本郷遺跡』、『岐阜県文化財保護センター調査報告書第151集』、岐阜県文化財保護センター、株式会社パレオ・ラボ鉄滓・鉛・銅滓分析、SK670出土銅滓、包含層出土銅滓、SK705出土土器付着物(銅・金・銀・鉛など検出)、SK668から清銅形を使った溶解剤(鉄と銅)出土
95b	本巣市	上保本郷遺跡4地点他	12C後～15C後	2	1	2	1	2	1	井出大介・佐藤恵太・澤村健一郎2021『上保本郷遺跡』、『岐阜県文化財保護センター調査報告書第151集』、岐阜県文化財保護センター
96	伊賀市	荒木氏館跡	戦国	4	2					豊田博三2007『荒木・西明寺内遺跡群発掘調査報告』、『三重県埋蔵文化財調査報告283』、三重県埋蔵文化財センター、堀型増1点(85)出土
97	伊賀市	上野城下町遺跡	江戸			1				新名 強2006『上野城下町遺跡発掘調査報告-東ノ野跡(第1～4次)-』、『三重県埋蔵文化財調査報告273』、三重県埋蔵文化財センター
98	伊賀市	火山遺跡	16C後		5	1				船越重伸他1996『火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡』、『三重県埋蔵文化財調査報告133-8』、三重県埋蔵文化財センター、堀解野上屋敷跡、堀解野(堀解)片、三叉状土製品、『みなわ』土製品出土、羽口は25点出土、銅遺物調査資料
99	伊賀市	北門遺跡	平安前～中			2				福田典明編2004『北門遺跡(1次)発掘調査報告』、『上野市文化財調査報告31』、上野市教育委員会
100	伊賀市	下郡遺跡	中世後～近世初			1				森田 守1986『下郡遺跡発掘調査報告-第7次調査-』、『三重県埋蔵文化財調査報告73』、三重県教育委員会
101	伊賀市	城之越遺跡	奈良後半			1				櫻橋裕昌編1992『城之越遺跡』、『三重県埋蔵文化財調査報告99-3』、三重県埋蔵文化財センター
102	伊賀市	有井遺跡	奈良～平安			1	2			豊田博三2007『荒木・西明寺内遺跡群発掘調査報告』、『三重県埋蔵文化財調査報告283』、三重県埋蔵文化財センター
103	員弁郡東員町	新野遺跡	15C～16C			1				小玉 明、下村登良男・山沢義典・谷本毅次1972『新野遺跡発掘調査報告-C地区-』、『三重県埋蔵文化財調査報告9』、三重県教育委員会、鉄滓2個出土

表3 東海地域における鞆の羽口一覧（三重県2）

遺跡番号	市町村	遺跡名	時代	土製羽口			石製羽口			報告書
				小	中	大	小	中	大	
104	員弁郡東員町	西山遺跡	7C初～8C初			1				小玉達明1970『西山・新野遺跡発掘調査報告』東員町教育委員会、鞆羽口数値、鉄滓多数
105	いなべ市	中垣ノ遺跡	鎌倉前			2				田中久生他1989『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告-第1分冊』、「三重県埋蔵文化財調査報告88-1」、三重県教育委員会
106	亀山市	亀山城跡東三之丸跡	室町後～江戸			2	1			亀山 隆1999『伊勢亀山城跡発掘調査報告Ⅲ』、「亀山市文化財調査報告20」、亀山市教育委員会、粘土塊の出土があり、鋳造の可能性、模型跡なし
107	桑名市	志知南浦遺跡	8C後～江戸	1						竹田憲治・酒井巳紀子編2008『志知南浦遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告288」、三重県埋蔵文化財センター
108	鈴鹿市	国分東遺跡	鎌倉		1					飯部芳人・萩原義彦・松見直茂編2005『国分東遺跡（第1・3次）・沖ノ坂遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告255」、三重県埋蔵文化財センター
109	鈴鹿市	末野A遺跡	飛鳥			2				中森成行2016『末野A・B・C遺跡』、『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅲ』鈴鹿市遺跡調査会
110	鈴鹿市	大門遺跡	5C後	1						中森成行2016『大門遺跡』、『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅳ』鈴鹿市遺跡調査会
111	鈴鹿市	八野遺跡	奈良			1				吉田隆史編2018『八野遺跡（第1次）』鈴鹿市
112	鈴鹿市	盤城山遺跡	5C			1				田部剛士編2014『盤城山遺跡（第4次・5次）発掘調査報告書』鈴鹿市考古博物館
113	鈴鹿市	高井A遺跡	11C後～12C前	1						高井昭仁1998『高井A遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告115-8」、三重県埋蔵文化財センター
114a	多気郡明和町	斎王宮跡Cトレンチ	古代～鎌倉			1				谷本欽次1974『斎王宮跡発掘調査報告1』、「三重県埋蔵文化財調査報告21」、三重県教育委員会
114b	多気郡明和町	斎宮跡第111次	平安			1				吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩 操1996『史跡斎宮跡 平成7年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館
114c	多気郡明和町	斎宮跡第133次	平安			1				駒田利治・泉 雄二・伊藤裕信・水橋公憲2003『史跡斎宮跡平成13年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館
114d	多気郡明和町	斎宮跡第171次	平安後			1				新名 強編2012『史跡斎宮跡平成22年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館
114e	多気郡明和町	斎宮跡第179-6次	平安～中世			1				伊藤文彦・中野敦夫編2015『史跡斎宮跡平成25年度現状変更緊急発掘調査報告』、「三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告31」、明和町
114f	多気郡明和町	斎宮跡第182-1-7次	古代～中世	1		1				宮原佑治・乾 哲也2016『史跡斎宮跡平成26年度現状変更緊急発掘調査報告』、「三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告32」、明和町
114g	多気郡明和町	斎宮跡第81-7次	飛鳥	1						川部浩司2018『史跡斎宮跡平成29年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館
114h	多気郡明和町	斎宮跡第20次	9C前			1				大川勝宏2019『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』斎宮歴史博物館
115	津市	六次A遺跡	古墳中以前	1		4				榎橋裕昌編2002『六次A遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告115-16」、三重県埋蔵文化財センター
116	津市	六次B遺跡	平安後				3			本堂弘之・山口 裕・村木 一弥・上村安生『六次B（B-1地区）発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告115-11」、三重県埋蔵文化財センター
117a	津市	多気北畠氏遺跡第30次	戦国			2				船橋 司・大川 操2009『多気北畠氏遺跡第30次調査報告』、「津市埋蔵文化財調査報告17」、津市教育委員会
117b	津市	多気北畠氏遺跡第31次	戦国			1				石淵誠人・川本耕三他2009『多気北畠氏遺跡第31次調査報告』、「津市埋蔵文化財調査報告19」、津市教育委員会、パリノ・サーヴェイ株式会社との共同発掘、鉄滓分析、財団法人元興寺文化財研究所の薬形製品分析
117c	津市	六田館跡	戦国			1				小林俊之編2005『北畠氏館跡・六田館跡2』、『美杉村文化財調査報告12』、「三重県美杉村教育委員会
118	多気郡多気町	花ノ木遺跡	平安末～鎌倉			1				田村剛一編1989『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊1-1』、「三重県埋蔵文化財調査報告87-1」、三重県教育委員会
119	津市	林垣戸遺跡	5C			3				奥田勝久・森川常厚2012『林垣戸遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告333」、三重県埋蔵文化財センター
120	津市	雲出島貴遺跡	12C後			1				伊藤裕信編2000『鳥坂Ⅱ』、「三重県埋蔵文化財調査報告212-1」、三重県埋蔵文化財センター
121	度会郡二見町	安養寺跡	12C後以後			1				大西素行・前川篤宏・竹田憲治編2004『安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山中世墓群・五峰山2号墳』、「二見町文化財調査報告2」、二見町教育委員会
122	度会郡玉城町	蚊山遺跡左部地区	12C末～13C前			1				前川篤宏編1993『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財調査報告-第6分冊』、「三重県埋蔵文化財調査報告101-6」、三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
123	度会郡玉城町	楠ノ木遺跡	中世		1	1				伊藤裕信編1991『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財調査報告-第2分冊』、「三重県埋蔵文化財調査報告101-3」、三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、パリノ・サーヴェイ株式会社鉄滓分析、鉄滓コンテナ12箱（90kg）出土
124	鳥羽市	白浜遺跡	7C前			1				坂本 勝・山本雅和・田辺昭三編1990『白浜遺跡発掘調査報告』本浦遺跡群調査委員会、堀い、他に1点羽口出土、鉄滓1点出土
125	鳥羽市	鳥羽城跡本丸跡	戦国			1				豊田祥三2017『鳥羽城跡本丸跡発掘調査報告-第6～8次発掘調査』、「鳥羽市埋蔵文化財調査報告8」、鳥羽市教育委員会
126	名張市	鴻之巣遺跡	奈良			1				水口昌也・田村三他1991『鴻之巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』名張市遺跡調査会
127	松阪市	上ノ庄北出遺跡	鎌倉			1				山本義治・杉本寿範編1998『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告177」、三重県埋蔵文化財センター
128	松阪市	大蓮寺遺跡	9C後～10C後			1				萩原義彦編2015『大蓮寺遺跡（第2次）発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告362」、三重県埋蔵文化財センター、日鉄住金テクノロジー株式会社大津正巳・鈴木雄雄 総合関連遺物分析
129	松阪市	西肥留遺跡	古墳前期後			2				川崎志乃編2008『西肥留遺跡発掘調査報告（第1・2・3・5次）』、「三重県埋蔵文化財調査報告293」、三重県埋蔵文化財センター、株式会社九州テクノリサーチ 大津正巳・鈴木雄雄鉄滓分析
130	松阪市	東沖遺跡	12C後～15C前			3				酒井巳紀子編2009『下茅原遺跡（第1次・第2次）・東沖遺跡発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告303」、三重県埋蔵文化財センター、株式会社九州テクノリサーチ 大津正巳・鈴木雄雄鉄滓分析
131	松阪市	平生遺跡	古代～中世			1				吉村利男1989『平生遺跡発掘調査報告』、『一志郡』の考古学―一志町・畑野町遺跡調査会
132	松阪市	舞出北遺跡	古代・13C前	1		2				原田忠利子編2010『舞出北遺跡発掘調査報告2』、「三重県埋蔵文化財調査報告115-24」、三重県埋蔵文化財センター、山中由紀子編2007『舞出北遺跡発掘調査報告1』、「三重県埋蔵文化財調査報告115-23」、三重県埋蔵文化財センター、株式会社九州テクノリサーチ鉄滓分析
133	松阪市	東野遺跡	室町			1				駒田利治編1989『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告1』、「三重県埋蔵文化財調査報告79」、三重県教育委員会
134	松阪市	宮ノ腰遺跡	中世			3				水谷 豊編1999『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』、「三重県埋蔵文化財調査報告178」、三重県埋蔵文化財センター
135a	四日市市	久留倍遺跡5	古代～中世後	3		4				清水政次編2013『久留倍遺跡5』、「四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書46」、四日市市教育委員会、JFEテクノリサーチ株式会社鉄滓分析
135b	四日市市	久留倍遺跡6	古代～中世			2				清水政次・山本達也編2013『久留倍遺跡6』、「四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書47」、四日市市教育委員会
136	四日市市	中山山遺跡	飛鳥	1						田中久生・藤山孝文編2016『中山山遺跡（第2・3・6・7次）発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告186-8」、三重県埋蔵文化財センター、日鉄住金テクノロジー株式会社鉄滓分析、カマドの支脚として出土しており未使用
137	四日市市	西ヶ谷遺跡	古墳後			5				五十榎孝子編2005『西ヶ谷遺跡』、「四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書34」、四日市市教育委員会、川鉄テクノリサーチ株式会社鉄滓分析
138	四日市市	間ノ辻遺跡	12C後			1				新名 強編2005『間ノ辻遺跡・辻子遺跡（第4次）発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告258」、三重県埋蔵文化財センター
139	四日市市・員弁郡東員町	筆ヶ崎西遺跡	飛鳥			2				竹田憲治編2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第4・5・7次）発掘調査報告』、「三重県埋蔵文化財調査報告186-9」、三重県埋蔵文化財センター、日鉄住金テクノロジー株式会社鉄滓分析
140	四日市市	上野遺跡	10C			1				春日井 花・花井幸一1991『上野遺跡』、「四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅳ」、四日市市遺跡調査会

○送風孔の孔径による分類

- 小型羽口：孔径 1.4cm 以下のもの
  - 中小型羽口：孔径 1.5cm ～ 1.9cm のもの
  - 中型羽口：孔径 2.0cm ～ 2.4cm のもの
  - 中大型羽口：孔径 2.5cm ～ 2.9cm のもの
  - 大型羽口：孔径 3.0cm ～ 3.4cm のもの
  - 特大型羽口：孔径 3.5cm 以上のもの
- (2) 鞆の羽口の地域性

前節の分類に基づき、東海地域の鞆の羽口を集成したものが表1～表3・図1である。この表にみられるように、東海地域における古代以後の大半が土製羽口であるが、平安時代末以後の岐阜県美濃地域の遺跡に石製羽口が展開する地域性がある。その他の地域では、中世以後も土製羽口が使

用され続ける。この岐阜県中濃地域を中心に分布する石製羽口は、戦国時代の愛知県小牧市上御園遺跡と同清須市清洲城下町遺跡、江戸時代後期の同丹羽郡大口町堀尾氏邸宅跡にも分布する。

次に土製羽口の分布域における地域性を示すものとして、江戸時代後期～近代の豊橋市吉田城址第43次A区、第33次調査区、公文遺跡・牟呂城址D-3地区においてみられる瓦質土製羽口がある。これらの遺跡に出土したその他の土製羽口も全体に羽口孔径の大きい中大型～特大型のものが多くみられ、江戸時代の吉田鍛冶に関連する資料と思われる。

全体では、出土資料が破片で出土するものがほとんどであることもあり、遺跡毎で特徴があるも

のはみられるが、小地域性を示す特徴はあまりみられない。

### (3) 鞆の羽口の形態と工程

次に羽口の形態とそれに伴う工程について述べる。表1に示した鞆の羽口は全体に被熱を受けているものがほとんどで、特に羽口先端部にはガラス質で黒色～暗灰色の流動鉄滓が付着しているものが多い。鍛冶に伴う椀型滓など鉄滓と鑄造用椀型坩堝(取瓶)・熔解炉・炉壁・鑄型・粘土塊・鑄造用土製道具の出土量などから6タイプの遺跡がある。

**Aタイプ**：鍛冶に伴う椀型滓・流動鉄滓・鍛造薄片・粒状滓・鉄塊系遺物、含鉄遺物などが出土する遺跡で、鞆の羽口が出土した多数の遺跡・地点にあたる。このタイプは、椀型滓などの鉄滓の出土から、鍛冶による鉄製品生産を行っていた遺跡・地点である。

**Bタイプ**：鑄銅用の多数の椀型坩堝あるいは、熔解炉・炉壁・鑄型、粘土塊などととも少量の椀型滓など鉄滓が出土した遺跡・地点で、岐阜市鷺山仙道遺跡(G区SK113)と岐阜市正明寺城之前遺跡(D2区SK62)、岐阜市千畳敷遺跡(B地点SX6)、清須市清洲城下町遺跡(99A区SD02・SK94など)がある。

Bタイプは、鑄銅製品を生産する遺跡・地点と考えられるもので、15世紀後半～16世紀前半の鷺山仙道遺跡や16世紀末～17世紀前葉の清洲城下町遺跡では鑄銅の小型製品を中心に生産されており、金・銀・銅・鉛・錫・亜鉛を用いた多様な金属加工・製品生産が行われていたことが推定されている(伊東2012)。鷺山仙道遺跡では出土した土製羽口の内6点が報告されており、924は羽口先端部が残る完形品で、長さ12.3cm、孔径1.8cm、先端部外径が4.8cm、基部外径が7.5cmを測る土製中小型羽口である。坩堝に伴うその他の土製羽口も基部が太く先端部が細くなる同様な形態をもつ。清洲城下町遺跡99A区において報告されている羽口5点も土製小型・中小型羽口である。15世紀の千畳敷遺跡では梵鐘熔解炉跡のB地点SX6が確認されており、その地点で出土した梵鐘熔解炉の炉壁に付着した状態で孔径8.2cmを測る土製羽口が残存していた。8世紀後半～9世紀前葉の正明寺城之前遺跡では、D2区SK62から出土した大型坩堝から鉄と銅が検出されており(伊藤2012)、鑄銅(鑄鉄もあるか)製品製作が想定される。SK62と同時期のSD35出土の土製羽口4点が報告されており、羽口先端部の孔径1.7cm～1.95cmの土製中小型羽口で、

先端部から基部へ細長く太くなる形態である。

**Cタイプ**：少点数の鑄銅用椀型坩堝・鑄型・粘土塊が一定量の椀型滓など鉄滓と伴い出土した遺跡・地点で、関市古町遺跡(B地点・K地点)、岐阜市芥見町屋遺跡(A地点SD2)、本巣市上保本郷遺跡(6地点SK668・SK705、11地点SD300・12地点SK3785)・豊橋市吉田城址(第20次B区SD05)、小牧市上御園遺跡(6-3道区・9-1道区)、名古屋市桜台高校遺跡(第3次調査区SD2)、清洲城下町遺跡(2012-2C区072SD・077SX)、津市北畠氏遺跡(第30次調査区・第31次調査区)、伊賀市荒木氏館跡(北地区SD2)などがある。

Cタイプは、鍛冶による鉄製品を生産する遺跡・地点と考えられるもので、小型の鑄銅製品を生産したものと推定される椀型坩堝が少数出土することから、生産する鉄製品に付随して銅部品が使われたと考えられるものである。そのような視点から生産された鉄製品は農工具類・建築用釘・鋸類ではなく、刀槍具・甲冑・建物の飾り金具などが想定される。Cタイプの遺跡・地点に伴う鞆の羽口には、15世紀～16世紀後半の関市古町遺跡B地点・K地点や16世紀後半の小牧市上御園遺跡6-3道地点・9-1道地点では、多数の石製羽口が主体で、少数の土製羽口が伴って出土している。詳細な報告がされている上御園遺跡では、報告された15点の羽口の内、石製中小型羽口1点、石製中型羽口1点、石製中大型羽口1点と土製中型羽口2点、土製中大型羽口1点があり、両素材の羽口に横断面形も円形・隅丸方形・隅丸長方形・隅丸六角形～八角形があり、同様な形態である。16世紀末～17世紀前葉の清洲城下町遺跡2012-2C区072SD・077SXにおいて出土した石製大型羽口1点他4点、土製中型羽口2点、土製中大型羽口2点があり、横断面形は円形～楕円形で素材による形態の違いは少ない。14世紀中葉～15世紀中葉の岐阜市芥見町屋遺跡A地点SD2では、石製羽口1点報告されている。11世紀前葉～後半の本巣市上保本郷遺跡6地点SK668出土の清郷型鍋転用熔解炉(金属定性分析で鉄と銅が検出された)には土製羽口が伴う。同地点SK705から出土した土器の付着物から銅・金・銀・ビスマス・錫・鉛・アンチモンが検出されており、同地点の銅滴や銅滓の出土と合わせて多様な製品の加工が行われたことが想定されている。また中世以後の同遺跡12地点SK3785出土の土製中大型羽口の先端部に緑錆があり、定性成分分析で銅と亜鉛が検出された。同遺跡11地点SD300出土椀

型坩堝から定性成分分析で銅・錫・鉛・亜鉛が検出され、青銅と亜鉛の合金である真鍮の利用が推定されていることと併せて興味深い。

その他の16世紀前葉の豊橋市吉田城址第20次B区SD05から出土した羽口は土製中小型羽口1点、15世紀後半～16世紀中頃の名古屋市桜台高校遺跡第3次調査区SD2では土製羽口1点、15世紀～16世紀後半の津市北畠氏遺跡第30次調査区・第31次調査区A層では土製羽口3点、15世紀～16世紀の伊賀市荒木氏館跡北地区SD2では土製中型羽口4点、土製中大型羽口12点、土製大型羽口2点が報告されている。

石製羽口と土製羽口が出土した上御園遺跡と清洲城下町遺跡(2012C区)では、羽口の素材の違いはあるが形態の違いは少なく、羽口先端部に付着した鉄滓の状況から多量に出土した椀型滓に伴う鍛冶用羽口と考えられる。また他の遺跡において報告されている石製羽口・土製羽口も同様に鍛冶用羽口と思われる。特に荒木氏館跡北地区SD2出土土製羽口は孔径が大きい中大型・大型羽口に主体があり、比較的大型の製品生産が実施されたか、盛んな鉄製品加工・生産の結果、羽口が基部側まで強く使用されたことが反映された状況を示すものと考えたい。

**Dタイプ**：鉄鑄造関連の熔解炉(坩堝)・炉壁・三叉状土製品・「みなわ」土製品が出土している遺跡・地点で、伊賀市火山遺跡(A地区SK7・SK9・SD10・SD12・包含層)がある。

Dタイプは、鑄造による鉄製品の生産が行われた遺跡・地点と考えられるもので、16世紀後半の伊賀市火山遺跡から出土した土製羽口25点の内、A地区SK7・SK9・SD10・SD12・包含層出土した土製羽口6点の報告があり、土製中大型羽口5点、土製大型羽口1点と羽口の孔径が大きいものに主体がある。鑄造用羽口であることから、羽口先端側で外径が5.2cm～7.2cmと鍛冶用羽口に比べて違いがなく、孔径がやや大きいか羽口の基部側まで強く使用されたことが反映された状況を示すものと思われる。

**Eタイプ**：粘土塊が主に出土し、椀型滓など鉄滓の出土がない遺跡・地点で、亀山市亀山城跡東三之丸跡(土坑10・鍛冶遺構1)がある。Eタイプも鑄造関連の遺跡・地点と考えられるもので、室町時代後期～江戸時代の亀山市亀山城跡東三之丸跡土坑10・鍛冶遺構1から出土した土製羽口は、先端側で孔径が3.5cm～3.6cm、外径11.5cm～11.9cmの特大型で、粘土塊が出土していることから鑄造用のものと考えたい。

**Fタイプ**：Aタイプ～Eタイプの鑄銅用椀型坩堝・

鑄鉄用坩堝・熔解炉・炉壁・鑄型・三叉状土製品・粘土塊などが椀型滓など鉄滓とともに多数の地点で出土している遺跡で、清洲城下町遺跡(10A区～11C区)と津市北畠氏遺跡・六田館跡がある。

FタイプはAタイプ～Eタイプの複合した金属製品加工・生産関連資料が出土する遺跡・地点で、鑄造による銅製品・鉄製品、鍛冶による主に鉄製品の生産が多様に盛んに営まれた遺跡である。津市北畠氏遺跡のように一つの遺跡の複数の地点で調査が実施されて、先に述べた北畠氏遺跡本殿推定地点から東西道路に沿った北側区画にある第30次調査区・第31次調査区のBタイプの地点とその北に位置する六田館跡の鍛冶を中心に営まれた地点が認識されている。また清洲城下町遺跡では、10A区～11C区はBタイプとCタイプの複合する地点であり、先に述べた99A区はAタイプの地点、2012C区はBタイプの地点と時期による変遷や地点における分業的特徴がみられる。これらの事例は城下町・町場遺跡の特徴を示すものと考えられる。BタイプとCタイプが複合する状態を示す清洲城下町遺跡10A区～11C区については、次章において述べる。

### 3. 鍛冶関連資料の金属学的分析成果の検討

次に遺跡から出土した鍛冶工程に伴う羽口の検討を行うために、素材などによる羽口の分類毎に、椀型滓などの鉄滓についての金属学的分析成果について検討する。また、鉄塊系遺物、羽口・炉壁などのについては必要に応じて述べる

#### (1) 石製羽口

石製羽口の出土した遺跡では、椀型滓など鉄滓が出土した12世紀～17世紀初頭の岐阜県美濃地域の遺跡、戦国時代の愛知県小牧市上御園遺跡と愛知県清須市清洲城下町遺跡2012C区、江戸時代後期の愛知県丹羽郡大口町堀尾氏邸宅跡がある。この中で金属学的分析が実施された遺跡は、芥見町屋遺跡の椀型滓・坩堝付着滓・金属粒の走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察と付属するエネルギー分散型X線分析による鉱物組織の定性分析があり、鍛錬鍛冶滓を示す分析成果がある。また、鉄滓などの結晶組織を光学顕微鏡で観察した岐阜県本巣郡本巣町上保本郷遺跡では、椀型滓・粒状滓・鍛造剥片など鉄滓中において、ヴスタイト、ファイヤライトの結晶が主に見られるもので、鍛錬鍛冶滓が推定されている。分析された含鉄椀型滓(No.14)からフェライトとパーライト金属組織が確認され、亜共析組織が内包され

ていること指摘されている。同様に分析された12世紀後葉～15世紀の岐阜県本巣市上保本郷遺跡4地点の椀型滓では金属顕微鏡観察でヴスタイト、ファイヤライトの晶出が主にみられるもの(No.15)で、定性分析により主体となる鉄と微量に銅・錫・鉛が検出されたことから、銅滓の推定がされている。

## (2) 土製羽口

古代の土製羽口が出土した遺跡では、飛鳥時代の三重県四日市市中野山遺跡と三重県四日市市筆ヶ崎西遺跡、古代の三重県四日市市西ヶ広遺跡、8世紀前半の三重県松阪市舞出北遺跡、8世紀中頃～9世紀中頃の岐阜県高山市野内遺跡、9世紀後半～10世紀後半の三重県松阪市大蓮寺遺跡、10世紀の愛知県豊田市孫石遺跡、古墳時代前期後半～中世の三重県松阪市西肥留遺跡、11世紀前葉～後半の岐阜県本巣市上保本郷遺跡、古代以後の岐阜県不破郡垂井町堅田遺跡出土椀型滓など鉄滓の金属学的分析が行われている。鉄滓中の金属顕微鏡観察において、ヴスタイト、ファイヤライトなどの晶出が主にみられ、併せて行われた成分定量分析から二酸化チタンが少ない結果から鍛錬鍛冶滓と想定されるものが主体を占める。滓中にチタン分をやや多く含むウルボスピネルが晶出する精錬鍛冶後半の椀型滓は、大蓮寺遺跡出土椀型滓(DIR-4)と郷上遺跡分析資料15・16の3点のみである。野内遺跡出土の椀型滓・鉄滓では、電子顕微鏡による観察と鉱物組織の定性分析により、鍛錬鍛冶滓が推定されている。

これらの分析で、金属顕微鏡観察により鉄滓中に含まれる微細な金属粒の組織とその痕跡が確認される。先ずフェライトやパーライトの組織がみられる亜共析組織(痕跡)が確認された資料は、中野山遺跡の椀型滓(TNKN-4)、舞出北遺跡の含鉄鉄滓(539・MID-11)・椀型滓(544・MID-16)、大蓮寺遺跡の椀型滓(DIR-1～DIR-3・DIR-6)、上保本郷遺跡の含鉄椀型滓(No.14)、西肥留遺跡の椀型滓(No.1657・No.1666)があり、舞出北遺跡の含鉄鉄滓(539・MID-11)と椀型滓(544・MID-16)には、パーライトやセメンタイトの組織がみられる共析組織～過共析組織も確認された。次にパーライトやセメンタイトの組織がみられる共析組織～過共析組織も確認された資料は、中野山遺跡の椀型滓(TNKN-2)、舞出北遺跡の椀型滓(536・MID-8)がある。そして孫石遺跡の含鉄椀型滓(分析資料4)にはパーライトやセメンタイトの組織がみられる共析組織・過共析組織とともに、黒色片状の黒鉛が析出するねずみ鉄組織が確認され、鍛冶原料に鉄・廃鉄物

片が使用されたことが推定された。

また、中野山遺跡の椀型滓(TNKN-3、金属鉄粒も確認)、筆ヶ崎西遺跡の椀型滓(TFDG-1、パーライト組織痕跡の錆化鉄も確認)と銅滓(TFDG-2～TFDG-6)、大蓮寺遺跡の銅滓(DIR-5)は成分定量分析で全鉄分30%以上のもので、微量の銅成分を含む。金属顕微鏡による観察では、ヴスタイト、ファイヤライトなどが晶出する中に、非常に微細な金属銅粒がみられ、銅小物製作に関わる銅滓、椀型鍛冶滓が推定されている。

鎌倉時代～戦国時代の土製羽口が出土した遺跡では、三重県東沖遺跡、三重県四日市市久留倍遺跡、愛知県名古屋市長久手市岩作城跡、愛知県豊田市薬師ヶ根遺跡、愛知県長久手市岩作城跡、愛知県豊田市郷上遺跡、愛知県清須市清洲城下町遺跡(10A区・11A区～11C区)出土椀型滓・ガラス質滓・炉壁・羽口・鉄塊系遺物などの金属学的分析が行われている。金属顕微鏡観察において、鉄滓中にヴスタイト、ファイヤライトの晶出が主にみられるものが報告されており、併せて実施された定量成分分析成果から鍛錬鍛冶滓に分類されている。これらの分析で、金属顕微鏡観察により鉄滓中に含まれる微細な金属粒の組織とその痕跡が確認される。先ずフェライトやパーライトの組織がみられる亜共析組織(痕跡)が確認された資料は、薬師ヶ根遺跡の椀型滓(YKS-2・YKS-3)、清洲城下町遺跡10A区～11C区のガラス質滓(KYS-46)・椀型滓(KYS-30)がある。次にパーライトやセメンタイトの組織がみられる共析組織～過共析組織も確認された資料は、清洲城下町遺跡10A区～11C区の含鉄椀型滓(KYS-34)・鍛冶滓(KYS-4)・ガラス質滓(KYS-6)がある。鍛造剥片(KYS-18)中にはねずみ鉄組織がみられ、先に述べた椀型滓中の晶出組織に亜共析組織が確認される資料が存在することから、軟鉄と銑鉄を合わせて鍛練する鍛冶の存在が示唆されている。

そして銑鉄に関わるものとして、清洲城下町遺跡10A区～11C区出土の亜共析組成白銑鉄組織が確認されたガラス質滓(KYS-7・KYS-37・KYS-39)、ねずみ鉄組織(痕跡)が確認されたガラス質滓(KYS-38・KYS-43・KYS-47・KYS-58)があり、これらはガラス質滓中に炉材粘土に混和された砂粒が多数存在していることから、鉄物の铸造に用いた熔解炉起源のものに分類されている。また羽口(KYS-15)に付着するガラス質滓中錆化鉄粒において過共析組織が確認され、羽口(KYS-20)先端部付着滓中に銑鉄の熔解時に表層の一部が酸化して生じた銑物相とみられる

灰褐色多角形結晶マグネタイトの晶出が見られ、(KYS-10)を含めて孔径が大きい特大型羽口になるものは鉄鋳物製作に用いた羽口と指摘されている。炉材や鉄塊系遺物などの金属組織中に亜共晶組成白鑄鉄組織・ねずみ鑄鉄組織・斑鑄鉄組織が確認されることも、この鉄鑄造工程の存在を示すものと思われる。

以上の結果、東海地域の椀型滓など鉄滓の金属学的分析からは、精錬鍛冶後半の鍛冶滓に分類されるものは少数あるものの、今回検討を行った遺跡出土鉄滓は鍛錬鍛冶滓が主体であり、鉄の消費地の状況を反映したものと思われる。よって鉄鍛錬鍛冶工程に伴う羽口には、土製と石製の素材や羽口孔径との特定の関係はみられない。ただし、BタイプとCタイプの複合する清洲城下町遺跡10A区～11C区において、孔径が大型になる土製羽口が鉄鋳物関連工程に伴い、その他の中型が主体となる鍛錬鍛冶の土製羽口とは区別されていた可能性が高い。

さて、東海地域における金属学的分析は、鉄滓中の晶出組織の検討から、中に包含された微細な金属粒の検討に分析の中心が推移してきているように思われる。特に鉄滓中に観察された亜共折組織の軟鉄から亜共晶組成白鑄鉄組織・ねずみ鑄鉄組織の銑鉄までの鉄製品加工や鉄素材が扱われてきたことが明らかにされてきており、鉄製品の刃部や基部などで使用に応じた強度や靱性、使用時の摩耗などが考慮された鉄素材の選択・利用がなされていたことが想定されている。また、古代における大蓮寺遺跡や中野山遺跡、上保本郷遺跡では、椀型滓に分類される鉄滓中に銅の微細金属粒などが含まれるものがある。これらは銅を加工して製品を生産した際に使用されたことを示すものである指摘に従えば、土製羽口は鉄の鍛冶と併用して使用された可能性も考えられる。一方、岐阜県金生山の鉄鉱石により製鉄した鉄素材には鉄と微量の砒素とともに銅が含まれることが知られている。この金生山の鉄素材を合わせて錬成する場合に鍛冶炉で加熱中の鉄素材の上面に浮き出てくるのが銅成分で、銅成分を含む鉄素材を合わせ打つ際には鉄成分と同時に融着をする必要がある\*。このような鉱石起源の鉄素材の錬成の際に、微細銅粒が椀型滓など鉄滓に入り込むことはないであろうか、鉱石起源の精錬鍛冶滓を抽出する場合の一つとして提案したい。

### (3) 転用羽口

転用羽口に関しては、椀型滓などの鉄滓の金属

学的分析が行われていないため、詳細は不明である。

## 4. まとめ

東海地域における鞆の羽口の変遷は、古墳時代前期後半の三重県西肥留遺跡に見られる土製羽口が最も古く、その後古墳時代以後に東海地域の各地域にみられるようになる。古墳時代中期には羽口高杯脚部を転用したものも使われ、転用羽口は奈良時代の愛知県新金山遺跡の須恵器壺頸部転用羽口がある。古代の土製羽口は、中小型～中型が主体で、鍛錬鍛冶と一部銅製品生産にも同じ場所で使用された可能性がある。12世紀後半以後の岐阜県美濃地域の遺跡では土製羽口から石製羽口に変化し、戦国時代の愛知県小牧市上御園遺跡や清洲城下町遺跡において、石製羽口が認められる。特に上御園遺跡では、土製羽口が少量使用されるが、大部分は石製羽口であった。中世以後の鉄鋳物用羽口や椀型坩堝に伴う銅鑄造用羽口、梵鐘鑄造用羽口は土製のものが使われる。鉄鋳物用羽口と梵鐘鑄造用羽口は土製中大型羽口～土製特大型羽口が使われ、椀型坩堝に伴う鑄銅用羽口は土製中小型羽口を主体に使用される。岐阜県鷺山仙道遺跡では先端が曲がる土製中小型羽口もみられる。江戸時代以後の遺跡では愛知県西三河地域や東三河地域の遺跡で土製中大型羽口・土製大型羽口が多くみられるようになり、江戸時代後期の吉田城址などでみられる瓦製土製大型羽口などは吉田鍛冶を反映した小地域性が推定される。

羽口の素材や送風孔の孔径にみられる鉄鑄造や銅鑄造、梵鐘鑄造と鉄鍛錬鍛冶における区別は、中世後半の15世紀には確実に認められる。

最後に戦国時代の上御園遺跡と清洲城下町遺跡にみられる石製羽口についてであるが、椀型滓など鉄滓には羽口の素材による工程の違いなどは認められず、石製羽口の分布からは美濃地域からの影響が考えられる。特に小牧城下町の一角を占める上御園遺跡は織田信長が清須城から小牧山城に永禄六年(1563)に移転した後で、永禄十年(1567)に岐阜城に移る4年間を中心に営まれた遺跡と考えられる。織田信長は永禄四年(1561)に新加納合戦で美濃に侵攻しており、永禄八年(1565)9月に関城主永井隼人佐を敗退させて関に入っている(尾関・松原1999)。そこで想起されるのが関刀鍛冶兼常8代目次男佐助、政常がいる。政常は美濃市鍛冶屋町武藤助右衛門氏蔵『兼

\*大野兼正氏よりご教示いただいた。融着の温度は1,150℃～1,180℃とお聞きした。

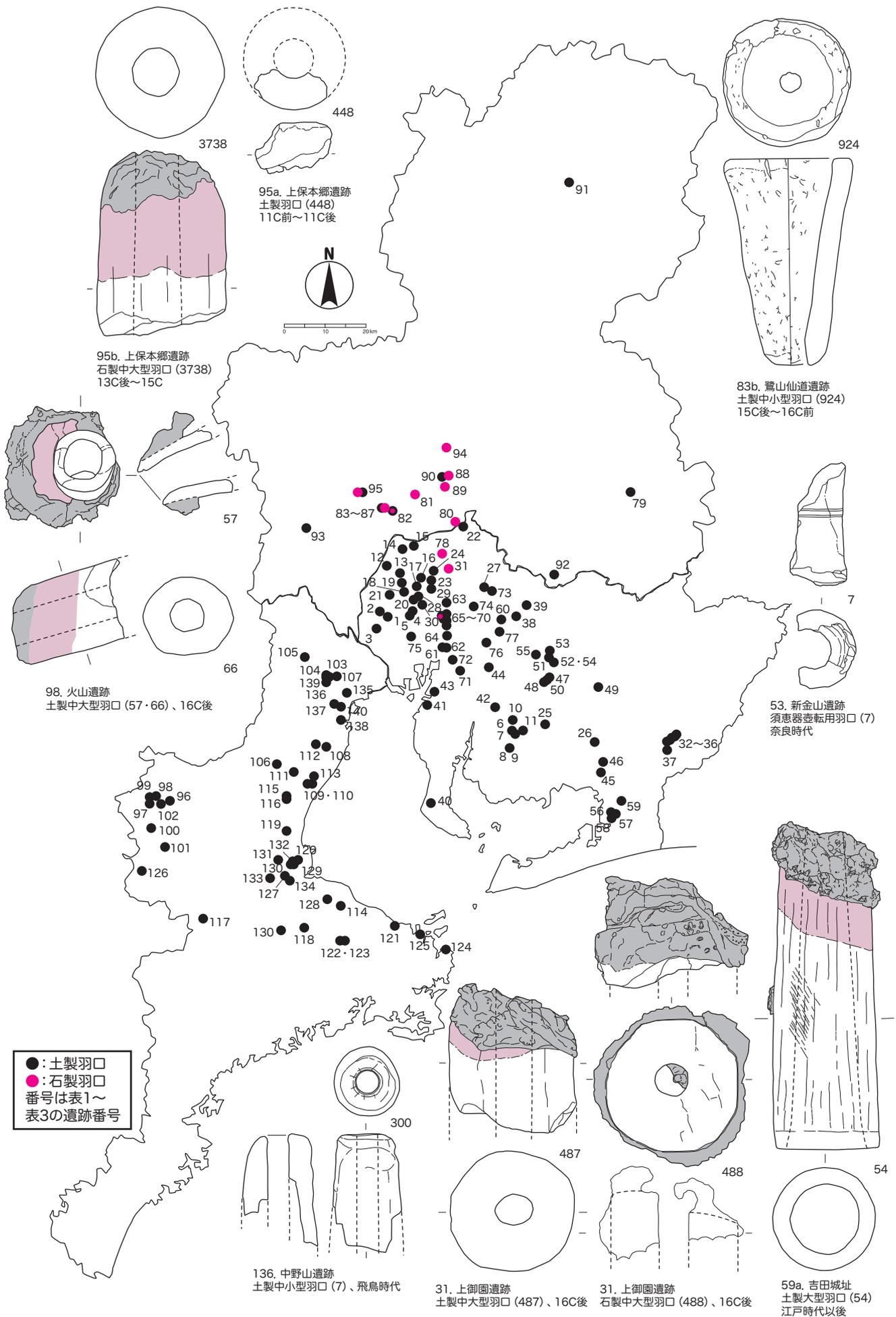


図1 東海地域における韃の羽口の出土した遺跡 (古墳時代～近代、韃の羽口は1:4)

常系図』に「永禄十年卯年尾州春日井郡小牧村へ分家居住ス」とあり(徳能一男他編 1975)、関刀鍛冶が小牧城下に存在した可能性は高い。関刀鍛冶の他国移住は系図にある由緒書の他に、伝世する刀の中子部分に線刻された刀工銘により知られている。応永年間の兼満の備前移住から江戸時代以後まで多くの刀工が移住した。永禄年間までにも、尾張地域には文明年間の兼光の尾張津島住、永正年間の兼延の尾張志賀住、天文年間の兼平の尾張津島に移る、天文年間の兼房の犬山にてもう一つ、永禄年間の兼菊の尾張清洲住、永禄年間の兼重の清洲にてもう一つ、永禄年間の兼房の尾張住がある。政常と関連する兼常は文禄年間尾張小牧住とあり、政常は慶長年間に尾張小牧、清洲、名古屋にてもう一つと記録される人物である(尾関・松原 1999)。さて、16世紀後半には、他にも多様な美濃地域の鍛冶職人が移り住んだことは疑いな

いが、小牧山城下の鍛冶屋町にある上御園遺跡に移住する鍛冶職人は、先のCタイプの金属製品生産関連資料の出土状況から刀鍛冶なども推定されるものであり、当地域の歴史の変遷と重なるところがあるように思われる。

本論をまとめるにあたり、清須市教育委員会柴垣哲彦氏、関市文化財センター伊藤 聡氏、関鍛冶伝承館江西奈央美氏には、調査に協力を頂き、誠にお世話になりました。記して感謝の意としたい。また、本論作成後に河野史郎氏による「石製フイゴの羽口について」の分析を知った。大分県中世大友府内町跡に関わる鍛冶工房・職人についての分析で、本論と同じく石製鞆の羽口の分布や機能について言及されている。大分市のある九州地方における同様の現象については、大変興味深い問題であり、今後の検討課題としたい。



写真1 岐阜県関市平和通四 古町遺跡 表採 石製鞆の羽口(関鍛冶伝承館所蔵、左:外形で右側が先端側、右:先端側断面形) ほぼ完形品で、長さ 18.8cm、外径 10.5cm ~ 11.3cm、孔径先端側 2.2cm、基部側 4.2cm、断面少し面取りがある円形

## 参考文献

- 鈴木正貴 1995「金属滓分析」『清洲城下町遺跡V』第八章 自然科学分析 第3節「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・蔭山誠一 1997「愛知県における古代・中世の鉄器生産その1」『愛知県埋蔵文化財センター年報平成8年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・蔭山誠一 2000「愛知県における鉄器生産を考える(4) -朝日西遺跡を中心に-」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第1号』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・蔭山誠一 2004「清須城下町における銅製品生産-愛知県における金属製品生産(7)-」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第5号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴・堀木真美子・蔭山誠一 2019「清洲城下町遺跡」『愛知の考古学 2019 資料集』名古屋市博物館・公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 蔭山誠一・堀木真美子・杏名貴彦・鈴木正貴 2020「清洲城下町遺跡における非鉄金属製品生産」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第22号』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 蔭山誠一・武部真木 2021「清須から名古屋へ-城下町と職人-」『近世都市の発展と産業』関西近世考古学研究会第31回大会
- 伊藤幸司 2012「铸造関連遺物の自然科学的分析」『鷺山遺跡群第5分冊分析・総括』(公財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集 岐阜市鷺山・下土居土地区画整理組合・公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団
- 尾関 章・松原久男 1999「第7章 近世の関鍛冶と打刃物」『新脩関市史 刃物産業編』関市
- 得能一男編纂責任 1975『美濃刀大鑑』刀剣研究連合会
- 河野史郎 2005「石製フイゴの羽口について」大分市教育委員会 2005『鶴崎町遺跡群(三軒町)』大分市埋蔵文化財調査報告書 58

## 分析速報

# 中狭間遺跡出土赤色顔料の 蛍光X線分析

堀木真美子

安城市中狭間遺跡 22A 区から出土した台石および片口鉢に付着する赤色顔料について、蛍光 X 線分析を実施した。その結果、台石と片口鉢に付着した赤色顔料より水銀が検出された。

## 1. はじめに

安城市中狭間遺跡の発掘調査は、2022 年度の鹿乗川流域関連遺跡群の調査のなかで、2022 年 8 月～2023 年 2 月の期間で、2,200 m<sup>2</sup>の発掘調査が実施された。遺跡は碧海台地の東側、鹿乗川沿いの沖積低地に立地している。今年度の調査においては、弥生時代中期後葉～末期、古墳時代前期、平安から鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。

今回分析を行なった資料は、22A 区の 093SD から出土した台石 (d-083) と片口鉢 (d-072) である。093SD は一辺が 8 m の方形周溝墓 (129SZ) の東溝にあたる。129SZ の南溝と西溝は屈曲する溝 092SD、北溝は 095SD である。この 095SD の東端と 093SD に北端の間に、幅約 2 m の陸橋部となっている。093SD は幅 1.8 m、深さ 0.6 m を測る。今回分析を実施する資料のほかにも、この 093SD からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物がまとまって出土している。

## 2. 分析試料と測定方法

### 分析試料 1 (台石) (写真 1)

平面が台形の板状を呈する。短い辺の長さが約 9cm、長い辺の長さが約 16.5cm、奥行約 8.5cm、厚さ約 3.5cm の角が丸くなった板状を呈する。石材は砂質凝灰岩。優白質で細粒の砂粒が観察される。赤色顔料は、片面の中央部分に楕円状に付着している。

### 分析試料 2 (片口鉢) (写真 2)

口径 14.5cm、底径 5cm、器高 8.5cm を測る。

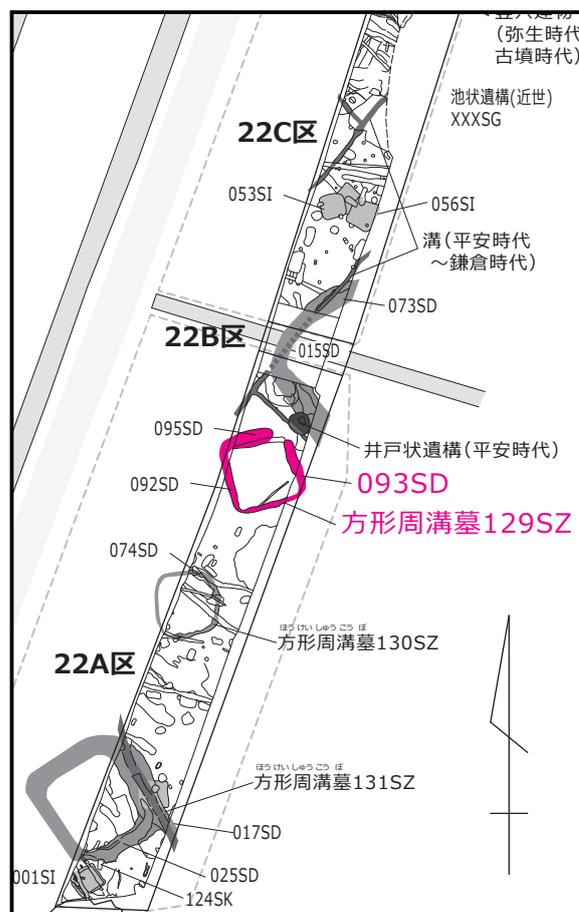


図1 試料出土地点 (中狭間遺跡)

赤色顔料は、鉢の内面の中位から底部にかけて付着する。顔料の厚みは、遺物の破断面において0.1 mm以下であることが観察できる。

上記の遺物2点から、それぞれ微量の赤色顔料をセロテープを用いて採取し、分析試料とした。セロテープによる分析試料の採取は、岩石や胎土による影響をできるだけ少なくするためである。

測定条件は以下のとおりである。測定機器は(株)堀場製作所製XGT-5000。測定条件はX線管電圧30kV、測定時間100秒、照射径100 μm、雰囲気は大気である。各試料から採取した分析試料について、それぞれ異なるポイントで2ヶ所ずつ定性分析を行った。

### 3. 分析結果

分析結果を図2・3に示す。

#### 分析試料1(台石) 図2

検出された元素は、Hg(水銀)、Fe(鉄)、Ti(チタン)である。Hg(水銀)の大きなピークが確認できることから、Hgを主成分とした赤色顔料であると判断できる。

#### 分析試料2(片口鉢) 図3

検出された元素は、Hg(水銀)、Fe(鉄)、Ti(チタン)である。分析試料1と同様にHgのピークが確認できることから、Hgを主成分とした赤色顔料であると判断する。

### 参考文献

- 南 武志・今津節生・北川路子・牧田碧夏・西川恵裕・永松 剛・田中龍彦・卜部達也・木寺正憲・石塚香織・高久雄一・高橋和也(2013) 鉛同位体比測定に基づく遺跡から出土した朱(水銀朱)の産地の解析. BUNSEKI KAGAKU Vol.62, No.9, pp.825-833.
- 南 武志・河野麻耶・古川 登・高橋和也・武内章記・今津節生(2013) 硫黄同位体分析による西日本日本海沿岸の弥生時代後期から古墳時代の墳墓における朱の産地同定の試み. 地球化学. 47, pp.237-243.
- 山下 昇・柏野義夫・糸魚川淳二(1988) 日本の地質5 中部地方II, 共立出版株式会社, 310pp.
- 清水俊輝(2022) 伊川津貝塚・吉胡貝塚出土遺物の赤色顔料分析について. 令和4年度考古学セミナーあいちの考古学2022 発表資料集. 愛知県埋蔵文化財センター. pp35-36.
- 堀木真美子(2015) 土器に付着した赤色顔料の蛍光X線分析. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第189集石座神社遺跡本文編. pp134-135.

### 4. 水銀朱について

水銀朱は、辰砂を材料にした赤色顔料である。辰砂の産地は、東海地域の近くでは三重県多気郡勢和村丹生鉱山・奈良県宇陀郡大宇陀町大和水銀鉱山・愛知県北設楽郡津具村津具鉱山などが知られている。水銀は広く所在する元素ではないため、今回検出された水銀朱については、遺跡周辺で入手できたものではないと断言できる。愛知県内では、伊川津貝塚(田原市)の縄文時代後期から晩期の縄文土器や石器などから水銀が確認されている(清水, 2022)。また新城市に所在する石座神社遺跡から出土した、古墳時代前期初頭の片口鉢からも水銀朱が確認されている(堀木, 2015)など、複数の遺跡で水銀朱が付着する遺物が報告されている。

また赤色顔料の分析研究においては、水銀朱に含まれる微量の鉛や硫黄の同位体比による産地推定の検討が進められている(南ほか, 2013・南ほか, 2016)。

今後、考古遺物の出土類例や分析数を蓄積するとともに、鉛や硫黄の同位体比による産地推定等の検討も実施し、水銀の流通経路等の解明を試みていきたい。



写真1 分析試料1 台石 (d-83)

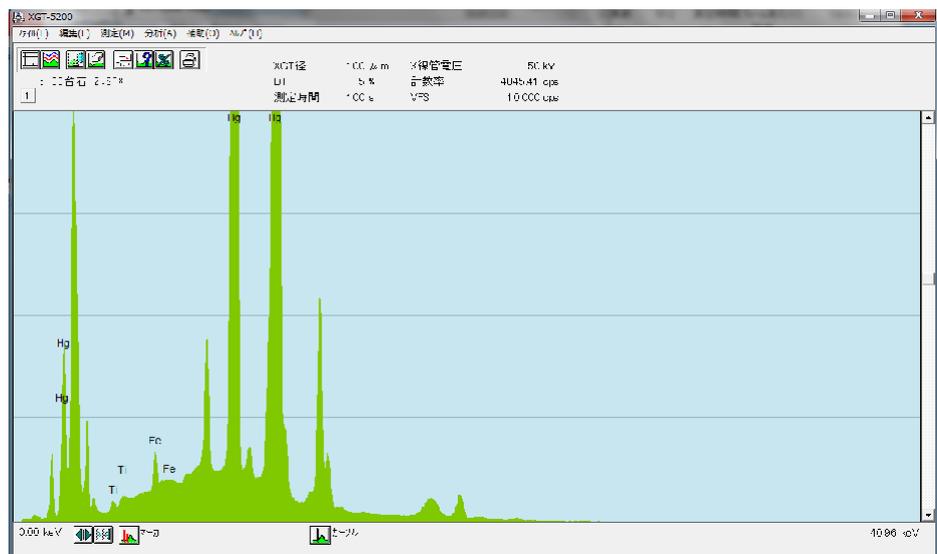
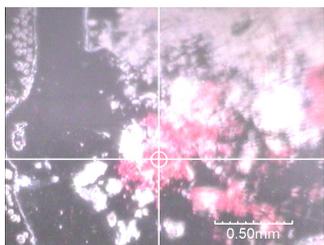
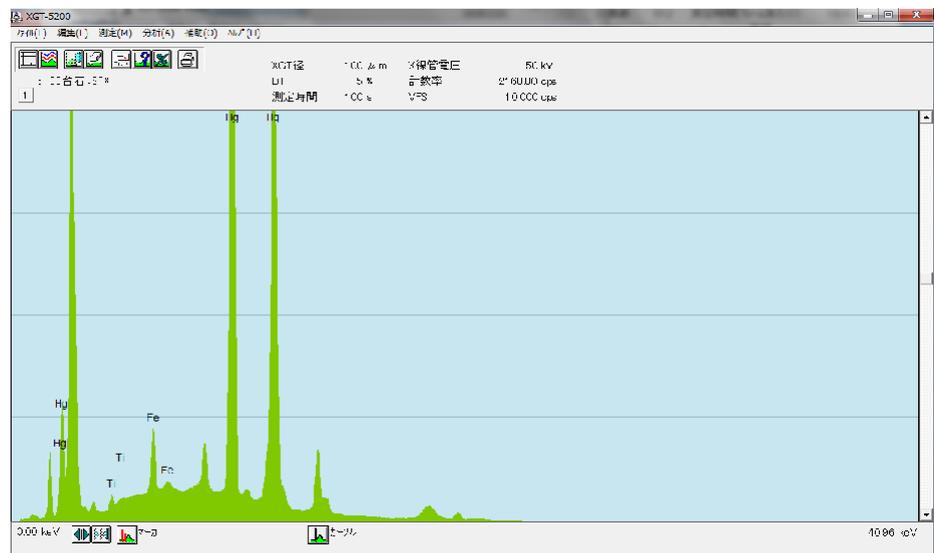
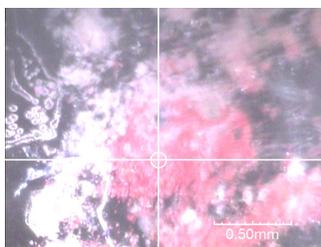


図2 分析試料1 分析結果



写真2 分析試料2 片口鉢 (d-72)

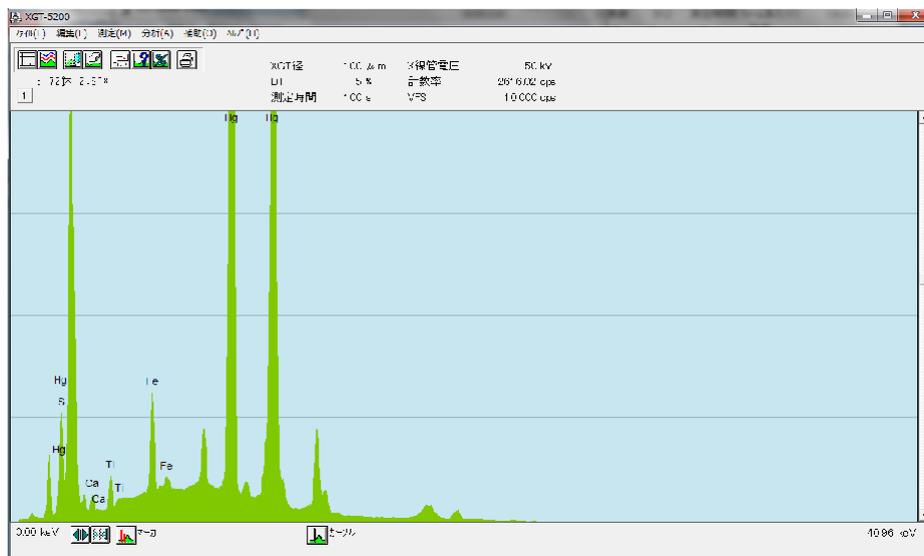
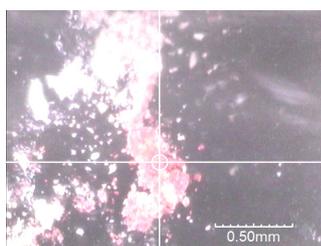
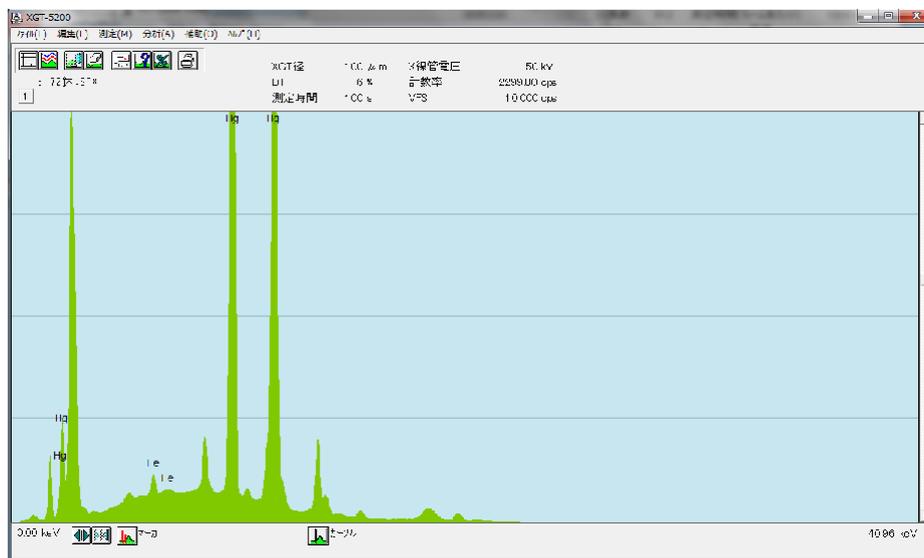
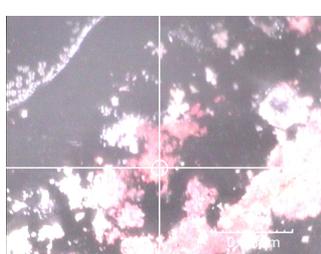


図3 分析試料2 分析結果

# 三河地域の縄文時代 竪穴建物跡の比較・分析

● 渡邊 峻

設楽ダム関連事業によって新たに発掘された縄文時代竪穴建物跡のデータを加えて、三河地域の縄文時代竪穴建物跡の比較・分析を行い、地域差などの検討を行う。

## 1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、2014年から継続的に設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて設楽町の遺跡を発掘し、多くの成果をあげてきた。特に縄文時代の竪穴建物跡は数多く確認され、筆者はこれらを一度資料にまとめた（渡邊 2022）。本稿はそれらの成果に加えて、三河地域の他の縄文時代の竪穴建物跡の資料を比較・検討し、その意味を検討したい。

## 2. 対象の遺跡

対象とする遺跡は、三河地域において縄文時代の竪穴建物跡が確認されている図1の55遺跡である。

愛知県における縄文時代の竪穴建物跡を表としてまとめた岩瀬彰利氏（岩瀬 1997）と伊藤正人氏（伊藤 2003）の資料と比較し、設楽ダム関連の遺跡の資料はもちろん、豊橋市や豊田市、西尾市でも発掘調査が行われ、多くの資料が追加された。それらの資料をまとめたものが表1～表3である。なお、遺構の時期などの表現に統一性がないが、これは各遺跡の報告書などの表記を尊重し、そのまま記載しているためである。表中に「推定」や「？」などの曖昧な表現が伴う資料は、遺構が全て確認できておらず、報告書の執筆者が確認できる範囲で推測された場合に用いている。遺構の面積も残存している範囲で記載している。また、新城市の観音前遺跡や豊田市（旧旭町）の資料の一部に遺漏がある。これらは筆者の怠慢により資料の確認が間に合

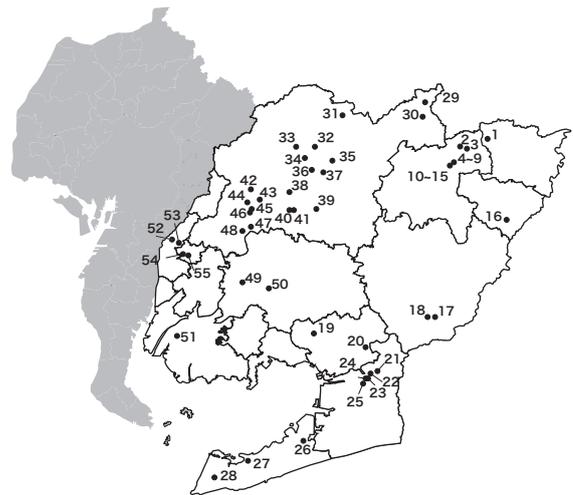


図1 縄文時代竪穴建物跡を有する三河地域の遺跡の位置図  
※表1～表3と合わせて参照

わず、本稿では記載出来なかったためである。

## 3. 資料の比較・検討

愛知県における縄文時代の竪穴建物跡の先行研究は、岩瀬彰利氏（岩瀬 1997）や増子康真氏（増子 2001）、高橋健太郎氏（高橋 2002）、伊藤正人氏（伊藤 2003）の研究が挙げられる。

岩瀬氏は愛知県を沿岸部と山間部に地域を分け、中期と晩期では山間部で石囲炉、沿岸部では地床炉と竪穴建物跡の屋内炉が二分化する傾向があることと、竪穴建物跡の形態の変化を縄文時代を通してまとめ、中期後葉より長野県伊那地方の特徴である四本柱の支柱穴を有する五角形・隅丸形状の竪穴建物跡の増加から、この時期に多数の移住者が中部高地から愛知県に移住した可能性を指摘する。

増子氏は岩瀬氏の指摘に加え、中期後半から貯蔵穴が屋内から消失し、屋内の石柱祭祀が行われることを指摘する。

表1 三河地域の縄文時代竪穴建物跡一覧表(1)

地図番号	遺跡名(市町村)・遺構名	時期	形態	大きさ(m)	深さ(cm)	主柱穴	壁柱穴	周溝	炉種類	炉形	炉大きさ(cm)
1	宮嶋遺跡(豊根村)										
1-1	竪穴住居	後期中葉	隅丸方形	3.8 × 3.4		○	×	×	石囲炉		
2	鞍船遺跡(設楽町旧津具村)										
2-2	第1号住居址	前期後半	隅丸方形	4.2 × 4.0		○	×	×	×	×	×
2-3	第2号住居址	前期後半	楕円形	4.2 × 2.8	20	×	×	×	×	×	×
2-4	第3号住居址	前期後半	隅丸方形	3.2 × 3.1	20	×	○	×	×	×	×
2-5	第4号住居址	前期後半	円形	3.4 × 3.2	30	×	×	×	×	×	×
2-6	第5号住居址	前期後半	円形	4.3 × 4.1	30	×	○	×	×	×	×
2-7	第6号住居址	前期?	円形?	?	?				×	×	×
3	大根平遺跡(設楽町旧津具村)										
3-8	1号住居址	中期前半	円形	4.1 × 4.0	30	○	×	×	石囲炉	五角形又は円形	70 × 60
3-9	2号住居址	中期後半	隅丸方形	4.8 × 4.8	60	○	×	○	地床炉		径80
4	滝瀬遺跡(設楽町)										
4-10	807SI	早期前葉	隅丸方形	4.3 × 3.9	35(斜面)	×	×	×	×	×	×
4-11	809SI	早期前葉	円形	径3.6	38(斜面)	×	×	×	地床炉?	×	×
4-12	828SI	早期前葉	円形又は隅丸方形	径3.5	24(斜面)	×	×	×	×	×	×
4-13	829SI	早期前葉	方形(推定)	4.3 × 3.4	31	×	×	×	×	×	×
4-14	830SI	早期前葉	円形又は隅丸方形	径5.6	42	×	×	×	×	×	×
4-15	836SI	早期前葉	隅丸方形	3.5 × 3.3	26(斜面)	×	×	×	×	×	×
4-16	839SI	早期前葉	円形(推定)	径2.8	20(斜面)	×	×	×	×	×	×
4-17	840SI	早期前葉	円形(推定)	径2.8	15	×	×	×	×	×	×
4-18	845SI	早期前葉	方形(推定)	長軸3.6(推定)	39(推定)	×	×	×	×	×	×
4-19	848SI	早期前葉	円形(推定)	径3.7(推定)	17	×	×	×	×	×	×
4-20	860SI	早期前葉	円形	径3.5	26(推定)	×	×	×	×	×	×
4-21	060SI	中期後半~後期初頭	円形	径3.0		×	×	×	石囲炉	方形	50 × 50
4-22	201SI	中期後半	五角形	5.0 × 4.7	22	○	○	×	石囲炉	方形	107 × 82
4-23	215SI	中期後半	五角形	5.0 × 4.9	35	○	○	×	石囲炉	方形	130 × 120(推定)
4-24	360SX	後期初頭	五角形	5.7 × 4.9	×	×	×	×	土器埋納炉		47 × 39
4-25	436SI	後期初頭	五角形	5.7 × 4.9	23	×	○	×	?		87 × 70
5	下延坂遺跡(設楽町)										
5-26	1100SI	中期後半	隅丸方形	3.6 × 3.6	35	×	○	×	石囲炉	方形	85 × 75
5-27	1110SI	中期後半	隅丸方形	4.75 × 4.5	41	○	×	×	石囲炉(副炉)	方形	102 × 84
6	石原遺跡(設楽町)										
6-28	170SI	中期前半	円形	径3.8	20	○	×	○	×	×	×
6-29	325SI	中期前半	円形	径7.8	50	○	○	○	石囲炉	方形	72 × 72
7	上ラロウ・下ラロウ遺跡(設楽町)										
7-30	1112SI	中期中葉	円形	径3.8	5	×	○	×	地床炉		径約60
7-31	1152SI	中期後半~後期前葉	円形又は隅丸方形	径4.0	10	○	○	×	石囲炉	方形又は五角	82 × 74
7-32	1154SI	中期後半~後期前葉	円形	径3.5	4	×	○	×	石囲炉	方形	約50 × 50
7-33	1420SI	中期後半~後期前葉	円形	径3.4	4	○	○	×	石囲炉?	方形?	
7-34	1270SI	中期後半~後期前葉	円形	径4.6	9	○	○	×	石囲炉?		
7-35	1350SI	中期後半~後期前葉	円形又は五角形	径4.9	25	○	○	×	×	×	×
7-36	1193SI	中期後半~後期前葉	円形(推定)	径3.5	8	○	○	×	地床炉		
7-37	2703SI	後期前葉	隅丸方形	3.6 × 3.6	28(斜面)	×	○	×	地床炉		
7-38	2740SI	後期前葉	隅丸方形	3.6 × 2.9	29	○	×	×	石囲炉?	×	×
7-39	1450SI	後期前葉~中葉	円形	径3.0	14	×	○	×	×	×	×
7-40	1449SI	後期前葉~中葉	円形	径4.2	25	×	×	×	土器埋納炉		径約64
8	笹平遺跡(設楽町)										
8-41	3893SI	中期後半	隅丸方形	5.68 × 5.49	43	○	○	○	石囲炉	方形	127 × 012?
8-42	1155SI	中期末~後期中葉	楕円	4.97 × 4.52	26	○	×	×	土器敷炉		96 × 64
8-43	1864SI	中期末~後期中葉	楕円(推定)	4.23 × 2.18以上(推定)	15	×	○	×	×	×	×
8-44	2216SI	後期初頭	隅丸方形	5.90 × 5.46	16	×	○	×	地床炉?	楕円形	132 × 99
8-45	4299SI	後期初頭~後期前葉	円形	4.03 × 1.39以上(推定)	10	×	○	×	石囲炉	楕円形	
8-46	1406SI	後期初頭~後期中葉	円形(不定形)	4.53 × 3.92	27	×	○	×	地床炉?		115 × 86
8-47	1559SI	後期初頭~後期中葉	楕円(推定)	4.84 × 3.83(推定)	42	×	○	×	石敷炉		85 × 59
8-48	2400SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形(推定)	5.4 × 5.4(推定)	23	×	○	×	×	×	×
8-49	2402SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形(推定)	6 × 6	5	×	○	×	×	×	×
8-50	2404SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形(推定)	5.39 × 1.94以上(推定)	21	×	○	×	土器敷炉		28 × 26
8-51	2405SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形(推定)	4.17 × 2.28	10	×	○	×	×	×	×
8-52	3429SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形(推定)	5.11 × 4.26以上(推定)	11	×	○	×	地床炉?		51 × 47
8-53	3947SI	後期初頭~後期中葉	円形	3.83 × 3.78	15	×	○	×	石囲炉	方形	67 × 63
8-54	4240SI	後期初頭~後期中葉	円形	径5.3	×	×	×	×	石囲炉	方形	130 × 116
8-55	4241SI	後期初頭~後期中葉	円形	径4.7	×	○	×	×			
8-56	4141SI	後期初頭~後期中葉	楕円	5.83 × 5.24	×	○	×	×	石囲炉	方形	71 × 56
8-57	4150SI	後期初頭~後期中葉	楕円	5.34 × 4.92	26	×	○	×	地床炉?		116 × 106
8-58	4310SI	後期初頭~後期中葉	円形	径5.8	×	○	×	×	石敷炉	楕円形	116 × 81
8-59	2215SI	後期初頭~後期中葉	隅丸方形	5.51 × 4.61	28	○	×	×	×	×	×
8-60	4293SI	後期前葉	隅丸長方形	5.3 × 4.2	16	×	○	×	石囲炉	楕円形	115 × 57
8-61	2338SI	後期前葉~中葉	円形	3.93 × 3.6	19	×	○	×	石囲炉	方形	115 × 86
8-62	3258SI	後期前葉~中葉	楕円形(推定)	7.67 × 5.68以上(推定)	17	×	×	×	地床炉?		57 × 53
8-63	788SI	後期前葉~中葉	楕円(不定形)	7.86 × 6.25	70	×	×	×	土器敷炉		42 × 32
8-64	790SI	後期前葉~中葉	円形(不定形)	5.67 × 4.89	48	×	×	×			94 × 77
9	万瀬遺跡(設楽町)										
9-65	1700SI	早期前葉	多角形(推定)	径5.8m(推定)	10	×	×	×	×	×	×
9-66	1710SI	早期前葉	多角形(推定)	径3m(推定)	20(斜面)	×	×	×	×	×	×
9-67	1720SI	早期前葉	多角形(推定)	径3.8m(推定)	30	×	×	×	×	×	×
9-68	1730SI	早期前葉	多角形(推定)	径3.8m(推定)	10	×	×	×	×	×	×
9-69	1740SI	早期前葉	多角形(推定)	径2.8m以上(推定)	20(推定)	×	×	×	×	×	×
9-70	2460SI	早期前葉	多角形(推定)	径4m(推定)	20	×	×	×	×	×	×
10	大栗遺跡(設楽町)										
10-71	090SI	中期(推定)	円形(推定)	3.6 × 3.2	20	○	×	×	石囲炉	方形	79 × 79
11	大畑遺跡(設楽町)										
11-72	192SI	中期前半~中葉	隅丸方形(推定)	4.6 × 1.3(残存)		×	○	○	×	×	×
11-73	310SI	中期後半	円形又は五角形	4.1 × 4	30(斜面)	×	×	×	×	×	×
11-74	362SI	中期後半	隅丸方形	4.1 × 4	40	○	×	○	石囲炉	方形?	75 × 75(推定)
11-75	362SI(2)	中期後半	隅丸方形	4.1 × 4		○	×	×	石囲炉	方形	50 × 50(推定)
11-76	420SI	中期後半	方形	3.3 × 3.3	30	×	×	×	×	×	×
11-77	440SI	中期後半	円形又は多角形	4.5 × 4.0	30(斜面)	×	×	×	×	×	×
11-78	490SI	中期後半	楕円形	4.8 × 3.3	40(斜面)	×	×	×	×	×	×
11-79	700SI	中期後半	楕円又は隅丸方形	3 × 3	10	×	×	○	×	×	×
11-80	890SI	中期後半	円形	3.3 × 3.3	35	×	×	○	×	×	×
11-81	1000SI	中期後半	方形	3.6 × 3.6	10	×	×	×	×	×	×
11-82	1030SI	中期後半	隅丸方形(推定)	3.6 × 3.6	30	×	×	×	×	×	×
11-83	065SI	中期末	円形又は多角形	径4.4	48(斜面)	○	×	×	石囲炉(副炉)	方形	50 × 50
11-84	300SI	後期初頭	隅丸方形又は多角形	4.1 × 4	20(斜面)	○	×	×	石囲炉	方形	径1m
12	川向東貝津遺跡(設楽町)										
12-85	001SI	中期後半	隅丸方形	3 × 2.5	24	○	○	○	石囲炉	方形	60 × 60
12-86	002SI	中期後半	隅丸方形	4 × 4	37	○	○	×	石囲炉	方形	90 × 90
12-87	003SI	中期	隅丸方形(推定)	4.7 × 4	34	○	×	×	石囲炉	五角	100 × 90
12-88	114SI	中期	円形	5.2 × 4.9	24	○	○	○	石囲炉		70 × 70
12-89	177SI	後期	円形	6.7 × 5.2	8	○	○	×	石囲炉?		
12-90									地床炉		
12-91	218SI	後期初頭	隅丸方形(推定)	5 × 5(推定)	9	×	×	×	×	×	×
12-92	220SI	後期初頭	隅丸長方形(推定)	4 × 3.6	18	×	×	×	×	×	×

表2 三河地域の縄文時代竪穴建物跡一覽表(2)

地図番号	遺跡名(市町村)・遺構名	時期	形態	大きさ(m)	深さ(cm)	主柱穴	壁柱穴	周溝	炉種類	炉形	炉大きさ(cm)	
13	大崎遺跡(設楽町)											
13-93		5300SI 中期後半	楕円形	3.9×3.2(推定)	20	○	×	×	地床炉?		60×60	
13-94		5054SI 中期後半	隅丸方形	3.8×2.8(推定)		×	×	×	×	×	×	
13-95		5057SI 中期後半	隅丸長方形(推定)	4.4×2.8(推定)		○	×	×	地床炉?		40×40	
13-96		5055SI 中期後半	隅丸長方形(推定)	5.2×3.8(推定)		○	×	×	地床炉?		推定 60×60	
13-97		5361SI 中期後半	隅丸長方形(推定)	4.4×3.4(推定)		×	×	×	地床炉?		推定 60×60	
13-98		5356SI 後期前葉~中葉	隅丸方形	3.2×3		×	×	×	地床炉?		80×60	
13-99		5321SI 後期前葉~中葉	隅丸方形	4×4		○	×	×	地床炉?		80×60	
13-100		5324SI 後期中葉	隅丸方形	3.2×3		○	×	×	地床炉?		80×60	
13-101		5050SI 後期中葉	隅丸長方形(推定)	4.4×3.6		○	×	×	地床炉?		60×40	
13-102		5425SI 後期末	隅丸長方形(推定)	4.4×4.1(推定)		×	○	×	石囲炉	方形	60×60	
13-103		5440SI 後期末	隅丸長方形(推定)	3.8×3(推定)		×	○	×	石囲炉?		60×60	
13-104		5090SI 後期中葉~後期末	隅丸長方形	5×4		○	×	×	×	×	×	
13-105		5001SI 晩期	隅丸方形	4.2×4		×	○	×	地床炉		40×40	
14	西地・東地遺跡(設楽町)											
14-106		1305SI 中期末~後期初頭	隅丸方形(推定)	5×5	20	○	○	×	石囲炉	方形	60×70	
14-107		1306SI 中期末~後期初頭	隅丸方形(推定)	5×5	10	×	○	×	石囲炉	方形	60×60	
14-108		1304SI 後期初頭	隅丸方形(推定)	5×5	30	○	○	×	石囲炉	方形?	50×50(推定)	
14-109		1201SI 後期初頭	隅丸方形か円形(推定)	4.5×4.5		×	○	×	土器敷炉			
14-110		1263SI 後期初頭	隅丸方形	4×4		×	○	×			60×50	
15	胡桃窪遺跡(設楽町)											
15-111		111SI 前期後半	楕円	3.6×3	50(斜面)	×	○	×	地床炉?			
15-112		300SI 中期後半	隅丸方形(推定)	4.7×4.1(推定)	30(斜面)	×	○	×	石囲炉	多角形?	60×60(推定)	
15-113		399SI 中期後半	隅丸長方形(推定)	4.9×2.2(推定)		×	○	×	石囲炉?	多角形?	50×50(推定)	
16	本郷桜平遺跡(東栄町)											
16-114		住宅跡	隅丸方形	3.0×3.0		○	×	×	石囲炉	方形		
17	モリ下遺跡(新城市)											
17-115		1703SI 後期初頭	円形	径4.2		○?	×	○	×	×	×	
18	石塚神社遺跡(新城市)											
18-116		3001SI 中期後半	円形	径3.0		×	×	×	石囲炉	方形	60×35	
19	天井平遺跡(豊川市)											
19-117		SB-1 早期中葉	楕円形	4.58×3.80	13	×	×	×	×	×	×	
19-118		SB-2 早期中葉	円形	径3.10	37	×	×	×	×	×	×	
19-119		SB-3 早期中葉	円形	径3.2	43	×	×	×	×	×	×	
19-120		SB-4 早期中葉	楕円形(推定)	3.93×3.40	23	×	×	×	×	×	×	
19-121		SB-5 早期中葉	円形(推定)	径2.5(推定)	41	×	×	×	×	×	×	
20	麻生田大橋遺跡(豊川市)											
20-122		SH3 晩期後葉	円形	4.8×4.5		×	○	×	地床炉	円形		
21	多り畑遺跡(豊橋市)											
21-123		219SI 早期中葉	楕円形	2.4×2.0	20	×	×	×	×	×	×	
21-124		375SI 早期中葉	楕円形	2.4×2.2	10	×	×	×	×	×	×	
22	浪ノ上遺跡(豊橋市)											
22-125		E-SB19 早期前葉	楕円形	4.8×3.0	30	○	○	×	地床炉		86×64	
23	西側北遺跡(豊橋市)											
23-126		SB-1 前期中葉	隅丸方形(推定)	1.8×1.6以上(推定)	17	○	×	×	×	×	×	
23-127		SB-2 前期中葉	六角形又は五角形	4.0×3.7	4	○	×	×	×	×	×	
23-128		SB-3 前期中葉	六角形又は五角形	4.8×2.8	7	○	×	×	×	×	×	
24	眼鏡下池北遺跡(豊橋市)											
24-129		SB-1 早期前葉	隅丸三角形?	3.1×2.3	20	×	○	×	×	×	×	
24-130		SB-2 早期前葉	楕円形	3.2×2.2	11	×	○	×	×	×	×	
24-131		SB-3 早期前葉	楕円形	3.4×2.4	20	×	○	×	×	×	×	
24-132		下層 SB-1 早期前葉	円形	3.3×3.65	30	×	×	×	×	×	×	
24-133		下層 SB-2 早期前葉	円形	2.45×2.95	25	×	×	×	×	×	×	
24-134		下層 SB-3 早期前葉	円形	推定径4.2	10	×	×	×	×	×	×	
24-135		SB01 前期後葉	方形(推定)	3.1×3.2	21	○	×	×	地床炉			
25	洗島遺跡(豊橋市)											
25-136		SB-4 前期後葉	隅丸台形	6.4×3.2	28(斜面)	○	×	×	×	×	×	
25-137		SB-1 中期中葉	五角形	4.0×3.5	20(斜面)	○	×	×	×	×	×	
25-138		SB-2 前期中~中期前葉	円形	径4.0	31(斜面)	×	○	×	×	×	×	
25-139		SB-3 前期末~中期前葉	隅丸方形	5.0×4.8	26(斜面)	○	×	×	×	×	×	
25-140		SB-6 中期前葉	五角形	3.6×2.9	17(斜面)	○	×	×	×	×	×	
26	吉胡貝塚(田原町)											
26-141		第1号住居跡	後・晩期?	方形(推定)		×	○?	×	×	×	×	
26-142		第2号住居跡	後・晩期?	円形(推定)	径4.5(推定)	×	○	×	×	×	×	
26-143		第3号住居跡	後・晩期?	円形(推定)	径5.0(推定)	×	○?	×	×	×	×	
27	伊川津貝塚(田原市旧瀬美町)											
27-144		SH01 晩期後葉	楕円(推定)	長径4.3以上(推定)		○	○?	×	石囲炉	楕円形?	80×60	
28	川地遺跡(田原市旧瀬美町)											
28-145		SH01 後期前葉	円形	径5.40		×	○	×	×	×	×	
28-146		SH02 後期前葉	円形	径5.50		×	○	×	×	×	×	
28-147		SH03 後期前葉	円形	径5.80		×	○	×	×	×	×	
28-148		SH04 後期前葉	円形(推定)	径5.0(推定)		×	○	×	×	×	×	
28-149		SH05 後期前葉	円形	径3.90		×	○	×	×	×	×	
28-150		SH06 後期前葉	円形	径約2.5以上(推定)		×	○	×	×	×	×	
28-151		SH07 後期前葉	円形	径5.10		×	○	×	×	×	×	
28-152		SH08 後期前葉	不正形	径約6.0(推定)		×	○?	×	×	×	×	
29	ヒノノ遺跡(豊田市旧稲武町)											
29-153		1号住居跡	中期末	楕円形(推定)		×	×	×	×	×	×	
29-154		2号住居跡	中期後葉	隅丸方形(推定)	長径約5.0以上(推定)	×	×	×	×	×	×	
29-155		3号住居跡	中期後葉	方形(推定)	長径約3.3以上(推定)	25	○	×	×	石囲炉	長方形	約66×39
29-156		4号住居跡	中期後葉			×	×	○	×	×	×	
29-157		5号住居跡	中期後葉	隅丸方形(推定)		×	×	○	×	×	×	
29-158		6号住居跡	中期後葉	円形(推定)	径6.0以上(推定)	×	×	○	×	×	×	
29-159		7号住居跡	中期後葉	円形(推定)	径6.0以上(推定)	×	○	○	×	×	×	
29-160		8号住居跡	中期末			×	○	○	×	×	×	
29-161		SB1 中期後半	長方形(推定)	4.50以上(推定)×3.84		○?	○?	×	土器埋設炉?		径72	
29-162		SB2 中期後半	隅丸方形	5.0×5.0(推定)		○	×	○	石囲炉	方形	70×70	
30	クダリヤマ遺跡(豊田市旧稲武町)											
30-163		住居跡	晩期後半	隅丸方形(推定)	長径3.0以上(推定)	×	○?	×	石囲炉	楕円形	65×45	
31	大砂遺跡(豊田市旧相町)											
31-164		第1号整穴式住居跡	中期後半	八角形(円形?)	4.8×4.0	50(斜面)	○	×	○	石囲炉	方形	80×60
31-165		第2号整穴式住居跡	中期後半	隅丸方形(推定)	長径4.8以上(推定)	25(斜面)	○?	×	○	石囲炉	方形	約80×60
31-166		第3号整穴式住居跡	中期後半	隅丸方形(推定)	長径4.5以上(推定)		×	×	×	石囲炉	方形	約60×60
31-167		第4号整穴式住居跡	中期前半	円形	径3.6		○	×	○	石囲炉	方形	約80×80
32	寺ノ下遺跡(豊田市旧足助町)											
32-168		住居跡	後期前半	円形(推定)	径約3.5(推定)	18.8	×	○?	×	土器埋設炉?		
33	水汲遺跡(豊田市旧藤岡町)											
33-169		SB01 前期後葉	隅丸方形(推定)	長径3.16以上(推定)	60	○	×	×	×	×	×	
33-170		SB03 前期後葉	方形(推定)	長径2.24以上(推定)	29.4	×	×	×	×	×	×	
33-171		SB02 中期後葉	隅丸方形(推定)	長径2.68以上	15.6	×	○	×	石囲炉	方形	長径50	
33-172		SB04 中期後半	楕円形	4.64×4.10	24.7	○?	×	×	×	×	×	
34	日陰田遺跡(豊田市旧足助町)											
34-173		竪穴住居跡	中期後葉	隅丸方形	3.9×3.4	○	×	○	石囲炉	方形	70×65	
35	北貝戸遺跡(豊田市旧足助町)											
35-174		1号住居	早期前葉	円形(楕円?)	3.6×3.1	×	×	×	×	×	×	
35-175		2号住居	早期前葉	円形(楕円?)	3.8×3.6	×	×	×	×	×	×	

表3 三河地域の縄文時代竪穴建物跡一覽表(3)

地図番号	遺跡名(市町村)・遺構名	時期	形態	大きさ(m)	深さ(cm)	主柱穴	壁柱穴	周溝	炉種類	炉形	炉大きさ(cm)	
36	沢尻遺跡(豊田市)											
36-176		SB1	中期後葉	円形	3.89 × 3.81	48.7	○	x	○	石囲炉?	楕円形	33.9 × 26.7
36-177		SB2	中期後葉	円形(推定)	3.44 × 2.74以上(推定)	30	○	x	○	石囲炉?	方形	109.4 × 93.0
36-178		SB3	中期後葉	隅丸方形	4.96 × 4.61	40.9	○	x	○	石囲炉?	方形	102.6 × 99.5
36-179		SB4	中期後葉	隅丸楕円形(推定)	5.20 × 3.95以上(推定)	○?	x	○	不明	楕円形		
37	今朝平遺跡(豊田市 旧足助町)											
37-180		SB1	後期前葉	円形	径5	30	x	x	?	石囲炉	方形	75.6 × 67.9
38	シメ土遺跡(豊田市 旧足助町)											
38-181			中期後半	長方形(推定)	3.2 × 1.4以上(推定)		x	x	x	地床炉?	方形	55 × 55
39	馬場遺跡(豊田市 旧足助町)											
39-182			早期前半	五角形	2.8 × 1.8		x	x	x	x	x	
39-183			早期前半	不整形	3.7 × 2.4	30	x	○?	x	x	x	
39-184			早期前半	楕円形	径4	40	x	○	x	x	x	
39-185			早期前半	五角形	2.6 × 1.5		x	○	x	x	x	
39-186			早期前半	五角形	2.9 × 1.9		x	○	x	x	x	
39-187			早期前半	五角形	3.3 × 2.5		x	○	x	x	x	
39-188			前期後半	円形	4 × 3.8	50	x	○	x	x	x	
39-189			前期後半	円形	径4.5		x	○	x	x	x	
39-190			後期前半	円形(推定)	径5.0(推定)		x	x	x	石囲炉		
40	三本松遺跡(豊田市)											
40-191		SB01	後期末	円形(推定)	径3.2以上(推定)	○?	x	x	x	x	x	
41	三斗目遺跡(豊田市)											
41-192		SB01	後期中葉	円形	径8.0		x	○	x	石囲炉	方形?	70 × 70
42	万加田遺跡(豊田市)											
42-193		SB01	中期後葉	方形	4.05 × 3.90		○	x	○	x	x	
42-194		SB02	中期後葉	方形(推定)	5.50 × 5.00(推定)		○	x	○	石囲炉	円形	径50
42-195		SB03	中期後葉	不明	不明		○?	x	○?	地床炉?		42 × 35
43	栃原遺跡(豊田市)											
43-196		SB01	中期後葉	隅丸方形(推定)	3.59 × 2.0以上(推定)	25	○	x	○	石囲炉	方形	70 × 62
43-197		SB02	中期後葉	隅丸方形(推定)	3.60 × 3.07以上(推定)	40	○	x	○	石囲炉	楕円形	58 × 47
43-198		SB03	中期後葉	隅丸方形	4.05 × 3.87	8	○	○	○	石囲炉	方形	73 × 70
44	曾根遺跡(豊田市)											
44-199		SB01	中期後葉	隅丸方形	5.59 × 5.34	33	○	x	○	石囲炉	方形	120.6 × 100.3
44-200		SB02	中期後葉	方形	4.87 × 4.26	31	○	x	○	石囲炉	方形	111.7 × 103.2
44-201		SB03	晩期前半	円形(推定)	6.55 × 3.64以上(推定)	24	x	○?	○?	地床炉		
45	丸根遺跡(豊田市)											
45-202		SB02 住居跡	晩期前半	円形	4.42 × 4.38	26	○	○	x	石囲炉	六角形	65.1 × 58.5
46	秋葉遺跡(豊田市)											
46-203		SB1 住居跡	中期後葉	隅丸長方形	4.22 × 3.26	12.5	○	x	○	石囲炉	方形	87.6 × 74.0
46-204		SB2 住居跡	中期後葉	方形	3.71 × 3.60	13.7	○	x	○	石囲炉	方形	69.1 × 57.6
47	今町遺跡(豊田市)											
47-205		98BSB0001	後期前葉~中葉	円形(推定)	6.64 × 2.08以上(推定)	35	○	x	x	x	x	
48	水入遺跡(豊田市)											
48-206		99DSB15(a)	中期後葉	隅丸方形	4.4 × 4.25(推定)		○	x	○	地床炉(粘土)	方形	64 × 52
		99DSB15(b)	中期後葉	隅丸方形(推定)			○	x		地床炉(粘土)	方形	48 × 30
48-207		99DSB16	中期後葉	円形	4.1 × 3.8	20	○	x	○	地床炉(粘土)	方形	58 × 49
48-208		99DSB30	中期後葉	円形(推定)	南北3.3以上(推定)	10	x	x	x	x	x	
48-209		99DSB35	中期後葉	円形(推定)	長軸4.1以上(推定)		x	x	x	x	x	
48-210		99KSB1075	後期初頭	円形(推定)	形4.0以上(推定)	20	x	x	x	石囲炉	方形	一辺50~60
49	真宮遺跡(岡崎市)											
49-211		J1 号住居跡	晩期前葉	円形	径3.0~2.68	平地	○	x	x	地床炉		
49-212		J2 号住居跡	晩期中葉	円形	径4.07~3.35	平地	○?	○?	x	地床炉		
49-213		J3 号住居跡	晩期前葉	円形	径3.82~3.45	平地	○	x	x	地床炉		
49-214		J4 号住居跡	晩期中葉	円形	径4.0	平地	○	x	x	地床炉		
49-215		J5 号住居跡	晩期前葉	円形	径5.0~4.6	平地	○	x	x	地床炉		
49-216		J6 号住居跡	晩期前葉	円形	径4.98~4.53	平地	○	x	x	地床炉		
49-217		J7 号住居跡	晩期前葉	円形	径4.0	平地	○	x	x	礫と粘土		
49-218		J8 号住居跡	晩期中葉	円形	径4.5	平地	○	x	x	地床炉(粘土)		
49-219		J9 号住居跡	晩期中葉	円形	径4.30~3.92	平地	○	x	x	地床炉(粘土)		
49-220		J10 号住居跡	晩期前葉	円形	径4.25~3.85	平地	○	x	x	地床炉		
49-221		J11 号住居跡	晩期中葉	円形	径5.96~5.18	平地	○	x	x	地床炉(粘土)		
49-222		J12 号住居跡	晩期前葉	円形	径4.0	平地	○	x	x	礫と粘土		
50	村上遺跡(岡崎市)											
50-223		1 号住居跡	中期後葉	隅丸方形	3.6 × 3.5		○	x	x	石囲炉		
50-224		2 号住居跡	中期後葉	隅丸方形	3.3		○	x	x	石囲炉		
50-225		3 号住居跡	中期後葉	隅丸方形	4.4 × 4.7	20	○	x	○	地床炉?		
51	枯木宮貝塚(西尾市)											
51-226		SB01	晩期前葉	円形(推定)	径5.6以上(推定)	平地	○	x	x	地床炉		
51-227		SB02	晩期前葉	円形	5.8 × 5.5	平地	○	x	x	地床炉		
51-228		SB03	晩期前葉	円形	5.8 × 5.3	平地	○	x	x	地床炉		
51-229		SB04	晩期前葉	楕円形(推定)	3.45 × 3.4(推定)	10	x	○?	x	地床炉	径52	
51-230		SB05	晩期前葉	楕円形(推定)	2.05 × 3.0以上(推定)	20	x	x	x	地床炉		
51-231		SB06	晩期前葉	円形(推定)	3.3 × 3.8以上(推定)	12	○?	x	x	x	x	
51-232		SB07	晩期前葉	円形(推定)	径3.0以上(推定)	平地				地床炉		
52	築地貝塚(刈谷市)											
51-233		第1号住居址	後期中葉	円形	5.5 × 4.9	30	x	○	x	地床炉	径約80	
53	芋川遺跡(刈谷市)											
53-234		J1 号竪穴住居	中期後葉	隅丸方形	4 × 4.4	25	○	x	x	x	x	
53-235		J2 号竪穴住居	中期後葉	五角形	3.4 × 3.8	30	○	x	x	地床炉	円形	75 × 80
53-236		J3 号竪穴住居	中期前葉	円形	3.8 × 3.5	16	x	○	x	地床炉?	楕円形	80 × 60
53-237		J4 号竪穴住居	中期末	隅丸方形	4.0 × 3.8	15	○	x	x	地床炉?	方形	55 × 55
53-238		J5 号竪穴住居	中期後葉	隅丸方形	4.6 × 4.3		○	x	○	地床炉	楕円形	70 × 55
53-239		J6 号竪穴住居	中期後葉	楕円形	3.3 × 3.0		○	x	x	地床炉	円形	径50
53-240		J7 号竪穴住居	中期前葉	円形	径4.4	10	○	○	x	地床炉	円形	径50
53-241		J8 号竪穴住居	中期末	隅丸長方形	4.6 × 4.0	26	○	○	x	地床炉	楕円形	80 × 64
53-242		J9 号竪穴住居	中期末	隅丸方形	3.9 × 3.5		○	x	○	地床炉	円形	65 × 60
53-243		J10 号竪穴住居	中期後葉	円形	4.6 × 4.2	22	○	x	x	地床炉	円形	径66
53-244		J11 号竪穴住居	中期末	隅丸方形	4.9 × 4.6	16	○	x	x	地床炉	円形	44 × 40
53-245		J12 号竪穴住居	中期末	隅丸方形	3.7 × 3.4	21	○	x	x	地床炉	方形	64 × 60
54	小針遺跡(知立市)											
54-246		SI1	中期後葉	隅丸方形	長径3.4以上(推定)	44	x	x	x	石囲炉	楕円形	64 × 44
55	間瀬口遺跡(知立市)											
55-247		SI1	中期後葉	隅丸方形	4.8 × 4.68	32	○	x	x	地床炉	円形	88 × 76
55-248		SI2	中期後葉	隅丸方形(推定)	長径4.5以上(推定)	36	○	x	x	地床炉	円形	径80
55-249		SI3	中期後葉	円形	4.4 × 4.28	22	○	x	x	地床炉	円形	60 × 56

高橋氏は尾張・西三河・美濃地域を対象に、遺跡の土地利用の密度(遺構密度)を検討し、密度が濃い部分の研究を重視して行ってきた東日本の縄文研究は東海地方には当てはまらないことが多いと指摘する。

伊藤正人氏は先に述べた岩瀬彰利氏の資料を補強しつつ、東海という西と東の中間的地域の中で、東西の境界線がどのように変動したかが重要であると指摘している。

伊藤氏が指摘する東西の境界線と呼べるかはわからないが、表1～表3の資料をまとめる際に興味深いデータが確認出来た。縄文時代中期後半から4本柱の支柱穴の隅丸方形の竪穴建物跡が増加し、縄文時代後期に移行するに従って円形の壁柱穴を有する竪穴建物跡(図5)が増えると岩瀬氏も増子氏も指摘しているが、設楽ダムの関連事業で調査した東三河の北設楽郡では中期後半から後期にかけても竪穴建物跡の住居形態の比率はさほど変化はないようである。図2は北設楽郡地域の竪穴建物跡の住居形態の比率を、図3は北設楽郡以外の住居形態の比率を表している。なお、両グラフとも曖昧な遺構はカウントしておらず、表1の中で(推定)のつかない遺構のみで構成されている。図2の円グラフがさほど変化が見られないのに対して、図3のグラフは隅丸方形の竪穴建物跡が0になっ

ている。図3のグラフは(推定)のつかない遺構のみで構成されているが、(推定)の遺構を見渡しても、後期から隅丸方形の竪穴建物跡は見当たらない。今回表に取り扱っていない新城市の観音前遺跡では縄文時代後期の隅丸方形の竪穴建物跡が確認されているようだが、それも2棟のみの様である(増子 2001)。尚、住居形態は縄文時代後期に移っても隅丸方形が多いが、4本柱の支柱穴はあまり見られなくなり、円形の住居の様に壁柱穴の竪穴建物跡が増加している(図4)。

#### 4. まとめ

今回は単純に住居形態のみに注目してみたが、他にも炉跡の形態や出土遺物など検証すべきことは多い。北設楽郡では隅丸方形の住居形態が縄文中期後半から後期半ばまで使用されていたのに対して、同じ様に中期後半まで隅丸方形の住居形態でありながら、なぜ他の地域では円形の住居形態に傾いたのか。人的要因か、地理的要因か。今後は長野や静岡まで範囲を広げて検討していきたい。

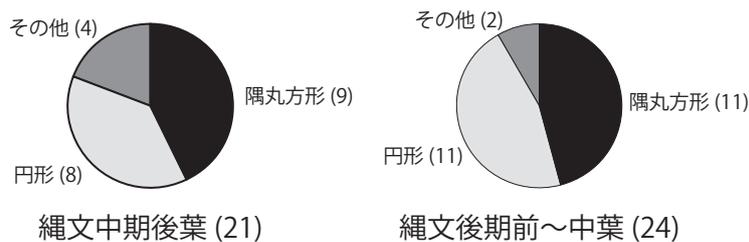


図2 縄文中期後葉～後期中葉までの北設楽郡の住居形態の比率の変化



図3 縄文中期後葉～後期中葉までの北設楽郡以外の住居形態の比率の変化

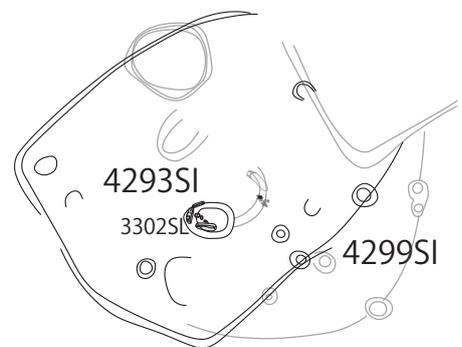


図4 笹平遺跡 4293SI・4299SI(1/100)

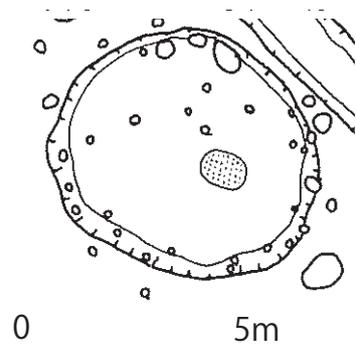


図5 築地貝塚 第1号住居址

## 参考文献

愛知県埋蔵文化財調査センター 2016『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2017『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2018『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2019『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2020『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2021『年報』  
愛知県埋蔵文化財調査センター 2022『年報』  
足助町教育委員会 1988『日陰田遺跡第2次発掘調査が概報』  
渥美町教育委員会 1993『川地遺跡』  
天野暢保ほか 1982「シメ土遺跡」『枳基盤整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査(3)』45-68頁 足助町教育委員会  
天野暢保編 1985『大砂遺跡2』旭町教育委員会  
伊藤憲ほか 2010『浪ノ上 II』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第112集  
伊藤正人 2003「愛知県における縄文集落研究の現段階」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 11-26頁 六一書房  
岩瀬彰利 1997「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文時代住居の変遷について(1)」『三河考古』第10号 1-21頁 三河考古刊行会  
岩瀬彰利ほか 2008『中郷西遺跡・西側北遺跡・西側北1号墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第99集  
岩瀬彰利ほか 2008『洗島遺跡・洗島1号墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第95集  
岩瀬彰利編 2008『眼鏡下池北遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第96集  
岩原剛編 2009『洗島遺跡(II)・西側遺跡(IV)・眼鏡下池北遺跡(II)・中郷西遺跡(II)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第107集  
岩原剛ほか 2011『西側北遺跡(II)・西側遺跡(V)・東側遺跡(I)・眼鏡下池北遺跡(III)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第117集  
岡崎市教育委員会生涯学習課 2006『村上遺跡』  
長田友也編 2007『秋葉遺跡・酒呑ジュリナ遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集  
長田友也編 2008『丸根遺跡・丸根城跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集  
長田友也編 2009『曾根遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集  
長田友也編 2011『水汲遺跡 第2・3・5・6次調査』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集  
長田友也編 2019『今朝平遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集  
長田友也編 2021『沢尻遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第85集  
小野田勝一ほか 1995『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財調査報告書第7集  
蔭山誠一 1996「竪穴住居の地域性が表れる背景 ―弥生時代中期後葉における伊勢湾沿岸地域を中心にして―」『年報』平成7年度 104-116頁 愛知県埋蔵文化財センター  
川添和暁 2013「奥三河地域の縄文時代後晩期の様相について - 東栄町引田遺跡・本郷桜平遺跡を中心に -」『研究紀要第14号』1-10頁 愛知県埋蔵文化財センター

川添和暁編 2019『西地・東地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集  
川添和暁 2020「設楽町津具の大根平遺跡・鞍船遺跡について」『研究紀要第22号』1-16頁 愛知県埋蔵文化財センター  
桑原将人編 2009『天井平遺跡』豊川市教育委員会  
小嶋廣也編 2002『今町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第105集  
斎藤嘉彦編 2001『国指定史跡真宮遺跡』岡崎市教育委員会  
杉浦茂ほか 1996『小針遺跡』知立市教育委員会  
清水正明ほか 1997『間瀬口遺跡』知立市教育委員会  
鈴木茂夫ほか 1981『馬場遺跡概報』愛知県東加茂郡足助町教育委員会  
鈴木茂夫ほか 1986『寺ノ下遺跡』愛知県東加茂郡足助町教育委員会  
鈴木正貴編 2022『笹平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集  
高橋健太郎 2002「東海西部における縄文時代中期後半集落の立地・規模・土地利用」『勢濃尾』創刊号 23-29頁 勢濃尾研究会  
田中俊輔編 2010『柘原遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集  
田原町教員委員会 1981『吉胡貝塚分布調査報告』  
永井邦仁編 2005『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集  
長江洋一ほか 1995『クダリヤマ遺跡』稲武町教育委員会  
宮原佑治ほか 2013『眼鏡下池北遺跡(VI)・西側北遺跡(III)・西側遺跡(VIII)・東側遺跡(II)・洗島遺跡(IV)・中郷遺跡(III)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第125集  
成瀬憲作ほか 2002『花本遺跡・万加田遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集  
樋上昇編 2020『川向東貝津遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第213集  
樋上昇編 2022『大栗遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第218集  
久永春男ほか 1995『芋川遺跡』刈谷市教育委員会  
増子康眞編 1995『ヒロノ遺跡緊急調査報告書』稲武町教育委員会  
前田清彦編 1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会  
増子康眞ほか 1999『ヒロノ遺跡第2次調査報告書』稲武町教育委員会  
増子康眞 2001「愛知県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』451-468頁 縄文時代文化研究会  
松井直樹編 2005『枯木宮貝塚I -N地区-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集  
松井直樹編 2006『枯木宮貝塚II -S地区-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集  
宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版  
余合昭彦編 1993『三斗目・三本松遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集  
渡邊峻 2022「設楽町の縄文時代竪穴建物跡の比較・分析」『研究紀要第23号』57-62頁 愛知県埋蔵文化財センター

# 九州地域の縄文時代貝輪について

## —東海地域からの視点—

● 川添和暁

九州地域の縄文時代・弥生時代では、貝輪風習が盛行する。本稿では、縄文時代の貝輪資料に焦点を当て、貝輪群の構造性を把握し、九州地域における縄文時代社会の共通性と地域性を追究する。地域・時期により主体となる貝種が異なることに加えて、ベンケイガイ製とフネガイ科製については独特な加工・装飾を施す事例が出現することを確認した。貝輪は女性との関係性が強い資料であることから、上記を指標とする貝輪群の範囲は、女性側の事情を色濃く示す当時の社会小地域を反映したものと考えられる。また、後期前葉を主体とする九州地域から晩期を主体とする吉備地域・東海地域で出現する多数着装事例の出現は、現象の共通性の一方で、着装者の当時の社会的位置について各地域での位置づけが必要であるとした。

### 1. はじめに

考古資料の分析には、さまざまな視点があるにも関わらず、一見、単純と見過ごされてしまうことから、詳細な分析が等閑視されてしまう場合が多いと、筆者は感じている。筆者が継続して扱っている貝輪のこの部類に入るものである。九州地域の貝輪資料は、別途扱う必要があると考えており、後期初頭（中期末）から後期後葉の資料について、継続して調査している。先に福岡市桑原飛籬貝塚の事例を中心に分析結果を提示した（川添 2013、以下これを前稿とする）。本稿はこの前稿を受けて九州地域の縄文時代貝輪の構造群について論じていく。但し、南海性貝種の棲息域となる奄美・トカラ列島以南の資料については、筆者の理解が極めて限定的であることから、今回は見合わせた。

なお、貝種についてであるが、研磨工程が進んだ資料では貝種の特定の難しい資料も実際に多いことから、科や属、類などと包括した名称で示すこととする。フネガイ科には、サルボウガイ・サトウガイ・アカガイが含まれている。タマキガイ科としてはベンケイガイ・タマキガイ・トドロキガイが報告されているが、筆者はこれまでベンケイガイを包括する名称としても使用しており、本稿でもタマキガイ科の三種を包括して、ベンケイガイと呼称する。

### 2. 九州地域の貝輪の研究史

貝輪研究史については、以前まとめたことがあるので、そちらを参考願うこととしたい（川添 2011）。九州地域の貝輪研究史について、簡単に概略のみを述べておく。当地域においては、山鹿貝塚の調査・報告・分析が一つの画期をなす（永井ほか 1972）。木村幾多郎は生前着装使用していた貝輪と、埋葬に使用された貝輪の存在を提示した（木村編 1980）。貝輪製作について述べているものに、鹿児島県川上貝塚資料（新東 1991）や、福岡県山鹿貝塚資料（松永 1995）を扱った論考などがある。2000年代に入ると、九州縄文研究会で装身具が取上げられ、資料集成および考察が行われた（九州縄文研究会 2005）。

九州地域の貝輪については、2000年以降、河仁秀が注目すべき論を展開している。自身が調査した釜山広域市影島区東三洞貝塚出土資料の分析を進めた結果、貝輪製作遺跡の様相に言及し、その供給先について、佐賀貝塚をはじめ、日本側への流通に言及している（河仁秀 2004 など）。

### 3. 資料の出土状況

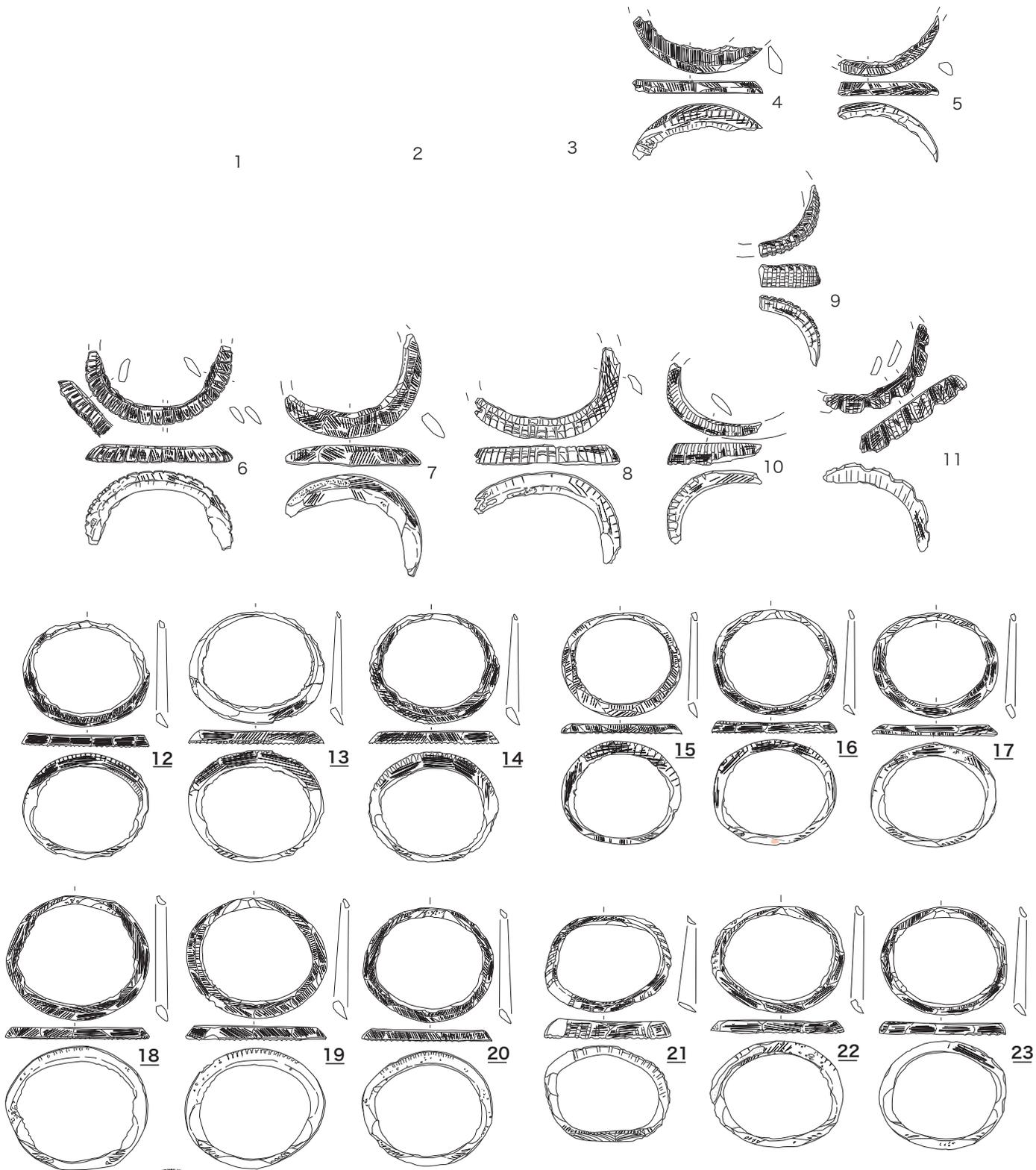
3-a. 時期・地域別の状況（図1・表1～表3）  
九州地域の貝輪の出土について、管見に及



表2 九州島を中心とした縄文時代貝輪出土遺跡一覧(2)

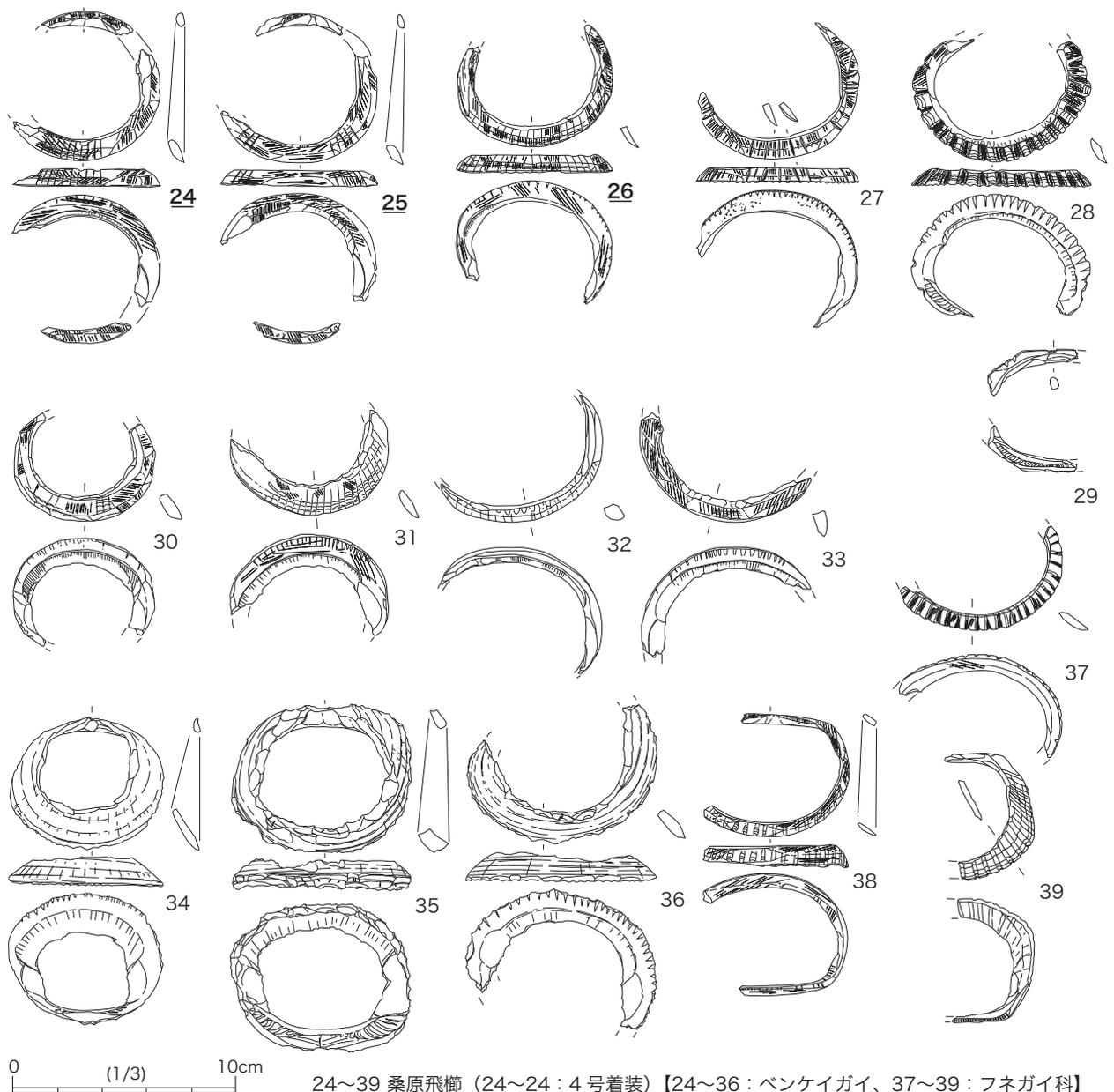
※作成に際しては、九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集 を参考に、加筆・修正した。

遺跡名	所在地	大別時期	詳細時期	ベンケイガイ	フネガイ科	(Kureha)(Nanryu)	ツノクガイ	イタボガキ科	アカシ	マツバガイ	ユキノカサ	アツヒ類	オオタンハ	ゴボウ	その他(未命名)	備考	文献		
白浜貝塚	長崎県五島市向町	晩期後半～弥生前期		3	1										1		安楽 勉編 1980『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書第2集		
宮下貝塚	長崎県五島市宮下町	後期		56	31	3?	3	1								別にベンケイガイの素材貝2	廣川光夫ほか 1968『宮下遺跡調査報告(図録編)』長崎県文化財調査報告書第7集 廣川光夫ほか 1971『宮下遺跡調査報告(解説編)』長崎県文化財調査報告書第9集		
江湖貝塚	長崎県五島市大津町	前期			2											フネガイ科はサルボウとある	坂田邦洋 1973『昔式土器に関する研究 江湖貝塚』縄文文化研究会		
佐賀貝塚	長崎県対馬市	後期		131	5	1				5	2	4			1	その他はウミウサギ	正林 護編 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集		
志多留貝塚	長崎県対馬市	後期		1												フネガイ科はサルボウ?	水野清一・樋口隆康・岡崎 敬 1953『対馬』東方考古学叢刊 乙種第六冊 駒井和豊・増田精一・中川成夫・會野壽彦 1954『考古学から見た対馬』『対馬の自然と文化』総合研究報告第2巻 249～279頁 古今書院 坂田邦洋ほか 1976『対馬の考古学』縄文文化研究会		
下本山岩陰	長崎県佐世保市	前期		1				1									麻生 優 1972『下本山岩陰』佐世保市教育委員会		
有喜貝塚	長崎県諫早市	中期～後期			1											フネガイ科はサルボウとある	秀島貞康 1984『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第5集		
粉洞穴	大分県中津市本部馬深町	後期初頭		3	2	以上											廣川光夫・内藤芳篤 1977『大分県粉洞穴発掘調査報告—第1・2次調査—』考古学論叢 4. 81～110頁 別府大学考古学会		
植野貝塚	大分県中津市	後期初頭～中津式～小池原式期		4												4	廣川 光夫 1957『大分県(豊前)中津市植野貝塚調査報告』中津市教育委員会		
立石貝塚	大分県宇佐市	後期前葉		2	1												フネガイ科はアカガイ	廣川光夫ほか 1971『立石貝塚』大分県文化財調査報告書 31	
森貝塚	大分県後高田町	後期前葉			3												フネガイ科はアカガイ・サルボウ	樋口清之 1931『大分縣西國東郡河内村森貝塚の研究』『史前学雑誌』3-1. 18～50頁 史前學會	
成仏岩陰遺跡	大分県国東市	早期			2												坂田邦洋 1972『国東町文化財調査報告書 縄文時代に関する研究 成仏岩陰遺跡の調査』国東町教育委員会		
川原田洞穴	大分県杵築市山香町	早期～後期中葉													1	奔走綱。腹縁側を中心に連続した刻目目地される。	岩尾松英・酒匂義明 1964『早水郡山香町大広瀬川原田洞穴の調査』『大分県地方史』34. 13～29頁 大分県地方史研究会		
小池原貝塚	大分県大分市	後期前葉	小池原上層式・下層式	2	1												フネガイ科はアカガイ	廣川光夫・小田富士雄・橋 昌彦 1967『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査』大分県文化財調査報告書 13	
柳貝塚	熊本県上天草市大矢野町	早期末～前期中葉			4												フネガイ科はアカガイ	村上浩明ほか 2001『資料報告』『考古学研究会報告』36. 1～18頁 熊本大学文学部考古学研究室	
轟貝塚	熊本県宇土市	早期末～後期中葉			3										2?	フネガイ科はアカガイ	濱田耕作・榊原政雄・清野謙次 1920『肥後國宇土郡轟村古墳貝塚貝人骨報告』京都帝國大学文学部考古学研究会報告 5		
					4												フネガイ科はアカガイ	村上浩明ほか 2001『資料報告』『考古学研究会報告』36. 1～18頁 熊本大学文学部考古学研究室	
					1	16		1									フネガイ科はアカガイまたはサルボウ	藤本貴仁 2008『轟貝塚 一慶應義塾大学資料再整理報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集	
西岡台貝塚	熊本県宇土市																	平山修一・高木恭二 1977『轟貝塚(西岡台地区)の調査』『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集(本文編)	
曾畑貝塚	熊本県宇土市	前期主体			1													藤本貴仁 2011『曾畑貝塚 一慶應義塾大学資料再整理報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第32集	
尾田貝塚	熊本県玉名市天水町	前期～中期			30			2									フネガイ科はサトウガイ。中にはベンケイガイも含まれているか?	田辺哲夫・坂田邦洋 1981『尾田貝塚 熊本県玉名市天水町尾田における縄文・中期貝塚の研究』『史学論叢』12. 25～169頁 別府大学史学研究会	
若園貝塚	熊本県玉名郡和水町	中期～後期			1													福永光隆ほか 1981『若園』菊水町文化財調査報告書 3集	
阿高貝塚	熊本県熊本市南区	中期～後期前葉		2	3													矢野 寛・山崎春雄 1918『阿高貝塚』『熊本縣史調査報告』第2回 89～95頁 熊本縣教育會史蹟調査部	
					1													西田道世 1978『阿高貝塚』城南町教育委員会	
					7	10	6											帆足俊文編 2005『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告書第223集	
黒橋貝塚	熊本県熊本市南区	中期～後期		3	3													高木正文・島崎孝宏編 1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告書第166集	
御嶽貝塚	熊本県熊本市南区	後期末～晩期初頭														5	貝層未確認 腹縁側削り入れ状の加工のものあり	九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集(熊本県:池田朋生)	
沖ノ原貝塚	熊本県上天草市五和町	前期～後期			4													田辺哲夫・隈昭志 1984『沖ノ原遺跡』五和町教育委員会	
一尾貝塚	熊本県上天草市五和町	後期		18	13		5						1		巻貝? ?	フネガイ科はサルボウ・アカガイ	山崎純男 2000『一尾貝塚』熊本県五和町史資料編(その11)		
大野貝塚	熊本県八代郡水川町	中期～後期																九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会資料集(熊本県:池田朋生)	
浜ノ洲貝塚	熊本県宇城市	後期中葉	鐘ヶ崎式・市来式・北久根山式期	2	45													松本健郎・高木恭二ほか 1987『浜ノ洲貝塚・丸子島古墳』熊本日日新聞社	
					1													濱田邦久 1998『浜ノ洲貝塚』三角町文化財調査報告書第8集	
				3	27		2											波形早季子 2014『熊本県浜ノ洲貝塚出土の貝輪について』『福岡県立大学学術資料センター 研究報告』30. 27～49頁 福岡県立大学研究開発推進機構学術資料センター	
天岩戸岩陰遺跡	熊本県山鹿市菊鹿町	後期～晩期		2														松本健郎ほか 1978『菊鹿川流域文化財調査報告書』熊本県文化財調査報告書第31集	
松添遺跡(松添貝塚)	宮崎県宮崎市	後期後半～晩期前半		2	2													鈴木重治・野間重孝 1974『松添貝塚』宮崎市文化財調査報告書第2集	
江内貝塚	鹿児島県出水市高尾野町	中期			4													中山 豪ほか 1999『松添貝塚 II』宮崎市文化財調査報告書第37集	
																		長野真一編 1992『江内貝塚』高尾野町文化財調査報告書(2)	
出水貝塚	鹿児島県出水市	中期～後期		1	1		1											フネガイ科はアカガイ類 ウミクガイはチリボタン 半環状で両端穿孔あり	島田貞彦・濱田耕作・長谷部原人 1921『薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚調査報告』京都帝國大学文学部考古学研究会報告 6
					2	2												タマキガイ	岩崎新輔・堂込秀人 2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書 11
					5	2									1			フネガイ科はサルガイ	松山初音・大保秀樹 2020『出水貝塚』県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(3) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第201集
麦之浦貝塚	鹿児島県薩摩川内市	中期～後期中葉		46	64				1	5-α			1	α				報告ではベンケイガイ6・トドロキガイ14	中島哲郎・牛之浜修 1987『麦之浦貝塚』川内市土地開発業者
市来貝塚	鹿児島県市来	中期～後期中葉		4	4													フネガイ科はアカガイ 報告のカミガイはベンケイガイか タマキガイとマルサルボウ	清野謙次 1969『日本貝塚の研究』岩波書店
					19	7												新妻晃一・堂込秀人 1991『川上(市来)貝塚』市来町教育委員会	
					14	4	1											新妻晃一・児玉健一郎 1993『川上(市来)貝塚 II』市来町教育委員会	
																		本田道隆 1994『九州本土と南島の交流』『九州の貝塚—貝塚が語る縄文人の生活—』北九州市立考古博物館	
草野貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期		30	54		8			4								タマキガイとトドロキガイ クイガイとサルボウとサトウガイ	出口 浩・中村直子ほか 1988『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
武貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期			4													フネガイ科はサルボウ	泉 拓良ほか 1998『鹿児島県鹿嶋町武貝塚発掘調査報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書 16
柘原貝塚	鹿児島県垂水市	後期		24	28		4											その他はナガザルガイ	羽生文彦・宮迫佑治 2005『柘原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)



1~3 榎坂、4・5 黒崎、6~11 新延、12~23 山鹿 (12~14 : 2号左腕、  
15~17 : 2号右腕、18~20 : 3号左腕、21~23 : 3号右腕)  
【1~8・12~20・22・23 : ベンケイガイ、9~11・21 : フネガイ科】

図3 九州地域の縄文時代貝輪1 (北部九州域)【縄文時代後期】



24~39 桑原飛櫛 (24~24: 4号着装) 【24~36: ベンケイガイ、37~39: フネガイ科】

図4 九州地域の縄文時代貝輪2 (北部九州域) 【縄文時代後期】

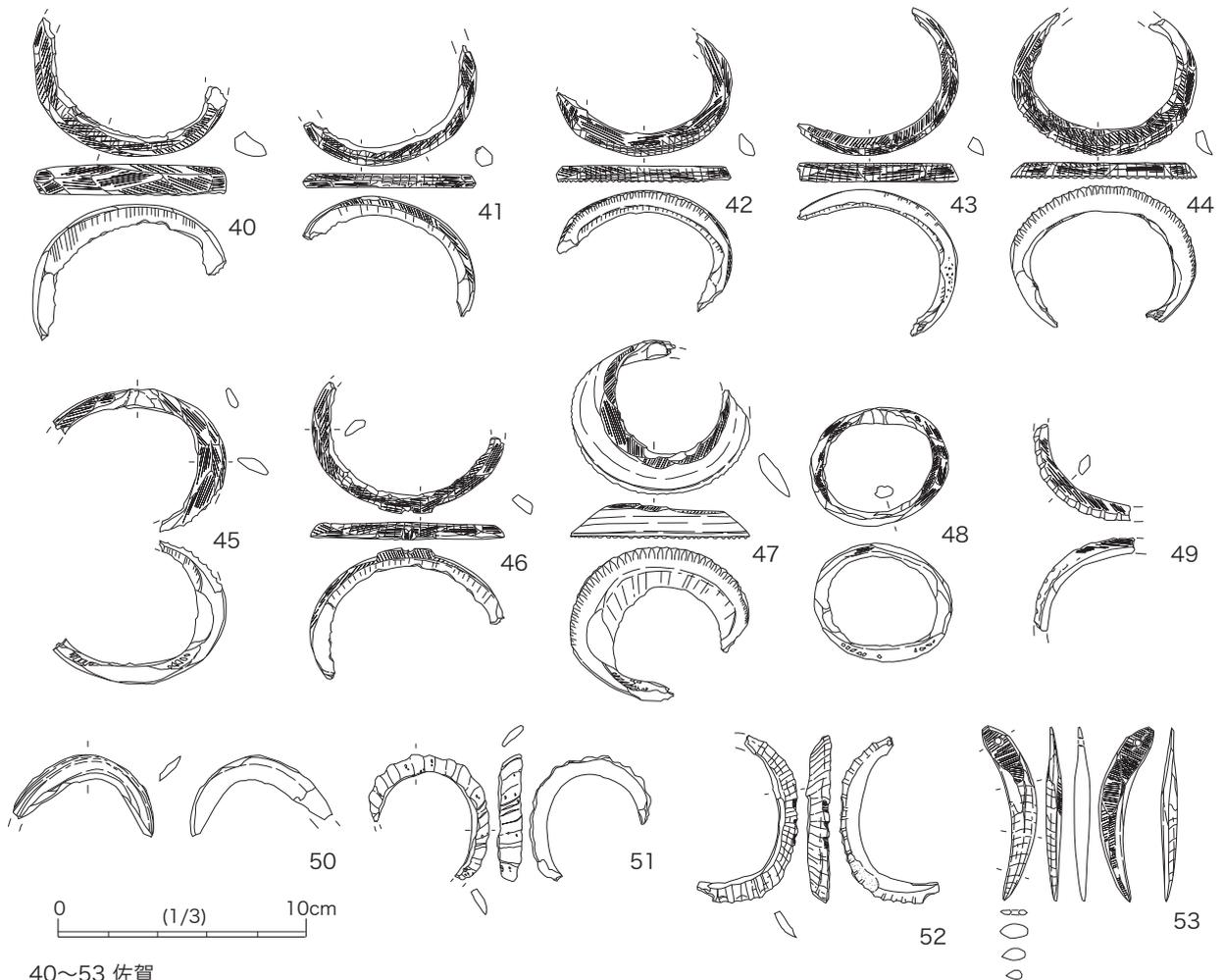
ぶ限り把握した点数を表1・表2に、遺跡の位置については図1に示した。54遺跡、総計約1,300点の資料の存在を確認した。出土遺跡の地理的状況を見ると、以下の地域に分けられる。

- A地域：玄界灘沿岸域 (西北九州域1)
- B地域：対馬列島 (西北九州域2)
- C地域：五島列島 (西北九州域3)
- D地域：国東半島・別府湾沿岸 (東九州域)
- E地域：有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島沿岸 (中九州域)
- F地域：甌海峡および日南海岸以南 (南九州域)

時期としては、縄文時代早期末から顕在化し、晩期末までの以下の5期に分けられる。

- I期：早期末～前期初頭
- II期：前期～中期
- III期：後期初頭～後期中葉
- IV期：後期後葉～晩期
- V期：晩期末～

以上の内容をまとめたのが表3である。対象地域全体で資料が確認されるのは、III期 (後期初頭～後期中葉) で、この時期が最も貝輪資料が多く見つかっている。一方、E地域 (有明湾



40~53 佐賀

【40~48：ベンケイガイ、49：フネガイ科、50：マツバガイ、51：ユキノカサ？、52：サルアワビ、53：キバノロ犬歯】

図5 九州地域の縄文時代貝輪3（対馬・五島列島）【縄文時代後期】

岸・八代海沿岸・天草諸島岸域）では、I期（早期末～前期初頭）・II期（前期～中期）の事例がまとまっており、内湾域の当地は先行して貝輪風習が盛行した地域であったといえよう。

### 3-b. 人骨着装・共件事例（表4）

九州地域は、日本列島内でも人骨着装および共伴の貝輪事例が数多く確認されている地域で、人骨着装状態の事例は10遺跡18例である。時期別にみるとII期（前期～中期）が5例で、いずれもC地域（中九州域）に集中する。一方、III期（後期初頭～後期中葉）が13例で、A地域（玄界灘沿岸域）における集中が著しい。榎坂貝塚・山鹿貝塚・桑原飛櫛貝塚・新町貝塚では、5点以上の多数着装事例が集中しており、特に山鹿

貝塚では人骨着装事例の7例のうち、多数着装が6例と圧倒的な集中を示す。

人骨共件事例は3例を確認した。このうち、尾田貝塚の事例は、着装状態にあった可能性もいわれているものであるが、出土状況の記録からみると遊離した状態であった。小川島貝塚および白浜貝塚の事例はいずれも晩期末以降の事例である。小川島貝塚は人骨集中域からの出土（130・131）\*、白浜貝塚は小児骨に伴って出土したとされるものである。実際、当該資料である135は、内周縦3.70cm・内周横3.01cm・内縁周10.75cmを測り、法量は小さい。

人骨の性別が報告されているものを見ると、女性や小児に関係する事例が多く、日本列島で

\*数字のみは、図3～11の資料番号を示す。以下同じ。

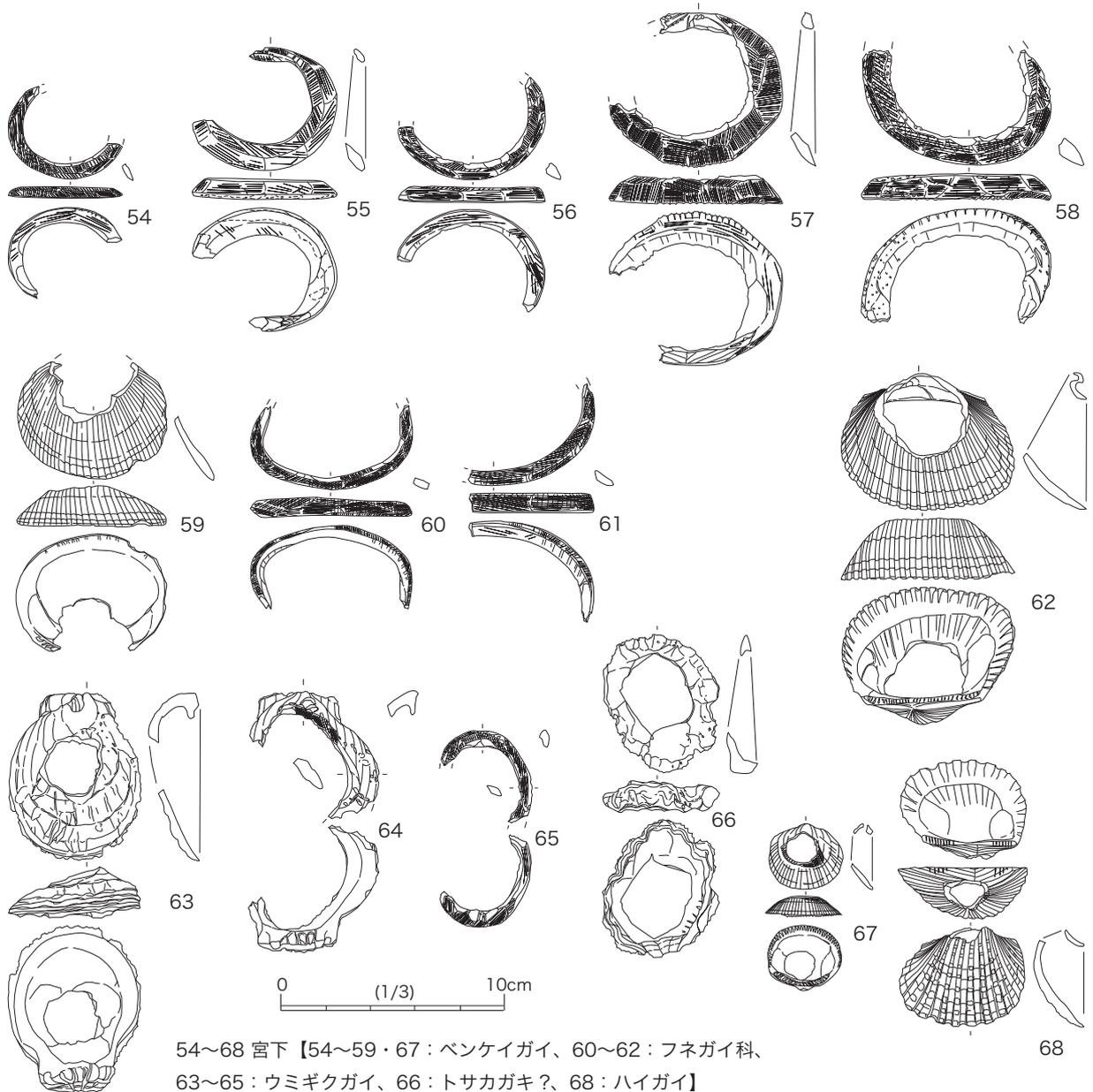


図6 九州地域の縄文時代貝輪4（対馬・五島列島）【縄文時代後期】

知られている貝輪装着事例とは相違ない。古月貝塚および志多留貝塚では男性人骨との装着が、尾崎貝塚では共伴事例が報告されている。日本列島全域でも、共伴事例として静岡県蜷塚貝塚で男性人骨脇から出土したイタボガキ右製貝輪が知られている程度と極めて少ない。

榎坂貝塚資料では、人骨装着資料（未実測）と包含層出土資料（1～3）では、研磨工程を経たことで想定される腹縁部断面形状による製作の在り方が著しく異なっていた。生前装着使用貝輪と埋葬時使用貝輪との別存在を提示した

木村幾多郎の指摘を追認することができる（木村編 1980）。

#### 4. 貝種別検討

ここでは、貝種別に資料を概観していく。

4-a. ベンケイガイ 725点を確認した。点数としては全体の5割以上を占めており、広く出土しているように見える。しかし、E地域（有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域）では、点数自体が少ない上に、いずれの資料も複数回敲

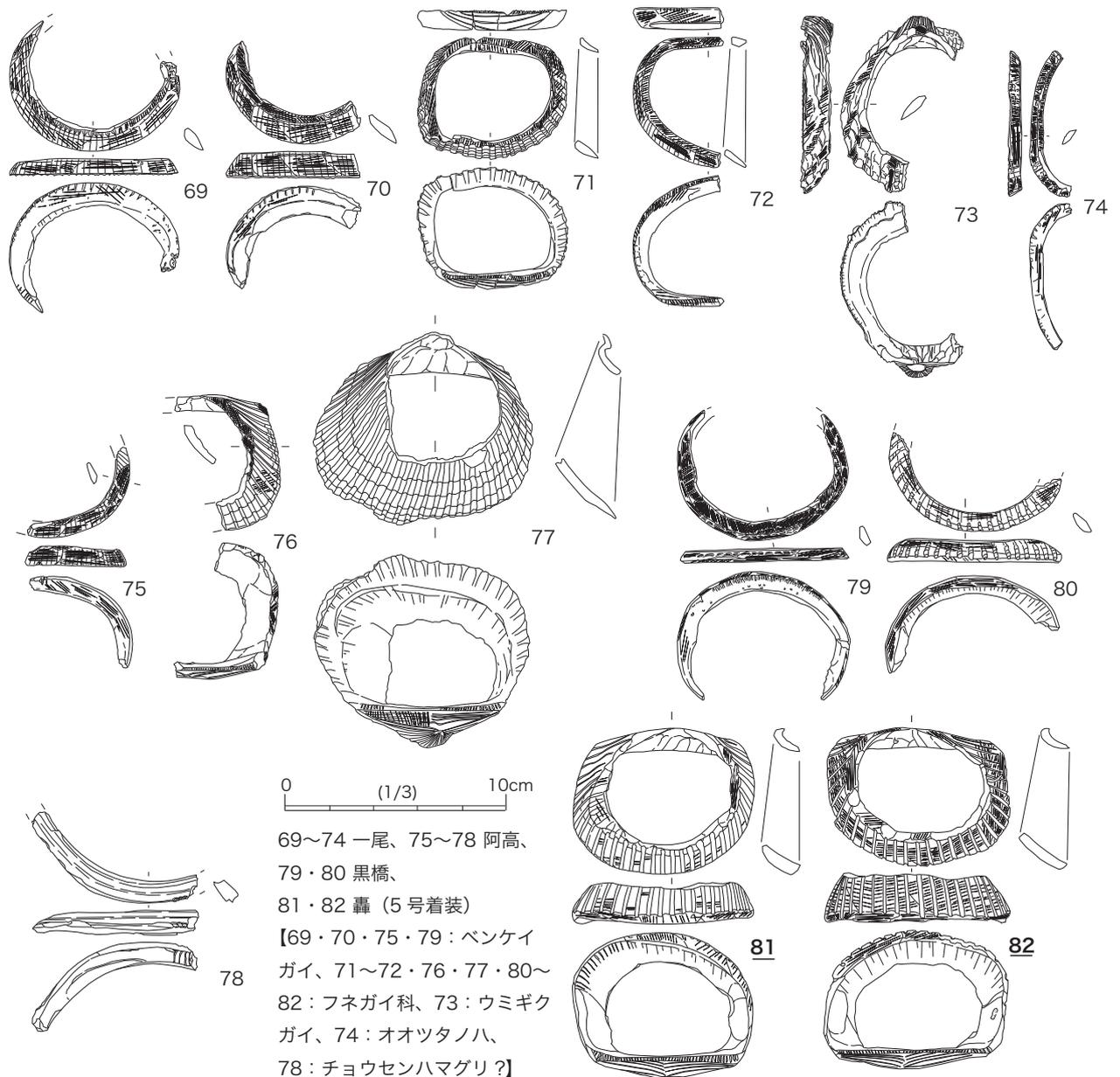


図7 九州地域の縄文時代貝輪5 (熊本・宇土半島・天草地域)【縄文時代前期~後期】

打+研磨と、搬入資料である様相を呈する。なお、B地域(対馬列島)では敲打状態で終了している資料はほぼ皆無である(表5)。

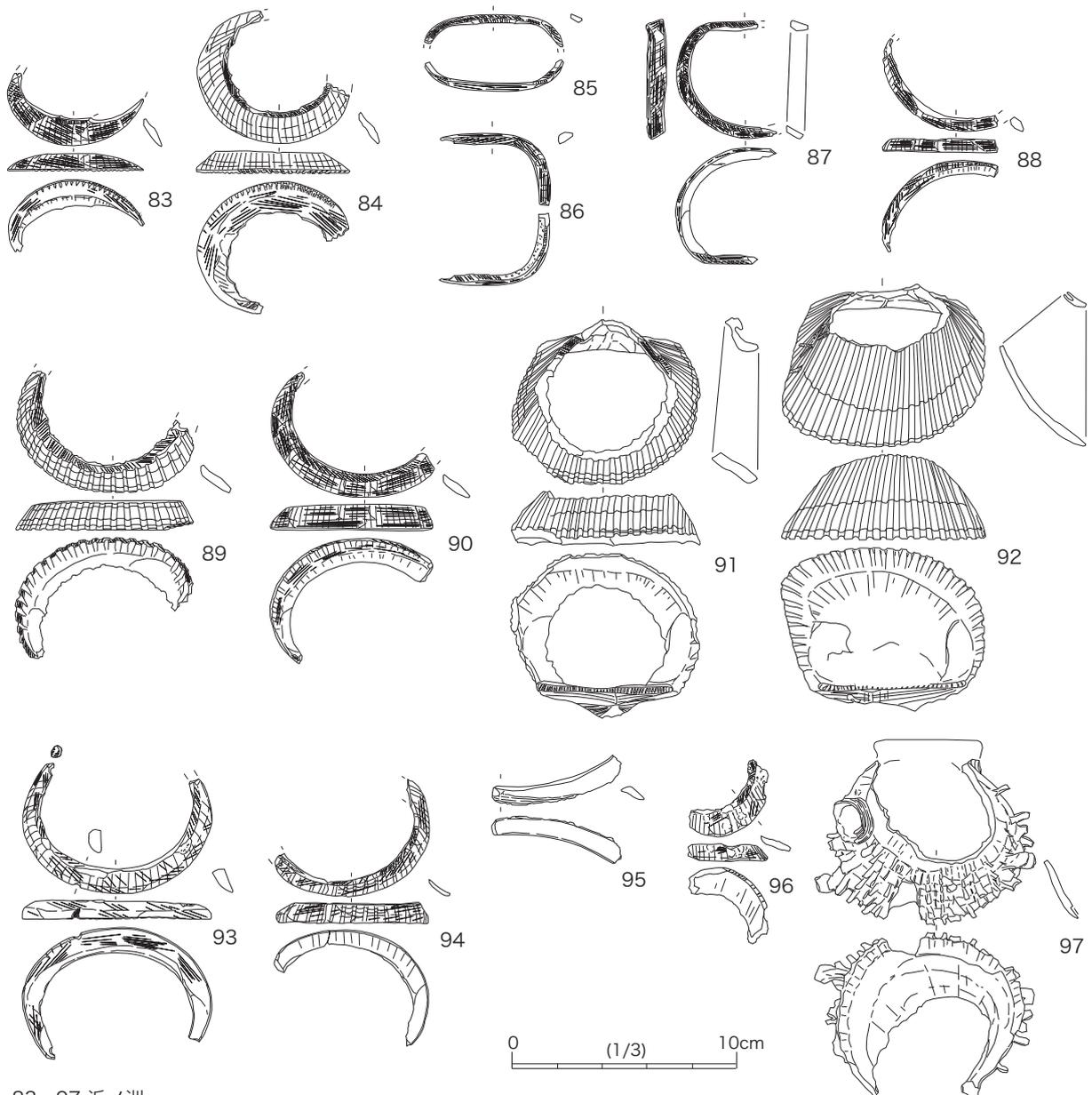
平面形状は環状を呈するものが圧倒的多数であるが、希に半環状を呈する事例もある(93)。

**4-b. フネガイ科** 543点を確認し、全体の約4割を占めることから、ベンケイガイ同様に貝輪貝種の主体となっている。ベンケイガイ製とは対照的に、E地域(有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域)での主体となっており、初回敲打以降、各工程の資料をみることができる(表

5)。早期末の東名遺跡事例では、ベンケイガイを含まないフネガイ科主体となっており、当地域の本来の貝輪資料の在り方を彷彿させるものである。

**4-c. ウミギクガイ** 24点を確認した。A・B・D地域以外で出土しており、草野貝塚では8点と最もまとまって出土している。貝殻は鮮やかな橙から赤紫色を呈するもので、色調的な理由から好まれたものと考えられる。

**4-d. マツバガイ・ユキノカサ・アワビ類** マツバガイは11点、ユキノカサは2点、アワビ



83～97 浜ノ洲、

【83・84・93：ベンケイガイ、85～92・94：フネガイ科、95：アワビ類、96・97：ウミギクガイ】

図8 九州地域の縄文時代貝輪6（熊本・宇土半島・天草地域）【縄文時代後期】

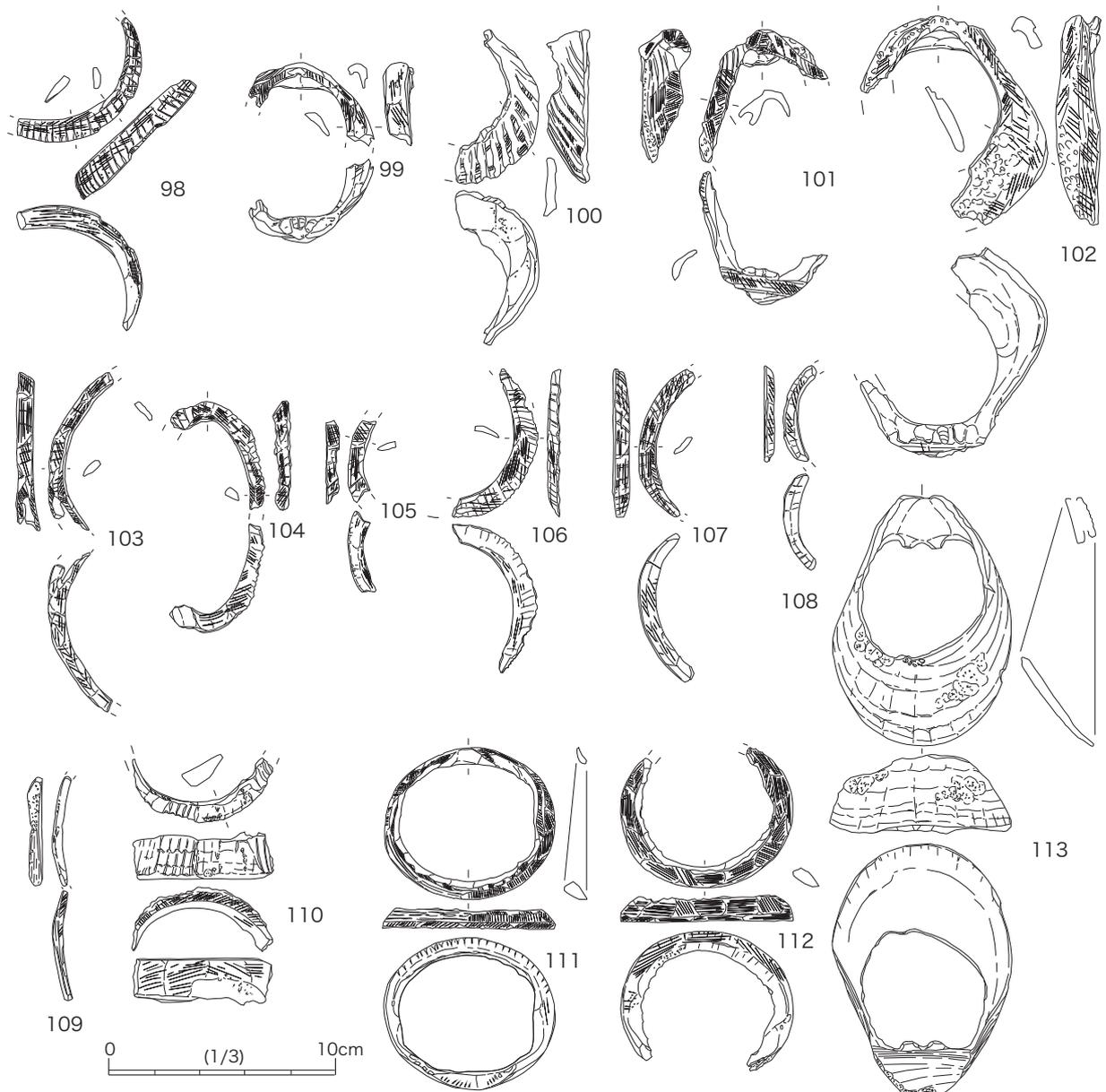
類は4点である。上述したウミギクガイ製の出土地域に加えて、B地域（対馬列島）でも確認されるものである。

**4-e. 南海産貝種** オオツタノハ5点、ゴホウラ2点である。

オオツタノハ製は東名遺跡で3点出土している。東名遺跡では、フネガイ科が貝種として圧倒的多数を占めるなか存在していることに加えて、当地におけるオオツタノハ利用の最古の例

としても注目される。また縄文時代後期の事例としては一尾貝塚と市来貝塚で出土している。

一方、ゴホウラ製は小川島貝塚と出水貝塚で各1点出土している。特に小川島貝塚例（134）は素材を縦切りした円環状を呈するもので、いわゆる大友型貝輪（藤田・東中川ほか1981）として知られているもので、弥生時代前期に属する可能性が高い。



98～110 麦之浦、111～113 市来

【98・111・112：ベンケイガイ、99～102・113：ウミギクガイ、103～105：オオツタノハ、106・107：マツバガイ、108：カサガイ類、109：アワビ類、110：アカニシ】

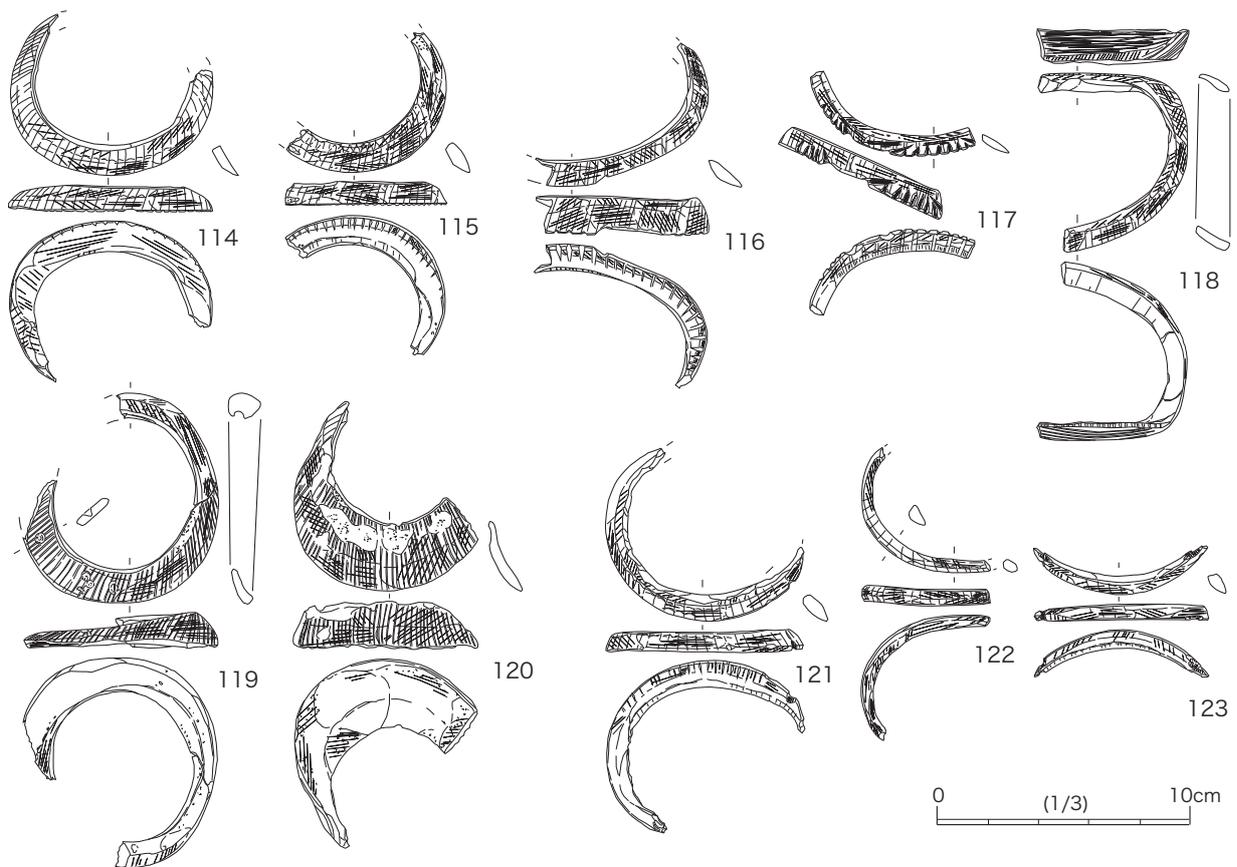
図9 九州地域の縄文時代貝輪7（甌海峡沿岸）【縄文時代後期】

## 5. 加工について

Ⅲ期（後期初頭～後期中葉）のベンケイガイ・フネガイ製貝輪には、特徴的な加工装飾が認められ、加えてベンケイガイ製貝輪には独特な加工志向が認められることを、前稿で述べた（川添 2013）。今回は対象範囲を広げて、再度検討

をしていくこととする。

5-a. ベンケイガイ製腹縁側の断面形状 ここでは、A地区の桑原飛櫛貝塚、B地区の佐賀貝塚、C地区の宮下貝塚、の3遺跡の資料を中心に分析を試みた。この3遺跡はいずれもベンケイガイ製主体の貝輪群となっており、構成比では、各貝輪群とも、6割以上がベンケイガイ製貝輪である。ベンケイガイ製貝輪に引き続く貝



114～120 草野、121～123 柘原  
 【114・115・121～123：ベンケイガイ、116～118：フネガイ科、119・120：ウミギクガイ】

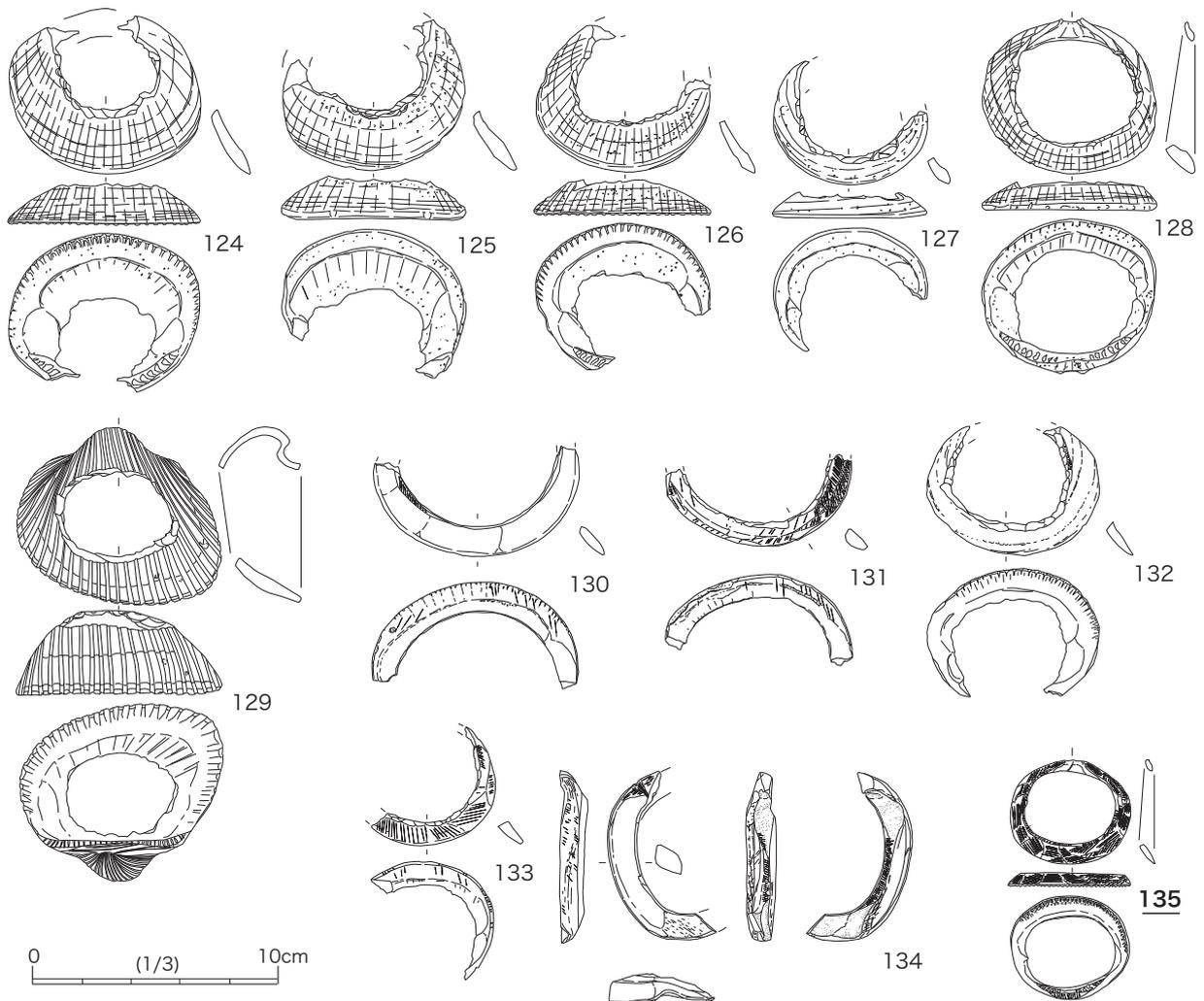
図10 九州地域の縄文時代貝輪8（鹿児島湾岸地域）【縄文時代後期】

種がフネガイ科である。佐賀貝塚・宮下貝塚では、桑原飛櫛貝塚よりも他貝種が多く認められるにも関わらず、点数としてはベンケイガイ製貝輪の比率の高い（表6）。

全体の法量を示すものに、外形の大きさと内周の法量がある。外形の大きさとして、全縦の値を代表させた場合、佐賀貝塚では5.4～7.3cmの範囲におさまる一方で、宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚では全縦5cm未満と、より小型のものも存在していることが指摘できる。また、内周の法量は内縁周で代表させたが、その値では宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚では、佐賀貝塚よりもより小型のものが存在している可能性が指摘できる（図13左）。

多くの形態の特徴が集約される腹縁部の断面形状を注目していくこととする。これについて、3遺跡のベンケイガイ製貝輪群について分類を行なったのが図12であり、表6中段にはそれ

による分類を表記した。この分類によると、全貝輪群で共通しているのは断面形状B-3であり、桑原飛櫛遺跡では加えて断面形状B-2も多く認められることから、断面形状B-2・B-3が、西北九州地域で広く共通して認められる貝輪形状であると指摘できる。このことは、貝輪製作の最終段階で、置砥石などによって上面全体を研磨調整したことが想定される。また断面形状C-1・C-2・C-3を呈するものの存在が、注目される。断面形状C群は西北九州域全体で共通する形状にさらに加工が加えられているもので、表中では佐賀貝塚でまともな状態を確認することができる。桑原飛櫛貝塚でも断面形状C-3を1点確認している（32）。またそれとは別に複数回敲打の資料で腹縁部に連続敲打を行なっている事例（35）も確認しており、ここから研磨工程を経ると断面形状C-3になる可能性がある。桑原飛櫛貝塚では、腹縁側断面形状C



124～129 夏井ヶ浜、130～134 小川島、135 白浜

【124～128・130～133・135：ベンケイガイ、129：フネガイ科、119・120：ウミギクガイ、134：ゴホウラ】

図 11 九州地域の縄文時代貝輪9（北部九州地域・五島列島）【縄文時代晩期末】

にも対応した製作+使用遺跡であるといえる。

佐賀貝塚における断面形状C群のまとめりにについては、対馬海峡を挟んだ大韓民国釜山市影島区東三洞貝塚出土資料との関係が想起される。東三洞貝塚では貝輪貝種の主体はベンケイガイであり、これまでに2000点ほど出土している。各段階の加工状況を示す資料が揃っており、東三洞貝塚も製作+消費遺跡である。一方、佐賀貝塚では初回敲打を示す貝輪資料が存在しない点、さらには舌状貝器と呼ばれる遺物が出土していない点から、貝素材が直接搬入された遺跡ではない。また佐賀貝塚では、複数回敲打以降の加工の各段階を示す資料が認められることから（表5）、他の遺跡からの搬入が想定される。

確かに、佐賀貝塚に最も近く、初回敲打を示す資料と舌状貝器の両者が出土している遺跡は東三洞貝塚であり、河仁秀が論じたように、東三洞貝塚から佐賀貝塚側に貝輪が搬入された可能性は高い（河仁秀2004：93～94頁）。40・41などは河仁秀がⅢ型式として分類し、東三洞型貝輪と提唱した（河仁秀2019）ものに相当するであろう。佐賀貝塚では大陸に棲息するキバノロ製垂飾（53）が出土するなど、韓半島南海岸との交流がより顕在的である。一方、九州島に関しては製作状況を示す桑原飛鶴貝塚の事例のほかにも、山鹿貝塚などで初回敲打の資料が報告されており（表5）、九州島の中で素材貝採取からの製作が行われたものと考えられる。

表3 九州地域縄文時代貝輪出土遺跡の地域・時期一覧（赤字は表4該当遺跡）

地域	A地域 玄界灘沿岸域 (西北九州域1)	B地域 対馬列島 (西北九州域2)	C地域 五島列島 (西北九州域3)	D地域 国東半島・別府湾沿岸域 (東九州域)	E地域 有明湾岸・八代海沿岸・天草 (中九州域)	F地域 甕海峡および日南海岸以南 (南九州域)
I期 早期末～前期初頭				成仏岩陰遺跡	東名遺跡・柳貝塚	
II期 前期～中期	楠橋貝塚・新延貝塚・沖ノ島 4号洞穴・下本山岩陰		江湖貝塚		轟貝塚・西岡貝塚・曾畑貝 塚・尾田貝塚・若園貝塚・阿 高貝塚・黒橋貝塚	江内貝塚
III期 後期初頭～後期中葉	黒崎貝塚・寿命貝塚・榎坂貝 塚・山鹿貝塚・新延貝塚・古 月貝塚・鐘ヶ崎貝塚・桑原飛 鶴貝塚・天神山貝塚・岐志元 村貝塚・新町遺跡	佐賀貝塚・志多留貝塚	鯛川貝塚・宮下貝塚	粉洞穴・植野貝塚・立石貝塚・ 森貝塚・川原田洞穴・小池原 貝塚	有喜貝塚・沖ノ原貝塚・一尾 貝塚・大野貝塚・浜ノ洲貝塚	出水貝塚・麦之浦貝塚・市来 貝塚・草野貝塚・武貝塚
IV期 後期後葉～晩期					御領貝塚・天岩戸岩陰遺跡	松添遺跡・柗原貝塚
V期 晩期末～	夏井ヶ浜貝塚・小川島貝塚		白浜貝塚			

表4 九州地域縄文時代貝輪着装・共伴人骨など事例一覧（片岡1983に加筆・修正）

遺跡名	時期	人骨番号(遺構)	年齢・性別 など	着 装 位 置 ・ 貝 種 ・ 個 数			備考
				左	右	伴って出土	
榎坂貝塚	後期中葉		老年・女性	ベンケイガイ 29	0		
山鹿貝塚	後期	1号	熟年・女性	フネガイ科 11	フネガイ科 1		福永・舟橋2019により 貝種が見直される
		2号	成年・女性	ベンケイガイ 14	ベンケイガイ 5		
		3号	成年・女性	ベンケイガイ 15	ベンケイガイ 9・フネガイ科 2		
		5号	成年・女性	ベンケイガイ 5以上	ベンケイガイ 6以上		
		9号	成年・女性	0	ベンケイガイ 3		
		16号	成年・女性	ベンケイガイ 13	ベンケイガイ 2		
17号	熟年・女性	ベンケイガイ 20	0				
古月貝塚	後期	1号	・男性	ベンケイガイ 1	0		タマキガイ
桑原飛鶴貝塚	後期初頭(坂ノ下式期)	4号人骨(SR01)	熟年・女性	ベンケイガイ 11・フネガイ科 3	0		
新町貝塚	後期初頭	土壇墓 1	熟年・女性	フネガイ科主体(含ベンケイガイ) 14	フネガイ科 7		
小川島貝塚	晩期末～弥生前期	F区(3～7号) 人骨集中	—	—	—	ベンケイガイ 2?	貝輪出土範囲と埋葬人骨 出土範囲が重なる。
志多留貝塚	後期	1号	老年・男性	ベンケイガイ 1	フネガイ科 1		フネガイ科はサルボウ?
白浜貝塚	晩期末	2号	幼児(1才半)	—	—	ベンケイガイ 1	詳細不詳ながら人骨に伴 って出土
粉洞穴	後期初頭	7号	老年・女性	フネガイ科 1	0		フネガイ科はクマサルボ ウ
阿高貝塚	中期中葉	大正5年調査	老年・女性	フネガイ科 2	0		フネガイ科はアカガイ 樋口1952では左右デン 部に各一個の出土とある
轟貝塚	前期	清野3号	成年・女性	0	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
		清野5号	成年・女性	フネガイ科 1	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
		慶大1号 (1号土壇墓)	成年・女性	ベンケイガイ 1	フネガイ科 1		フネガイ科はアカガイ
尾田貝塚	中期(阿高式期)	第1号人骨	壮年・男性	—	—	フネガイ科 1	左手首位置付近に破片
沖ノ原貝塚	前期～中期 (轟式～阿高式期)	第1次調査第4号	—	ベンケイガイ? 3	ベンケイガイ? 2		左の1点は遊離して左胸 上で出土

※鹿児島県尾崎貝塚での貝輪着装人骨の出土が掲載されている(片岡1983)。しかしこれは、「備前 尾崎貝塚」事例(樋口1952)、すなわち岡山県船元貝塚出土事例の誤認のようである。

表5 ベンケイガイおよびフネガイ科貝輪 加工状況遺跡別一覧

遺跡名	地域別	所在地	時期別	大別時期	ベンケイガイ				フネガイ科				
					素材貝	初回敲打	複数回敲打	複数回敲打 +研磨	素材貝	初回敲打	複数回敲打	複数回敲打 +研磨	
黒崎貝塚	A	福岡県北九州市八幡西区	III期	後期中葉				○					
榎坂貝塚	A	福岡県遠賀郡岡垣町	III期	後期中葉			○	◎					
夏井ヶ浜貝塚	A	福岡県遠賀郡芦屋町	V期	晩期末	△	◎	△	◎	△				
山鹿貝塚	A	福岡県遠賀郡芦屋町	III期	後期中葉	○	○	○	◎					○
新延貝塚	A	福岡県遠賀郡鞍手町	III期	後期中葉				◎					○
桑原飛鶴貝塚	A	福岡県福岡市西区	III期	後期初頭	○		○	◎					○
新町遺跡	A	福岡県糸島市	III期	後期		△	△	○	△	△			◎
小川島貝塚	A	佐賀県唐津市	V期	晩期末～弥生前期			○	○					○
佐賀貝塚	B	長崎県対馬市	III期	後期中葉	△		△	◎					△
白浜貝塚	C	長崎県五島市向町	V期	晩期後半～弥生前期				○					○
宮下貝塚	C	長崎県五島市雷江町	III期	後期中葉	△	○		◎	△				◎
東名貝塚	E	佐賀県佐賀市	I期	早期未葉主体					○	○			○
阿高貝塚	E	熊本県熊本市南区	II期	中期～後期前葉				△	△	○			◎
黒橋貝塚	E	熊本県熊本市南区	II期	中期～後期				△	△	○			◎
一尾貝塚	E	熊本県天草市五和町	III期	後期中葉			△	◎	△	△			◎
浜ノ洲貝塚	E	熊本県宇城市	III期	後期中葉				◎	◎	○			◎
麦之浦貝塚	F	鹿児島県薩川内市	III期	中期～後期中葉	○	○	○	◎	◎	○	◎		◎
市来貝塚	F	鹿児島県市来	III期	後期中葉		○	△	◎	○	△			△
草野貝塚	F	鹿児島県鹿児島市	III期	後期中葉				◎		○			◎
柗原貝塚	F	鹿児島県垂水市	IV期	後期～晩期				◎		△			◎

※各遺跡での相対的な出土数傾向を示す。◎:主体的に多い、○:多い、△:ありもしくは少ない。

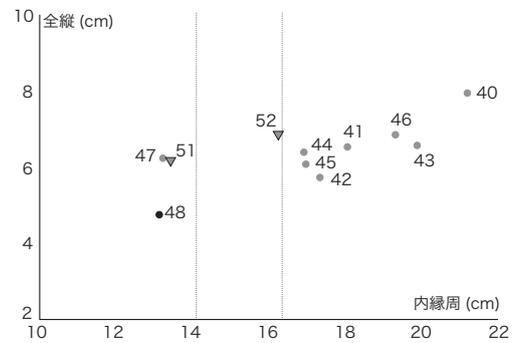
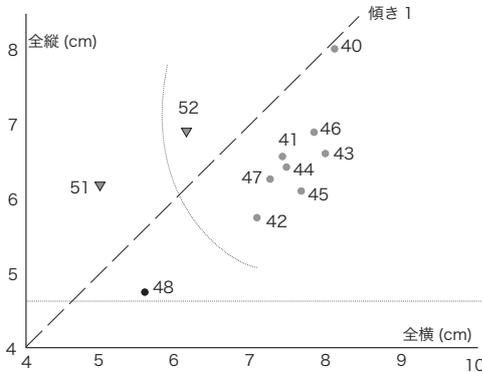
腹縁幅 b・全厚 腹縁幅 b/全厚値	腹縁幅 b > 全厚 0.2 前後	腹縁幅 b > 全厚 0.16 前後	腹縁幅 b ≤ 全厚 0.12 前後
上面非平坦化 (螺審側のみ平坦化 の資料も含む) 腹縁端三角形状	 断面形状 A-1 57	 断面形状 A-2 54	?
上面全体平坦化 腹縁端三角形状	 断面形状 B-1 47	 断面形状 B-2 44	 断面形状 B-3 46 43 58 56
上面全体平坦化 腹縁端 n 角形状 (n ≥ 4)	 断面形状 C-1 45 55	 断面形状 C-2 42	 断面形状 C-3 48 41 40

図 12 西北九州地域縄文時代後期貝輪腹縁側断面分類図

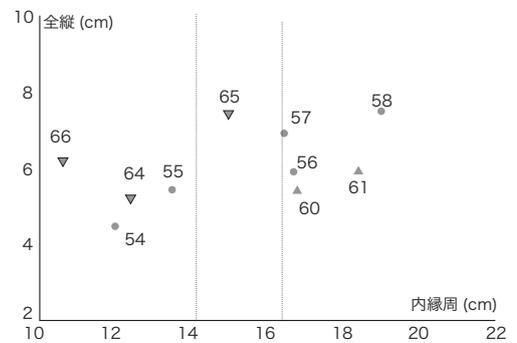
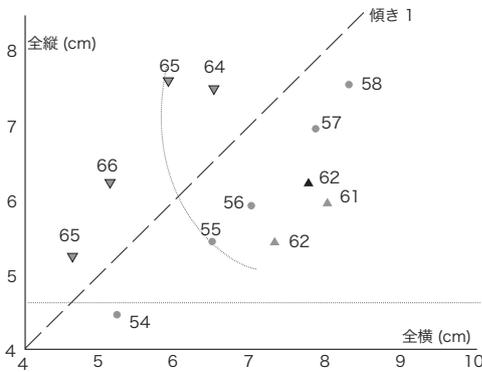
5-b. 放射状の加工 貝輪にはさらにさまざまな加工を加えられることがある。線刻や刻み入れがその代表的な装飾効果であろう。これはベンケイガイおよびフネガイ科を中心に認められる現象で、加飾により付加的な意味や価値を表現する効果があったと考えられる。

装飾加工 α：腹縁側を主体として刻み目などを入れる加工である。九州地域のみならず、東海・関東・東北地域など、縄文時代早期から晩期にかけてしばしば認められるものである。短い間隔で刻むように施される場合と、深く大きな抉

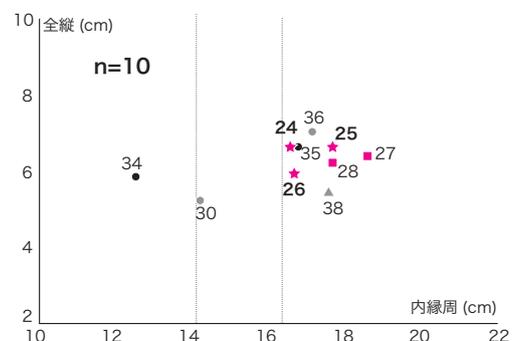
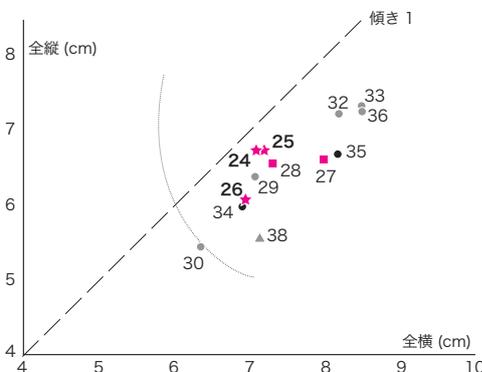
佐賀貝塚 n=11



宮下貝塚 n=12



桑原飛櫛貝塚 n=13



- 完形のベンケイガイ製 (法量実計測値)
- ベンケイガイ製 (法量推定)
- ★ 人骨着装 ベンケイガイ製 (法量推定)
- 刻み目のある ベンケイガイ製 (法量推定)
- ▲ フネガイ科製 (法量推定)
- ▼ ベンケイガイ・フネガイ科以外の貝種製 (法量推定)

図 13 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚出土貝輪 法量計測値散布図 1

表 6 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚における貝輪群の様相一覧

	佐賀貝塚	宮下貝塚	桑原飛櫛貝塚
貝種・点数・割合	ベンケイガイ 131 点 (87.92%) フネガイ科 5 点 (3.36%) チョウセンハマグリ 1 点 (0.67%) サルアワビ 4 点 (2.68%) ユキノカサ 2 点 (1.34%) マツバガイ 5 点 (3.36%) ウミウサギ 1 点 (0.67%)	ベンケイガイ 71 点 (60.68%) フネガイ科 42 点 (35.90%) イタボガキ科 1 点 (0.85%) ウミギクガイ 3 点 (2.56%)	ベンケイガイ 69 点 (75.82%) フネガイ科 22 点 (24.18%)
法量 (全縦推定値)	全縦 5.4 ~ 7.3cm	全縦 4.7 ~ 8.0cm 【2群に分かれるか】	全縦 4.5 ~ 7.6cm 【2群に分かれるか】
法量 (内縁周推定値)	13cm 付近と、16cm 以上の 2 群に分かれる。	10.6 ~ 13.5cm の群と、15 ~ 19cm の 2 群に分かれる。	12.5 ~ 14.2cm の群と 16.5 ~ 18.6cm の 2 群に分かれる。
ベンケイガイ製貝輪腹縁側断面形状 (図 12)	B-1、B-2、B-3、C-1、C-2、C-3	A-1、A-2、B-3、C-1	A-1、B-2、B-3、C-3
ベンケイガイ製貝輪加工の状況 【○：あり、△：稀少、×：未確認】	素材貝△、初回敲打×、複数敲打△、複数敲打+研磨○	素材貝○、初回敲打○、複数敲打×、複数敲打+研磨○	素材貝○、初回敲打×、複数敲打○、複数敲打+研磨○
ベンケイガイ製貝輪加飾の状況	腹縁側に作り出し形成：1 点	なし	側辺に刻み状：1 点 表面上に放射線状の線刻：3 点
人骨着装状態の確認	なし	なし	4 号人骨 (ベンケイガイ 11 点・フネガイ科 3 点)

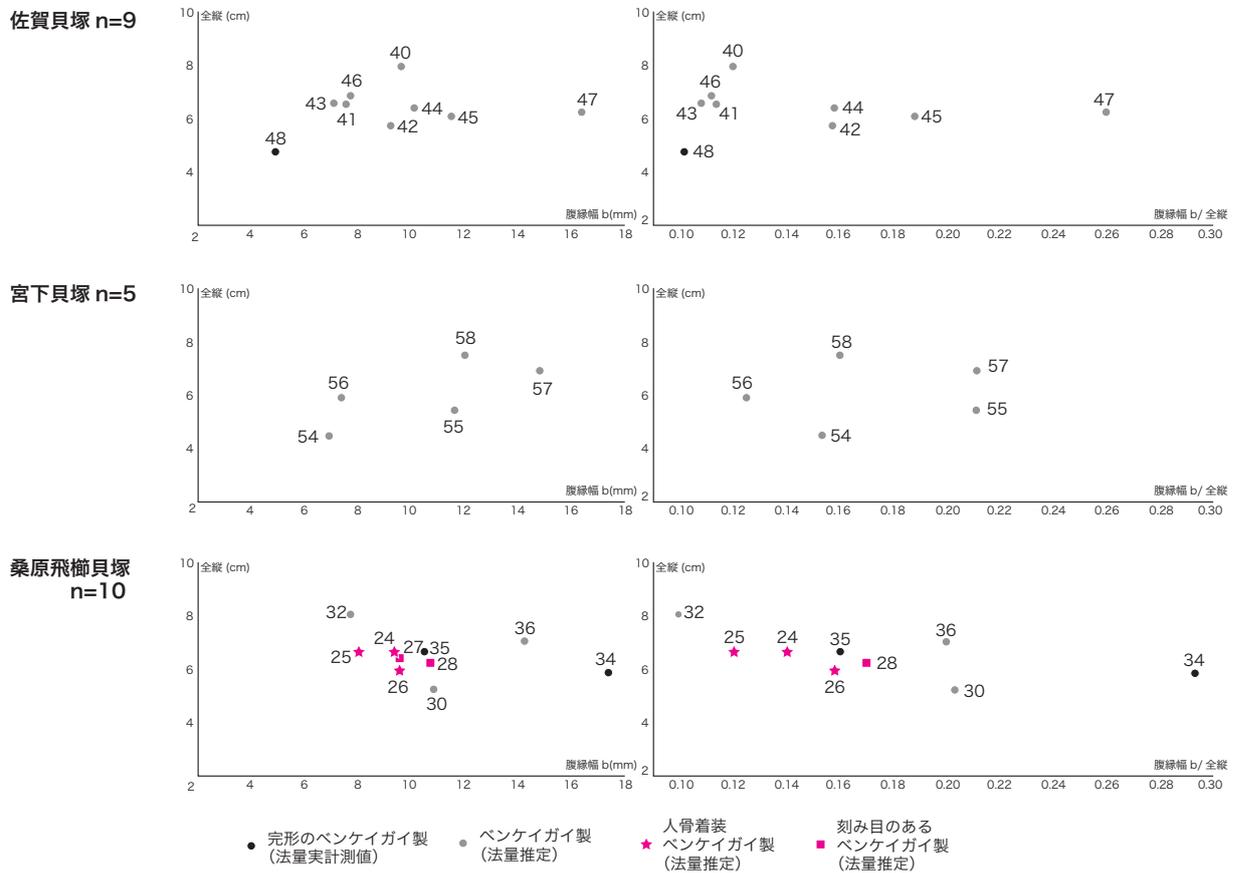


図 14 佐賀貝塚・宮下貝塚・桑原飛櫛貝塚出土貝輪 法量計測値散布図 2

り入りとなっている場合とが認められる。桑原飛櫛貝塚 (29)、佐賀貝塚 (46)、阿高貝塚 (75)、麦之浦貝塚 (98)、草野貝塚 (116・117)、のほか川原田洞穴や御領貝塚でも同様の加工事例が知られている。佐賀貝塚ではサルアワビ製で

も同様の加工が認められる (52)。細かい刻み目の場合、装飾加工  $\alpha$  は後述する装飾加工  $\beta$  との親和性が強い場合もある。

**装飾加工  $\beta$  :** 器表面を主体として線刻などが施されている加工である。場合によっては腹縁

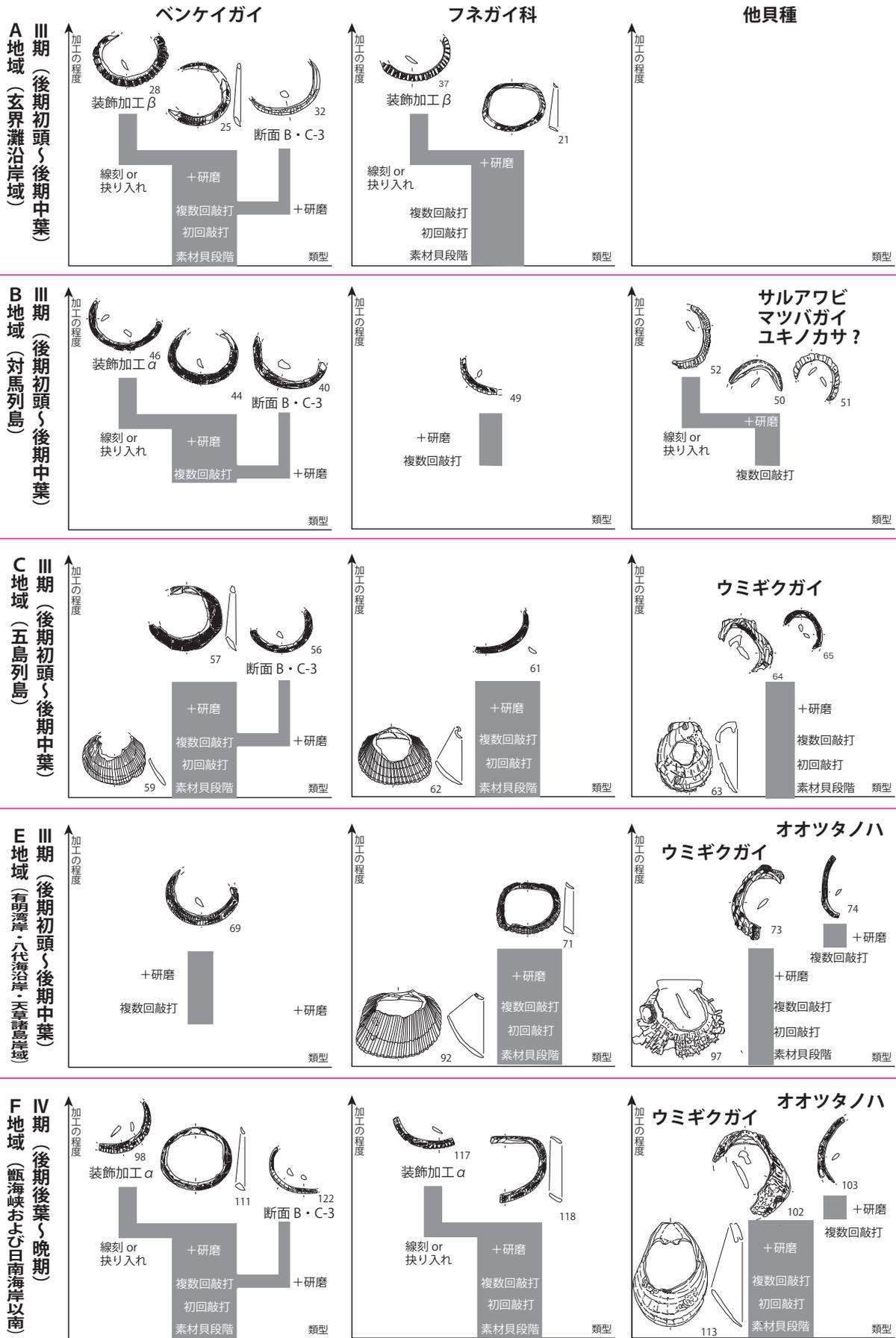


図 15 九州地域内 縄文時代貝輪群の様相

側への加工と連動していることがある。一方、装飾加工βは北部九州地域に特徴的に認められるようである。新延貝塚(6・10・11)、桑原飛榭貝塚(27・28・37)で確認できた。6・27・28はベンケイガイ製、10・11・37はフネガイ科製である。表面への連続した線刻あるいは抉り入れ研磨など丁寧に調整してから施されおり、10・28はベンケイガイの放射条線に対して、11・37はフネガイ科の放射肋を平滑にしてその痕跡を目安に抉り入れを施されている。ところが殻頂部側に近づくにつれて放射肋から外れ、むしろ貝素材の中心に対して放射線状に施されていることが分かる。この装飾の意味を特定することは難しいものの、この形状はカサガイ類の素材貝から製作された貝輪が連想されることから、カサガイ科製貝輪の役割を担わせた可能性も考えられる。このことは、A地域(玄界灘沿岸域)では、カサガイ類の資料が知られていないことと符合する。なお、装飾加工βの類例は、最東は島根県松江市小浜洞穴遺跡例(柳浦2012)で、最北は大韓民国釜山市影島区東三洞貝塚出土資料で認められる\*。

## 6. 九州地域の貝輪の様相

### 6-a. 九州地域の貝輪群の構造的理解

以上の分析・検討から、加工段階と加飾および断面形状などについてまとめたのが、図15である。ここではⅢ期(後期初頭～後期中葉)およびⅣ期(後期後葉～晩期)に焦点を当て、A地域(玄界灘沿岸域)・B地域(対馬列島)・C地域(五島列島)・E地域(有明湾岸・八代海沿岸・天草諸島岸域)・F地域(甌海峡および日南海岸以南)の様相を示した。ベンケイガイ・フネガイ科、そしてその他貝種に分けて示しているが、これらを横断・包括した様相が、各小地域での貝輪資料群の構造として捉えられるものである。縦軸は加工の程度を示しており、トーンラインが横軸線より離れている場合は、加工の程度が進行した資料しかないことを、換言すれば製品に近い状態で搬入された可能性が高

いことを示す。

図15を一瞥して明らかなように、各小地域の様相はそれぞれ異なっている。それでもB地域(対馬列島)以外は、ベンケイガイ・フネガイ科のいずれかの貝種貝輪の製作+使用遺跡の様相を呈しており、貝輪風習自体、各地域内を基本として、素材獲得から製作・消費・廃棄(埋納)が行われ、一部貝種については他地域への流通、もしくは装着者の移動があったものと考えられる。

一方で、これら小地域全体を包括・共通する志向にも注目したい。ベンケイガイおよびフネガイ科を一般的な貝輪素材としつつ、ウミギクガイおよびカサガイ科をやや特別な貝種として位置づけているという傾向である。この傾向を端的に示しているが、A地域(玄界灘沿岸域)でみられる加飾加工βの貝輪資料の存在である。当時の縄文社会は広域で共通した志向がありつつ、小地域では各地の状況により差異が生じていたことがわかる。このことは当時の社会集団のある状態を示している可能性があり、例えばA～Fの小地域は女性の通婚圏などを示しているのかもしれない。

### 6-b. 多数装着事例の意味

貝輪の多数装着事例は、これまで見てきたように、A地域(玄界灘沿岸域)のⅢ期(後期初頭～後期中葉)に集中する。その中でも山鹿貝塚では6例も見つかっており、日本列島全体でも1遺跡内での集中としては現在のところ最多である。多数装着事例といえば、岡山県津雲貝塚清野34号人骨(熟年女性、左8・右7のフネガイ科)や愛知県吉胡貝塚文化財保護協会第19号人骨(熟年女性、左7・右4のフネガイ科)(川添2019)でも見つかっている。九州の事例は縄文時代後期初頭から中葉が中心であるが、津雲貝塚や吉胡貝塚で晩期初頭～前半と、時期は新しくなると考えられる。一方、関東地域では茨城県三反田蛭貝塚4号人骨(成人女性)で左腕にベンケイガイ13点の多数装着事例が知られている(鈴木2019)。時期が縄文時代中期末～後期初頭であることから、むしろ九

\* 韓国新石器時代の貝輪を論じた、金恩瑩によると、このような線刻が入れられた貝輪は、東三洞貝塚で見つかっているのみとのことである(金恩瑩2003)。

州地域の多数着装事例と共時的現象であるといえる。関東地域では、この時期以降に多数着装状態を模した貝輪形土製品が盛行することからも、西北九州・関東地域と、地域を越えて共通した装身具志向が存在していた可能性がある。上記の現象の意義については、他装身具器種のほか、土器型式や文様意匠の展開を含めてさらに検討する必要がある、今後の課題としたい。

謝辞 本稿を草するに際して、以下の方々および機関には、格別のご配慮およびご教示を賜った。ここに謝意を表する次第である。

赤井文人、阿比留伴次、阿部芳郎、井澤洋一、大塚達朗、小田富士雄、金 建洙、古後憲浩、新町 正、田中 暁、中尾篤志、鍋内千亜喜、西田 巖、羽生文彦、深澤太郎、藤井大佑、福

永将大、前 幸男、水上公誠、宮元香織、宮本一夫、山田克樹、山崎純男、分部哲秋

本稿は、JSPS 科研費【課題番号 20K01080】基盤研究 (C)「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」(研究代表者 川添和暁)の成果の一部である。

#### 資料の所在など

1～5：北九州市立自然史・歴史博物館、6～11：鞍手町歴史民俗博物館、12～23・124～129：芦屋歴史の里、24～39：福岡市教育委員会、40～53：対馬市教育委員会(峰町歴史民俗資料館)、54～68：長崎大学医学部、75～80・83～92：熊本県教育委員会(熊本県文化財展示室)、81・82：大阪府立近つ飛鳥博物館、93～97：國學院大學博物館、98～110：薩摩川内市教育委員会、111～113：いちぎ串木野市歴史民俗資料室 114～120：鹿児島市立ふるさと考古歴史館、121～123：垂水市教育委員会、130～134：唐津市教育委員会、135：五島市教育委員会

#### 参考文献

- 阿部芳郎 2019「身体装飾の発達と後晩期社会の複雑化」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』303～320頁 雄山閣  
阿部芳郎・金田奈々 2013「子供の貝輪・大人の貝輪―貝輪内周長の計測と着脱実験の結果から―」『考古学集刊』9. 43～56頁 明治大学文学部考古学研究室  
小田富士雄ほか 1994『九州の貝塚―貝塚が語る縄文人の生活―』北九州立考古博物館 第12回特別展図録  
乙益重隆・前川威洋 1969「縄文後期文化・九州」『新版考古学講座3(先史文化)』雄山閣  
片岡由美 1983「貝輪」『縄文文化の研究』9. 231～241頁 雄山閣  
川添和暁 2011『先史社会考古学―骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期―』六一書房  
川添和暁 2013「福岡市西区桑原飛鳥貝塚出土貝輪について」『貝塚』68.21～27頁 物質文化研究会  
川添和暁 2019「東海地方の貝塚に残された副葬品」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』71～88頁 雄山閣  
木村幾多郎編 1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会  
九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会。  
新東晃一 1991「南九州の縄文後期の貝輪―特に川上貝塚出土の貝輪製作工程について―」『南九州縄文通信』5. 50～55頁  
鈴木素行 2019「資料紹介 三反田のベンケイガイ―貝輪着装人骨と貝輪土製模造品―」『ひたちなか埋蔵文化財』50. 14～18頁 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター  
河 仁秀 2019「東三洞貝塚―貝輪の生産と流通―」『身を飾る縄文人 副葬品からみた縄文社会』181～188頁 雄山閣  
樋口清之 1952「腕輪考」『上代文化』23. 9～19頁 国学院大学考古学会  
藤田 等・東中川忠美ほか 1981『大友遺跡』鳴子町文化財調査報告書第1集  
松永幸男 1995「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集貝製腕輪の紹介」『研究紀要』2. 31～46頁 北九州市立考古博物館  
柳浦俊一 2012「松江市美保関町小浜洞穴遺跡の出土遺物―島根大学考古学研究室所蔵遺物を中心に―」『古代文化研究』20. 45～76頁 島根県文化財センター

#### 韓国側文献

- 中山清隆 1992「韓日地域出土先史貝輪小考」『考古歴史学志』8. 461～470頁 東亜大学校博物館  
金 東鎬・朴 九乘 1989『山登貝塚』釜山水産大学博物館  
金 恩瑩 2003『新石器時代 貝釧 研究』釜山大学大学院 文学硕士学位論文  
河 仁秀 2004「東三洞貝塚文化에 대한 予察」『韓国新石器研究』7. 77～103頁 韓国新石器研究会  
河 仁秀 2006「新石器時代 貝製品 의 種類와 利用」『石軒 鄭澄元教授 定年退任記念論叢刊行委員会  
河 仁秀 2007『東三洞貝塚 浄化地域 発掘調査報告書』釜山博物館



研究紀要 第24号

発行年月 2023年5月

編集・発行 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 一柳印刷株式会社